

---

# 王道で行こう!

たまさ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王道で行こう！

### 【Zコード】

Z8036S

### 【作者名】

たまゆ。

### 【あらすじ】

ルディの夢は父のような立派な騎士になること！ その為にルディに突きつけられた試練は騎士団で三ヶ月見習いとして過ごすこと。大好きな兄と大嫌いな王子様、口が悪いが世話焼きの副長とに囮まれた、そう、これは逆ハーネ物語の 箕だったのです。王道を目指して突き進むつもりが何故か王道になれなかつた、ある平和な国で健気にがんばる男装女子に振り回される周りの人達の日常物語。  
\* 恋愛ジャンルにいましたが、あまりにも恋愛要素が薄い為コメントに移動しました。

## プロローグ

ルディは不機嫌だった。

この不機嫌を何かで示せと言われば、地団駄を踏んで、その表情で、全身を使って示したことだろう。とても、とてもなく不機嫌だった。

八つの離れた兄が帰宅した。

それが原因では勿論無い。  
むしろ兄が帰宅したのはとても喜ばしいことだ。

十四で全寮制の士官学校に入った兄ティナンは、季節ごとの長期休暇しか自宅に戻ることがない。

その待ちに待つた休みで、ルディはティナンからはじめて貰った手紙を握り締めて心から兄の帰還を今か今かと願っていたのだ。

毎日毎日、侍女のマーティアに「今日は何にう?」、「兄さまは、あといくつ寝れば帰つてくる?」とせがむように言つて、最終的にマーティアに苦笑と共に「もう堪忍して下さこませ」とまで言われてしまった。

彼女には彼女の仕事があるのだが、それを邪魔する程の勢いだったのだ。

それに呆れて、マーティアの弟であるセイムが手作りの「若様帰宅カレンダー」を作ってくれた。単純に木板に数字を書いてあり、数字がカウントダウンされているものだ。

それを毎日セイムと二人、ナイフで削る 削り取られたそれは、とつとうもう残りもなくなつたのは昨日。

そう、兄であるティナンは帰宅した。

彼の友人であり、そして主人を連れて。

「なんだ、このちび」

兄さま つつ、と元気に声をあげて玄関から飛び出したルディ  
はびしつと固まつた。兄一人が帰宅すると思つていていたのに、  
そこには馬車が二つ、馬に乗つた騎兵が数名。明らかに兄の帰宅と  
いつには物々しい様相だ。そして馬車からおりた兄は馬車の中に話  
しかけていたのだが、その後に続いて降り立つたのは艶やかな金髪  
の青年だつた。

「兄……さま？」

ルディは怖くなつてたたらを踏んだ。

母代わりである長兄が苦笑しながらルディを招こうとするが、  
それすらルディには見えない。

おりたつた金髪の少年は尊大な様子で「なんだ、このちび」と言  
いながら口の端をあげた。

兄が苦笑する。

「ルディ、おいで」

「……兄さま」

「こちらの方は第三王子殿下、キリシュエータ様だよ」

きちんと挨拶して。とティナンは言つが、挨拶するより先に、そ  
の第三王子殿下はぐしりと手を伸ばし、ルディのお口様のよつた赤  
みの強い金髪の頭に手をおき、ぐしごしこき混ぜたあげく、  
「にんじんみたいだな」

と言つた。

兄達とは違う色が小さなルディにとつて気になるその髪を。

けれど兄達が綺麗だと言つてくれる髪を。

よりもよつて大嫌いなにんじん！？

ルディはその瞬間、力いっぱい王子殿下の綺麗なブーツの先を踏み  
つけた。



わざかな気配にルディは瞳を開けた。

瞬時に手は胸元にある小さな隠しナイフを引き出し、身構える。けれど部屋に入ってきたのが侍女のマーティアだと知ると、気づかれないようにもとの場所に戻した。

「セイムかと思った。もつと足音をたてて入って来ないと危ないよ

「まだおかしな賭け事の最中ですか？」

マーティアは途端に顔をしかめた。

「当たり前。まだ勝負ついてないもの」

ルディは言いながら、マーティアの持つてきた菓子に手を伸ばした。

十六を半ばまで過ぎたルディは父親に無理を言って作つてもうつた軍服姿だ。

父であるエリックは宮廷指南役であり、現在は騎士団顧問を任せている。ルディはその父に直に訓練を受けているのだが、いかんせんルディは士官学校の入学を認められていない。

士官学校に入れないのだから軍人になることもない。

それはとても理不尽なことだと思つ。

軍服に対しての憧れを強めてせがむルディに、仕方ないと正規軍では存在しない薄緑の軍服をこしらえ、胸にはルディの好きな蜂と花を幾何学模様にした紋章までいれてある。

親莫迦だと笑われてもエリックとしては苦笑するしかない代物だ。

いや、エリックならば「親馬鹿」といわれれば相好を崩してその「親馬鹿」っぷりを更に披露してくれることだろう。他人の迷惑など顧みず。

剣の訓練は毎日のようにしているし、勉強だつてしている。得意なのは算学だからあまり騎士といつものに関係はないけれど、それでも一通りの勉強に励んでいる。

頭のいいすぐ上の兄であるルークも勉強を教えてくれようとしてくれるのだが、生憎とルークの教え方はルディにはむいていない。ルークが親切心で教えてくれる勉学はひたすら逃げているので、ルークの得意分野である歴史学とか神学とかは散々だ。

マーティアにしてみれば「もつと違うことを習うべきですの」「元」と小言がきそつだが、ルディはまつたく気にしない。

「勝負勝負と子供のように、いい加減になさいませ」

「そんなわけにはいかないよ。銅貨10枚賭けてるからね」

「またそんな下らしいことを」

ふふんっと鼻を鳴らしつつ、「マーティアがぼそりと言つて下らない？」

「まつたく、莫迦なことをして怪我をしたらどうするのです」「くだらなくないし、莫迦でもないよ。これだつて訓練の一環だもの。何より実用的だし。セイムつてば最近気配の消し方が巧いんだよ。うかうかしているところちが一本とられてしまつ」

御互い牽制しあつてるので、なかなかスキを伺えない。

「兄君さま方、といふかティナン様が聞いたらきつと嘆かれる」とでしょうに

「……ティナン兄さまなんて嫌いだし」

「あら、また拗ねてらつしゃる」

「拗ねてないよ！」

だつて酷いじやないか。最近じやちつとも帰つてらつしゃらない。

いつも殿下殿下つて、殿下がそんなに大事かね！」

あんなのトウモロコシの鬚じやないか。

勢いに任せて言つと、マーティアは額に手を当てた。

「……ええ、わたくしは忘れておりません。

あの秋を こともあらうに殿下の御御足をおふみになつたあなた様を！ おまえなんかトウモロコシの鬚のクセに！ と叫んだあなた様を！

た様を！

生きた心地がしませんでした。

続けられる言葉に、ふんつとルディは鼻を鳴らした。

このまま小言へと発展するだらうとめましをつけ、体の向きを変えて口の中に焼き菓子を放り込む。

最近マーティアときたら小言が多い。何かにつけて文句を言つし「嘆かわしい」が口癖だ。そうなると何を言つても聞き入れず、ただ延々と小言を言つ続けるから、ルディは聞いてるフリをして時々相槌を打つのだ。

と、視線をそらした窓の向こう 正面玄関に続く道を馬が駆けてくるのが見える。途端にぱつと顔が笑みに変わった。

「兄さまっ！」

言つが早いか、この部屋が一階にあるといつ現実を無視して窓辺に手をかけ、とんつと床を蹴つていた。

「ルディさま！」

悲鳴のようなマーティアの言葉を背に受け、ルディは難なく地面へと着地する。

二階程度おりるのに道具など必要は無い。さすがに三階からおりてみようとした時は、セイムにまで止められたので、以来三階の窓から下りる時は鉤先のついたロープを使うようにしている。

海賊が使うという接岸用のものを手本にしたのだが、勿論コレだつて評判はあまり宣しくない。

「兄さまっ！」

「おまえ……またそんなところから！」

上から降つてきたルディに、馬を走らせていたティナンは慌てて

手綱を引や、一の足の内側に力を加えて速度を落とし、ゆっくつと近づくと苦笑する。

ハツ違ひの兄は、昔とちつとも変わらぬ苦笑で馬からおりると、しげしげとルディを眺めた。

「今日はどうしたの？ 連絡も無く来るなんて珍しい」

「近くまで視察で来たものだから、殿下にお許しを頑いてちょっとだけね」

殿下、とこう言葉にルディは顔をしかめた。

「トウモロコシの髪も近くにいるの？」

「そんな露骨に嫌うものじゃないよ」

それにトウモロコシの髪は止めなさい。

兄のやんわりとした口調につんつと顎を剃らせる。

「だつて嫌いだもの」

「いつまでも子供のようなことを」

クスリと微笑み、白手に包まれた手を伸ばしてルディの前髪をかきあげてくれる優しい手。

「まったくもう。

10年間も嫌つてられるなんて結構スゴイね」

苦笑しながらもルディの額にそつと口付けた。

嬉しくてルディは兄の腰に手を回して抱きしめた。

ティナンほど優しくて素晴らしい人はいないとルディは常々思つてているのだ。

「じるじると兄になつていると、すぐにルディはその気配に気がついてしまった。

兄が通つてきた道を、数騎の騎馬が駆ける音がする。それはすなわち トウモロコシの髪に相違ない。

「なんだ、にんじん。相変わらずおにーちゃん子だな  
ふんつと、騎馬の上から憎たらしい声がする。

兄の腰に張り付いたまま、ルディは何事か言つてやううかと口を開

きかけたが、慌ててティナンがその口に血の手でもつて蓋をした。

「皆でお待ちの予定では？」

「気が変わった。殺風景な場所で休むより、おまえの家で休ませてくれ

くれ

勝手な王子はそう言いながら馬からおりた。

相変わらず兄の手がルディの口をふさいでいる為、ルディの暴言はむーむーとしか聞こえない。それを面白がり、随分と身長の伸びた王子殿下は身を屈めるようにしてルディを覗き込み、ぐわしどとの頭に手をおいた。

「なんだ、ちつとも背が伸びてないんじゃないのか？」  
「にんじん。  
肥料が足りてないんじゃないのか？」

「むむむつーつ

「ふふん、何を言つてこるか判らないな

「むむーつ

聞こえていたら確実に不敬罪だ。

必死にルディを押さえ込み、ティナンは「殿下、あまりからかわないで下さい」と声をかけたが、すでに彼には面白い玩具とでも認定されたのか、口の端をあげて気にする様子もない。

「珍しい色の軍服だな。そいえばもう士官学校に入つていってもおかしくない年頃か

「むつむむつーつ

「ま、おまえのようなチビは弱そだから士官学校にも入れないだ

る

「むむむむむうううつ

「士官学校なんて無理ですよ

ティナンは笑つた。

「女の子には」

「 は？」

殿下は一瞬何を言われたかわからず沈黙し、眉を潜めた。  
そのスキをつくよつに、ルディは力いっぱい王子殿下の足を踏みつけ、同時に慌てて手を離してしまつたティナンから逃れ、「この腐れ目玉！」と叫んだ。

足先の痛みに「ぐつ」とキリシュエータは身を折り、氣色ばんだ騎士達が慌ててルディへと手を伸ばす、咄嗟にティナンがルディを庇おうとその腕に抱きこんだが、騎士達にしてみれば主への無礼が過ぎた。

剣呑な空氣が流れたが、なんとか体勢を整えたキリシュエータは片手をあげて騎士達を下がらせ、

「おまえの足癖の悪さは忘れてない筈だつたんだが……に、しても」大きく息をつき、ティナンの腕の中で未だに威嚇しているルディを眺め、苦笑した。

「女？ これが？」

これがとか言つな。

そもそもなんて失礼なんだ。立派に女の子だろ。女を捨てたことはただの一度もないぞ。

思い切り怒鳴りうつと口を開いてすればまたティナンがその口を手で覆いつくす。

「 殿下……」

「 謎の物体だ」

意味不明な咳きにカチンとくるが、そんなルディとキリシュエータの様子にティナンは嘆息し、そつとルディに囁いた。

「ルディ、おまえは殿下と相性が悪いのだから、下がつていなさい。これ以上無礼をするならばくが許さないからね」

やんわりとした口調だが、その言葉はルディにぐつさりと刺さつ

た。

優しい兄に言われた言葉とは信じがたく、ルティイは唇をきゅっと引き結んだ。その頃に丁度玄関口から現れた家人達に命じて殿下の休息を告げる。

それをどこか遠くで聞きながら、ルティイはぎゅっと拳を握りこんだ。

大っ嫌い！！

怒鳴つてやりたいが、それを必死に押さえ込む。ルティイはキッとキリシュエータを睨みつけ、つんつと顔をそむけて駆け出した。

「……すみません、不調法で」

はあつと嘆息氣味にティナンは呟く。

「どうか

キリシュエータは眉を潜め、

「もしかして私が悪いのか？」

一応の確認のように口にしたが、ティナンは口をつぐんだ。

どう言つていいものか、ティナンにも判らない。だが、ふと気づいた様子でキリシュエータはティナンを見た。

「そもそも、おまえがアレを妹だと言つていれば」

「私は幾度も妹の話しがしたと思いますが」

「あれのほかに妹がいるのかと思つていたんだ。そもそもおまえのトコは兄弟が多すぎる」

ティナンは「ルティイ」という呼称と「うちの妹」という言葉を確かに使つていた。それが同一のものだと思ったことが一度もない。

「まあ、あまりお気になさりず」

ティナンは柔らかな微笑みを浮かべ、主を屋敷へと招いた。

「大つ嫌いだあああ  
きこつ。

兄さまも嫌いだし、トウモロコシの髪も大嫌いだ。  
「ハつ当たりはどうだろつ」

文句を並び立てて細剣を操り打ちかかつてくるルディの様子に、それを受け、流しながらセイムは嘆息した。

「私のどこが男だ！」

「えつと……まな板胸、とか」

思わず真剣に応えてしまふセイムだった。

「うるさいよ、セイムっ」

「いや、だつて事実だし。そもそも、子供の時だつて着ていたのは兄君さまのズボンだつたでしょ？」

動きやすいので普段からそんな服装を好んでいるのだ。今ならともかく、六つの子供がズボンにシャツでは男の子だと思われてむしろ当然だろう。

「つてか、やめましょうよ、ルディ様」

「黙れつてば」

「あのね、今のあなた、とても俺に、勝てません、よ？」

言葉と同時に刃先を潰した剣先がひゅつとルディの脇を走る。ひやりと血の気が下がる感触に顔をしかめ、地面を蹴つてそれを避ける。

「銅貨10枚、捨てるつもりですかね」

「生意気！」

「じゃあ、もうつていいですか？」

「言つや否やセイムが身を沈める。

とんつと床を蹴つて一打・二打・三打 受け止めきれずに膝が落ちる。それまでの苛立ちを捨てて、ルディは慌てて体勢を整えた。

咄嗟に頭の中で自分を叱責する。

セイムだつて子供の頃から共に学んでいるのだし、悔ることはできない。何より相手は男で自分は女だ。長期戦は体力的にフリだ。詰められた距離をとるために細剣の持ち方を逆手に変え、横に走る。距離をとりたいルディの思惑を承知しているのだろう。余裕があるのか、それとも挑発か、セイムは口の端に笑みを浮かべてつくる。

一方ルディときたら、先ほどの怒りの為にだいぶ体力は消耗している。そしてどうやらセイムは本気らしい。

何か、何か、何か……

自らの劣勢に活路を見出すべく、ルディは瞬時に頭を働かせた。

「あ、二一ネ！」

声をあげた途端に、セイムは慌てふためき、わたわたとその体勢が崩れた。セイムにまとわりついている近所に暮らす二一ネを探し、ハツトルディを睨んだ。

「つ、卑怯者！」

「莫迦めっ」

このスキを見逃したりしない。ルディはぐつと剣を握りなおした。

「そこまでー！」

パンつと手が打たれて、ルディとセイムは慌てて身を引き離した。

「途中までは関心したものだけど、ルディ、酷すぎる」

屋敷の一階テラスで兄が嘆息氣味に言つ。

その隣に王子殿下を認め、ルディはむつと口をへの字に変えた。

「いい見世物だつた」

褒めたつもりなのだろう。キリシェエータが言う言葉に、更にルディはムツとする。口を開こうとすればティナンがそれを黙らせる

為にルディを軽く見た。

「褒美を取らせよう、来い」

更にムツとする。

何をまだ！ 偉そうに。

と怒鳴つてやりたいが、何様も偉そつにも、相手は王子様だ。王位継承権第三位の御方に相違ない。

ルディは苦いものをかみ締めながら、それでも来いと言われば行かなければならぬのだと自分を動かした。

兄達も父も、王家に仕える身だ。

先ほどからティナンが必死にルディを留めているのは、相手の一言で簡単に自分の首も飛ぶであろうし、また 父や兄達に、家人に余波が無いとは言い切れない。

なんといつても相手は性根の腐つた王族だ。

ルディはそれでも精一杯の矜持でもつて「ただいま」と低く唸るように言つと、すたすたと中庭を歩みテラスの前に立ち、膝を折ろうとする。すると、キリシュエータはむつとした様子で「上に」と告げた。 びしりと自分の中でもた何かの音を聞き、ルディは腰の後ろに手を回し、ぱちりと鉗を外した。

皮ベルトに留められた鞭がパラリと落ちるのをそのまま受け止め、ひゅんっと空を切る。

テラスの縁に打ちつけ、その勢いのままに地面を蹴る。一度壁を蹴つてテラスに身を躍らせると、そのままスタンツと彼等の前に膝をついた。

「……猿か」

小さな咳きを聞き逃すと思つか、このド阿呆。

それでも必死に自分を押さえ込んだが、黒い感情はだらだらと漏

れ出でるのかティナンは心配そうに眉をひそめた。

「ルディつ、失礼なことをしないで」

「第三王子殿下様をお待たせするのが失礼かと思いまして」

「なんだ、さつきの勢いがないな」

挑発するような言葉に、ティナンは嘆息し、かつんと足を慣らしてルディの前に立つた。

「殿下、この子をあまり挑発しないで下へい」

「騎士団の人間も今は下げている。別に多少の無礼はいいさ」

クツと喉許で笑う。相手の余裕に更にムツが増えていく。

嫌いな人間の言動とこののはこれ程気に障るものなのか。

トウモロコシの髭の癖にトウモロコシの髭の癖にトウモロコシの髭の癖につつ。

「それに、彼失礼、彼女は私の部下でもない」

今、絶対に、彼つて言つた。というかわざと言い直した。

ルディは目顔で相手を睨みつけ、その様子にティナンが鎮痛な面持ちで額にそつと手を当てた。

「さて、先ほどの余興はとてもよかつた。目にも楽しめた。褒美は何がいい?」

「褒美……」

「私にできることなら、何でも言えばいい。

どうやら、あなたにとても失礼を働いたようだから」

やけに丁寧な口調で言われた。

おそらく、女性という扱いのつもりなのだろう。ルディはその眼差しを一旦すがめ、

「何でも宜しいのですか?」

と、確認するように言葉にする。

「ルディ」

兄がたしなめる言葉に、ルディは思い切つて口を開いた。

「私は軍属を望みます」

「ルディ！」

ティナンが声をあげた。

騎士に女性仕官など居ない。救護班にだつて存在しないのだ。

あつけにとられた様子のキリシュエータが一瞬瞳を大きく見張つたが、やがてその口の端に笑みを刻んだ。

「殿下、今のはお忘れ下さい。ルディつ、莫迦なことを

「いや、いい。

先ほどの動きをみれば、さほど夢物語という感じでもないしな。

何といつてもおまえの妹姫で、そして宫廷指南役のエリックの娘だ

「殿下……」

「ただし、二ヶ月は見習いだ。第一師団から第三師団まで二ヶ月で巡り、師団長の推薦をもつて田出度く本決まりとしよう」

「はい！」

元気に応えたルディを他所に、ティナンは苦いものをかむように顔をしかめた。

「ティナン、いくらおまえでも田出度しなどするなよ

「致しません」

「楽しい余興だつた。ティナン、私はこのまま帰る。おまえはソレの荷物を纏め上げてから帰還すればいい」

「本日ですか？」

「今日中に来ないのであればこの話は無しだ」

すつとキリシュエータは立ちあがり、ふと意地の悪い眼差しをルディに向ける。

「まあ、怖氣ずいたのであれば来なければ良いだけの話しだ

「誰が！」

そのままテラスを出て行く主を見送り、ティナンは厳しい眼差しでルディを見下ろした。

「殿下のおひしゃつたとおりだ」

「ん？」

「行くのは辞めておきなさい」

「どうして…」

「　ルティ、君はとても大変なことをしでかしたんだよ？」

ふつと瞳を柔らかくし、ティナンはまだ跪いたままだつたルティの手を引いて立たせた。

「軍務についている人間はたいてい士官学校に入り、厳しい訓練を経てやつと軍属になるというのに、試験も何もかもをとっぱらつて君は入るうとしているんだ」

そういわれると、確かにそうだ。

「けど、試用期間がある訳だし」

「あまりにも特別過ぎる処置だ。それは絶対に君の為にならない。行くのは辞めたほうがいい」

兄の視線は冷たい程だ。

「いやだ！」

必死に言ひ言葉に、けれどティナンは冷たい嘲笑さえ浮かべた。

「　なら、ぼくは君を絶対に軍人になんかしない」

「兄さまっ」

「ぼくが誰だか判つてているよね？ 第三師団長なんだよ？ 殿下の補佐役なんだ」

その奇妙な笑みに、ルティは唇を引き結んだ。

「殿下はおひしゃられた。三師団長の推薦が必要なんだ。ぼくは何があろうと絶対に推薦などしない」

「兄さまっ」

ティナンは自分に縋る妹をぱしりと払い、冷たく言つた。

「それでも良ければおいで。

ぼくは絶対に

君に手を貸したりなんかしない

「ティナン様、行つてしましましたよ」  
マーティアが静かに言つ。

ルディは一人寝台の上、身を丸めて唇をむつと引き締めて、泣きたい気持ちを堪えていた。

「だつて、だつて、仕方ないじゃないか！」

行つたつて、どうせ騎士にはなれない。拳句兄にも嫌われるのだ。  
そして大嫌いなあの莫迦王子、トウモロコシの髪は上官になる。いつたいこの話のどこに血みなどあらつか？

ない。

行けば自分が不幸になるだけだ。

何より兄のことを思えば唇が戦慄き、歯がかちかち音をさせむ。  
あんなティナンを見たのははじめてだ。まるで憎まれているのでは  
無いかというくらい、怖かつた。

「でも、ルディさま……騎士になるのはルディ様の夢だつたではありませんか」

「そうだよ！ でも、でもつ」

くうつと自分の体を抱きしめる。

兄のように華々しい騎士になるのは夢だ。そのために父の訓練も受けたし、兵法だって学んできた。そのすべては兄達や父のように働く為だ。

「本気だつた。ずっとずっと、女性は騎士になないと知つた時、悔しさに泣き叫びもした。

と、ぱしんと頭を叩かれた。

慌てて顔をあげれば、セイムが静かな眼差しで見下ろしている。

マーティアと良く似た顔立ち、とび色の瞳を優しく細めて幼馴染の少年は愛情すら込めるように口にした。

「莫迦」

「……」

「いいじゃないか。三ヶ月、行ってくれば？」

傷つけられて、ぼろぼろになつて、軍人に嫌気をさして帰つてくれば？」

「あげく兄さまにも嫌われて？」

「それでも やりたかったことだろ？」

セイムの言葉に、体を起こす。

「ルディ様らしくないですよ。やらずに後悔するより、やつて後悔するのがルディ様じゃないですか」

マーティアが微笑む。

「三ヶ月して帰つてきたら、一杯愚痴を聞きますよ」  
につこりと笑う姉弟に、ルディは両手を伸ばして二人同時に抱きしめた。

「ありがとう」

へへと笑うと、セイムも笑い、すつと手を出した。

「銅貨10枚、まいどあり」

\*\*\*

「遅くなりました」

一礼したティナンを見て、キリシュエータは片眉を跳ね上げた。  
執務室で書類にサインをしていた為、眼鏡をかけた若き軍事将軍は羽ペンの先を搖らし口元に笑みを刻む。

「イヤ、思うより早い」

「さよですか」

「こんじんは？」

「ルディは来ません」

さらりとティナンは言い、苦笑した。

「判つていたでしょ、」

「なんだ存外骨の無い」

「あの子はただ世間を知らぬ子供です。あまり苛めて下さいますな」

「おまえが過保護過ぎるんじゃないか」

クッと喉を鳴らす主にティナンは笑う。

ルディも十六、この年の娘であればすでに婚姻し子供の一人いておかしくもない。ある意味、エリックもティナンも兄達も妹を甘やかしてきたのだ。やりたいと云ふことをやらせ、好きな格好を許し、箱庭の中でルディは自由だ。

だが、それは小さな小さな箱庭の中のこと。

その箱から、確かにそろそろ出してやらなければならないのかもしれない。それは少し寂しいことだけれど。

感傷にふと笑うティナンを遮るように、来客を告げる従卒の言葉。ティナンは笑みを凍りつかせた。

「ほら、意外に骨がある」

キリシュエータは羽ペンをペン立てに放り込み、執務用につけている眼鏡を外した。ちらりと自らの片腕である第三師団長を見ればその表情はこわばり、口の端を引きつらせている。

「良く來たな、にんじん」

「 参りました」

静かに頭を垂れるルディに、キリシュエータはつまらなそうに肩をすくめ、

「 言い返さないのか？」

と揶揄したが、ルディは頭を垂れたまま「今日よりあなたが主なれば」と続ける。

「立派だ、と言いたいところだが おまえはまだ騎士では無いし、軍人でもない。ただの見習いだ。私に忠誠を誓わせた訳でもない。私はおまえを認めたわけではないのだから、主などと云う必要

はないな

「……はい」

「だから特別に、他の人間が居ない時ならばおまえの暴言くらい許してやるわ」

それがどういう意味なのか判らない。

だが、キリシュエータは実に楽しそうに執務用の椅子にふんぞり返る。

「ではどうあえず、第三師団長」

「はい」

「これはおまえに一月任せる。部屋と制服を用意してやれ。それと、何か言いたいことはあるか？」

ティナンは静かに身を震わせ、怒りを堪えているように見えたが、やがてゆっくりと唇の隙間から息をついた。

その視線が静かにルディを見る。

そうして告げた。

「ルディエーラ」

「はい」

「おまえは今日からその名前を捨てなさい。

女であることも、父の娘であることも、ぼくの妹であることも」

静かな言葉にルディの瞳が驚愕に震える。

「決してそのことを口にしてはならない。」

男として、騎士見習いとして、偽りの名をもつて生きなさい」

「……はい」

声が震えた。

「兄妹の情になど頼むのとするな」

「そんなつもりは」

「口答えするな、莫迦者！」

厳しい一喝に更に頭を下げる。ゆっくりとティナンは歩み、ルディの後ろへと回り込むと、ルディの一本の三つ編みに結わえられた髪を掴み、腰の剣を振るつた。

その鋭い剣先が、一括りにされた赤みの強い髪を一気に解き放ち、肩口で切られた髪がゆれ、頬を撫でた。

「明日までに整えなさい」

「……はい」

驚愕に瞳を見開いたのはルディだけでは無い。正面からそれを見ていたキリシエエータも言葉を失つた。

「外で待つていなさい」

主の執務室から出るよう促し、ティナンは自ら切り落としたル

ディの髪を手に主へと一礼した。

「……女であることを隠すつもりか？」

「無茶では無いでしょ。多少は華奢ですが、いない訳でない」

「別に女でも構わないだろ？」

「男しかいないこんな場に？ まあ食い散らかせと狼どもに妹を引き渡せとでも？」

「怒つてているな」

「怒つておりますとも！ お恨み申し上げます我が君」

ティナンは切なそうに妹の髪を見つめ吐息を落とした。

「一月で実家に帰してみせます」

それがルディの為だ。

首の下で、髪が揺れる。

切れ味のよい細剣でさくりと切られた髪はがたがたで髪さも違つ。整えろといわれたところで、ただ心がすでに折れそつた程空虚だ。泣きたい気持ちはあるのに、けれど涙は出で来なかつた。

この髪が綺麗だと褒めてくれた兄。

優しく手櫛でかきあげてくれた兄。

額にキスをしてくれた兄。

その兄が、まるきりの他人のように冷たい眼差しを向け、ルディの髪を無残に切り落とした。

嫌われるどころでない。

もしかして憎まれているのかもしれない。

自分の仕出かしたことでそんなに兄に不快を与えるなどと思つてもみなかつた。

ルディはゆつくつと詰めつけに浅い呼吸を繰り返し、自分を励ました。「立て とりあえず今は」一本の足で立つていろ。

自分は騎士団顧問エリックの娘 いや、末の息子だ。

言われたように一枚扉の執務室の前の廊下で静かに兄を 騎士

団第三隊隊長を持ち、彼がやつと出でくるとふかぶかと頭を下げる。その時無意識に見たティナンの手に、結い紐で結ばれた髪は無かつた。

執務室のゴミ箱にでも捨てられたのかもしれないと思うと、喉の奥から何かがすぐすぐと競りあがるような気がして、慌てて唇を引き結んだ。

「ついて来なさい」

冷たい口調のまま言われ、ただ静かにつき従う。

そうしなければ、口元は戦慄き熱い目頭から涙が零れ落ちそうだった。

兄さま……

ごめんなさい。

心の中で謝ることしかできない。もう兄でも妹でもないと言われてしまった。

そうまでして騎士になりたかったのかと問われれば、ルディはもう応えることができない。

後悔なんてしないなんて……嘘だ。

「隊服は後で部屋に届けるようにしておきます。部屋は一人部屋同室のベイゼル・エージは第三師団の副長を務めている男だ。あとのことはその男に聞きなさい」

「はい」

かされるような声でかろうじて応えることができた。

官舎から寄宿舎へと移動し、一階にある一室の扉を叩く。

中から出てきた男はティナンの姿を見て瞳を瞬いた。

ティナンよりも幾分身長の高い黒髪の青年は、濡れた髪をタオルでかきまわしながら片眉を跳ね上げる。

「なに？ 僕なんかへマでもしましたかね？」

「今日から一月、第三師団の見習いとして入りましたルディ・アイギルです」

アイギルは親類の叔母の姓。

その名を告げられ、ルディはぎゅっと拳を握んだ。

淡淡としたティナンからの紹介に、ベイゼルの瞳がはじめてティナンの背後に立つ小柄なルディを認めた。

「この時期に？ なによ、その人事は」「殿下的指示ですので甘受なさい」

その口調はどこのまでも冷たく、この人事に不満があるのだと隠そ  
うともしない。

「あなたの部屋は余裕があるでしょう。同室として面倒をみて下さ  
い」

「つて、えええつ、マジすか？ つてかなんで？  
新入りなんだから4人部屋とかに放り込んでよ」

「おまえは一人部屋を一人で使っているのだから文句は言わないよ  
うに」

アイギル、入りなさい。

片手で押し込むようにルティを放り込み、逆に副官の肩口を引き寄  
せて引つ張り出すと扉を閉ざした。

「なに、なんなの」「」

不服そうに胡乱に見上げてくる副官に、ティナンは襟首あたりを  
引っつかみ廊下の隅へと連れていくと、今度は襟首を掴みあげた。

「ベイ、あの子のことは頼みましたよー」

低く抑えた声は先ほどとはまた違う。

切羽詰るかのような上官の言葉に、ベイゼルは目を白黒させた。

「な、なによ？」

「手を出したら殺しますから」

「はあ？ いくら可愛くても俺たちの趣味なによ」

キモチ悪い。

あからさまに顔を顰めて見せる相手をざつざつと締め上げ、ティナ  
ンは真顔で言った。

「いいですか？ 絶対に手を出さないで下さいよ。着替えを覗くの  
も駄目です。風呂場では見張りくらいやつなさい。他の男にべたべ  
た触らせるな」

「……えつと……隊長の、恋人？」

まさかの隊長つてば、そっちの趣味？

田をむいて言つ副官についつと微笑みかけ、とりあえず殴つた。中指の骨がしつかりと当たるよつて。

「いつの可愛い妹です！」

「はあ？」

「殿下の氣まぐれで騎士団に入れましたけれど、男で通しますから。絶対に、絶対にへタなマネしないで下さこよつ」

「隊長が面倒みればいいでしきうが！」

「ぼくとは一切かかわりが無いとこつこつとで通しますから。名前もかえているし」

「なんか面倒くさいんだけど」

「あの子にも自分とはかかわりなど一切無い、男で通せと言つてあります。あなたも女であることなども知らぬフリで粗手をして下さい」

「……ほんと面倒臭いんだけど」

そもそも俺、女好きなんだけど。とほそりとつ副官に、ティナンは笑いかけた。

「あなたのあれやこれやを大目にみてきたぼくを敵にまわすつもりは無いでしょ？」

「そりや、まあ……」

「ですよね。いつの可愛いルディに悪となぞしようつものなら、真面目に降格の拳銃どつかの僻地に飛ばしますから。

崖の警備に行かせてそのまま蹴落としますよ？ 南方砦の鐘楼から蹴倒しますよー。」

すつげえめんどい。

ベイゼルは心底からいやな気持ちになつたが、ある程度自分の主張を告げると、彼の上官はやつと息をついた。

「他の人間にばらさないようこーー！」

「ばらすもナーモ……頼むから面倒」とて巻き込んでくれるなよ。  
ベイゼルはやつと開放された首元をさすりながら薄暗い天井を見上げた。

めんどくせえ。

今日から一月自分が生活することになるところに一人残されたルディは、ほつておくとじわりと眦に涙が浮かびそうになるのをぶるりと身を震わせて堪えた。

大好きな兄に嫌われたのは物凄く痛い。

部屋の中は微妙な匂いが充たしている。男臭さとアルコール臭さと、煙草臭さ。かび臭さ。生臭いような気もするが、そもそも男所帯に暮らしているので我慢できない訳ではない。

乱雑に置かれた荷物は洗濯物も混ざってそうだし、確かに部屋の右と左に寝台があるのだが、そのどちらにも無造作に荷物が置かれている。比較的少ないのは右側で、おやじひつけひつけ副隊長は寝ているのだろう。

「……ここで、寝るのか

それはげんなりとしてしまう現実だ。

自分の部屋の片付けも得意とは言えないが、この部屋の有様は酷すぎる。片付けてしまおうかと思ったが、副隊長は兄 テイナン隊長によつて連れ出されてしまつた為、勝手にはできない。たとえどんな無頓着な人間といえど、自分の知らぬ間にモノを移動されることは歓迎しないだろう。

初日から嫌われる訳にはいかないし。

嘆息すれば、耳の下で髪が揺れた。

切られてしまつた髪をそろりと撫でて、その先端の位置を確かめる。

部屋の中に鏡などというものはありそうに無い為、ルディは仕方なく窓ガラスの反射を利用して髪を切ろうと窓辺によると、胸元のナイフを取り出し、首筋の辺りにすっと運んだ。

「だーー、何やつてるー。」

突然の声に、ルディは危うく首筋を切るところだった。

自分のことばかりに集中していた為に、一度部屋の扉を開けられたことに気付かなかつたようだ。

びつくりして振り返り、瞳を瞬いて同室になつた副隊長を見上げる。

田つきの悪い副隊長はいかどかと長靴の音をさせルディHの前に立つた。

「あの、髪を……切るつと思つて」

「かみ？ ああ、髪、髪ね。

そういえば、なんだかざんばらだな。どうした？」

田つきの悪い瞳がいつそ悪く潜められる。

「 ちょっと長かつたので、先ほど隊長殿に切られてしまひました」

その眼差しから逃れるよつて視線を落とし、ははつと言ふば、ベイゼルは口元を引きつかせた。

「整えようかと思つて」

「あー……しゃあねえな、ちょっと貸せ。俺、そういうの得意だ。

指先器用だから」

嘆息氣味に言ふベイゼルは近づくと、ルディのナイフではなく自分のナイフを出してルディの背後に回つた。

「コレを男と言ふのは少し無理があるんじゃないのか？」

艶やかな髪は手入れが行き届き、けれどびっくりと切られてビリ

かちぐはぐだ。無残に切られた襟首が白くて華奢で、片手だけで絞められそうだ。と思つた途端、すつとルティイが避けた。

「あ？」

「あ、すみません……なんか、殺氣のよつな……あれ？」  
感覚は鈍くないようだ。

苦笑し「切るぞ？」と声を掛けた。すきあげるよつにナイフを上下に動かし丁寧に切る。一番短い位置にあわせて揃えていく。赤みの強い金髪を切りそろえながら、なんだかいたまれない気持ちになつてしまつた。

「に、しても珍しい人事だな」

当たり障りの無い言葉を選んだつもりだ。殿下の気まぐれなどいつものことだ、あまり気にすることじゃない。だが女の子を入隊させようなんてどうこつう醉狂だ。

「やつぱり、珍しいですか？」

心持ち構えるような口調。

怯えすら混じるそのよつに、ベイゼルは苦笑を隠す。

「ま、今は暇な時期だからな。田新しいことは歓迎だよ」

「

最後にさらりと髪を払い、切つた毛を落とす。

ルティエラは不安そうな眼差しを心持あげ、「ありがと「う」やこます」と頭を下げた。

「

「副長？」

男で通すつて、どんな冗談だ？

いやいや、可愛い男というならい訳ではない。確か第一隊にも随分と華奢なのがいる。あれは見た田が子猫な癖に中身ときたら猛獸だ。大丈夫。これだつて男で通る。いや、通さねばならぬつてか、もうオレイヤナンデスガ。

「あの、ぼく、何か気にさわるような……」

「つてか、ぼくは辞める。なんだそれ、新手のイヤガラセなのか？」

一人称はワタシでお願いします。オレも却下」

一息に言い切り、ベイゼルは「うわああ」と叫び、自分の髪をぐしゃぐしゃと乱暴にかき混ぜた。

「ふ、副長？」

「寝台は左側！ 荷物はベッドの下！ 寝る時は中央のカーテンを忘れるな！ オレのほうに入ってきたらぶつ飛ばす！」

指を突きつけルディエラを部屋の左側の寝台に追いやると、ざつと音をさせてカーテンを引いた。

ルディエラは瞳を瞬いて閑ざされ、軽く揺れているカーテンを見ながら首をかしげた。

もしかして嫌われた？

え、なんで？

\*\*\*

不安と期待とがない交ぜになつて翌朝 寝られないのではない  
かという思いとは裏腹に、ルディエラはすっかりと熟睡し、鬼の隊長によつてたたき起こされた。

その鬼の隊長殿も、実際はすやすやと眠る妹を物凄く複雑な眼差しで眺め、幾度も幾度も溜息をついたのちに大きく息を吸い込み、

「起きんか、莫迦者！」

と、勇気をもつて大音量でたたき起こしたのだ。

今までそんな口調で妹を起こしたことなど無かったといつのこと。  
ティナンの心はきしもしこと痛んだ。

「え、あ……」「い」

突然枕を引き抜かれて、ぐるっと転がったルティエラは、兄の言葉に「兄さま」と口にしてしまったのになつたのだが、それはティナンの手によつてふさがれた。

口を塞いだのでは無い。無遠慮に襟首を持ち上げたのだ。

「新兵なら新兵らしく誰より早く起きなさい。馬房の水汲み、訓練所の水拭き、やる」とせよとあるがつ

「え、ひやあつ？」

「おかしな声を出すな。ひとつと準備つ

見習い一団。

じつしてルティエラの過酷な見習いの日々は幕を開けた。

エリックは自分を信用している。

自分の勘を、視力を、本能を。その全てが告げている 殺せと。

「つづつ」

馬房の片隅、壁にボロ雑巾が引っかかっていた。

見習いを示す藍色の隊服は薄汚れ、赤みの強い金髪 というかむしろ赤オレンジのような目立つ髪は汚 れがついてとじるじるが固まっている。それを眺めるようにして立つ男は手の中で乗馬用の鞭を弄び、呆れる様子で何か言つているのだが、そんなものはエリックには関係が無かつた。

本能で体が動く。

あの体の曲線が、あの髪が、顔を見なくとも直感のままだと告げている。

腰に下がた長剣を引き抜き、一気に間合にをつめて今にも壁に手を掛けボロ雑巾と化して逃れようとしている娘に手をかけようとしている男を叩き切ろうと動いた。

「うわあつ」

「貴様つ、そこに直れつ」

「つて、なにをするんですつ」

一瞬にしてルディの存在を見破つた父親は、瞬時に相手の首に切つ先を這わせて一気に切り離そうとしたが、その相手が自分の息子だと気付くのはあまりにも遅すぎた。

そう、娘はタダ一人の宝だが生憎と息子は一山幾らでナンボ状態の父だつた。

「これはどういうことだ。ティナン」

「報告が遅れましたが それは顧問が巡視に出ていたからです」

第二騎士団隊長であるティナンは軽く切られてしまつた首にハンチを押し当てて冷たく父親を見つめた。

王宮指南役 現在は顧問として所属しているエリックは、さりと戦闘意欲にあふれた眼差しで息子を睨み付けている。

「何故、ルディエラがここにいる？ ここは軍の馬房じゃないかつ立つように言いながら、エリックは息子を睨みつけ、ついで壁によりかかって寝ている少女を哀れむように視線を向けた。

「この髪は何たることだ！ 私のルディの美しい髪がつ、誰だこんなことをしたのはつ、殺してやる」

「……ぼくです」

「死ね！」

「実の息子になんといふことを」

「私だからこんなものだが、おまえ他の三人に知れたら闇討ちだぞ。おちおち寝ていられると思うなよ」

「……息子を脅すような真似やめてください」

それでなくとも、すくなくとも西端に在勤中の兄を思ひと恐ろしいといふのに。

長男であればまさに人を雇つて襲わせそつだが、次男ときたら当人が大剣を振りかざしてくるだろう。弟は ナーかはしてくる気がするが、ナニをしてくるかは予想が付かない。

騒がしい父親の声に、ボロ雑巾と化した娘はするすると身を沈め、床に腰を打ち付けてやつと顔をあげた。

「はれ……とーさま？」

「おおつ、父様だぞ。おまえのカツコイイ素敵な父様だぞ」

まるで幼子でも相手にするように身を沈め、視線を合わせてやりながら途端にエリックは相好を崩し、ついで痛ましいといふよつこ唇を戦慄かせた。

「かわいそうに、なんでこんなことに……誰が虐めたんだ？ 父様に教えてごらん。安心おし、おまえの髪を切ったティナンは角刈りにしてやるから。後頭部にバカつていれてやろうか？ おまえを虐めたやつは百倍にして仕返ししてやるぞ。足腰びこのうか両手足だつてしばらく使い物にならない蓑虫を作つてやるぞ」

その言葉にティナンは思わずびくじと反応して一步下がつてしまつた。

「顧問つ、余計な手出しあそこまでこにして下さい。アイギル、おまえはまだ仕事が残つてゐる。さつやと起きて動けつ。夕飯を食いつぱぐれるぞつ」

ティナンは鬼隊長の言葉で命じつけ、びくんつと反応したルディエラはがばりと立ち上がり敬礼をするとペコリと頭をさげた。

「隊長、すみませんでした」

寝入つた覚えもあるし、何よりエリックのことを父様と呼んでしまつた。咄嗟のこととは言え、兄とも父とも思つなどいわれているのだ。失態だ。

顔を手の甲でぬぐうと、馬特有の獣臭と馬糞の香りが肺一杯に広がつた。確か馬糞の始末をつけて、馬達に新しい寝藁をしいてやつて餌をやり終えた安堵感に壁によりかかつてしまつたのだ。

失態だ。安堵などしている場合ではない。

一気に意識を持つていかれてしまつた。

ルディエラは普段から馬の世話はしていたが、それだとて自らの使う葦毛、シルフェースだけだ。他の馬は幼馴染であり、下男であり庭師であり つまり何でもこなせる便利アイテム、セイムがやつている。

だがここでは基本の手入れは馬の持ち主である者が行うが、後始末の全ては新兵であるルディエラの仕事なのだと命じつけられた。もう四日の間行つてはいることだが、総勢十七名の騎士の馬の相手

は並大抵では無い。

それでも隊長副隊長、および予備の為の馬の世話は他の馬房で専用の馬長が行つている。これでも、ルディエラが任せているのは、第三騎士団の馬だけなのだ。

よれよれと馬房を出て行く愛娘を見送り、それまでまるで好々爺の如く顔を緩めていたエリックはすくりと立ち上がり、がしりと息子の腕を逆手に掴みあげた。

「説明しろ」

「……文章で届けます」

「今、ここだ。腕をへし折るぞ」

ぎつぎつと腕を締め上げて冷ややかに口元を緩める父親に、ティナンは溜息を落とした。

\* \* \*

「くつせーよー！」

夕食も終わるつかといつ頃合に、よれよれと食堂に入ってきたルディエラの姿を認め、副隊長であるベイゼルはつまみあげるよつてしてその後ろ襟首を引っつかんだ。

「風呂入つてから来いつ」

他の人間の迷惑だ！

「でも副チヨー、食べないと食事がなくなりますー」「すでに一度の経験済みだ。

一日田はあまりにも疲れ果てて夕食など食べよつてつ氣にもなれず、汗とドロとボロにまみれたまま寝台に倒れこみ、一瞬後にはティナンにたたき起こされ、拳銃朝だつた。十分な睡眠をとつた覚えなど無かつたというのに、朝だつた。

一日田はそれでもなんとか食堂に行くことができたのだが、すで

に食事は食べつくされた後でその日の夕食も抜きだつた。

なんと軍の食事は朝と夜だけ。

昼に関しては食べたいものは自分で時間配分をみて勝手に食べると  
いうのだ。

それでも必死になつて昼にはピスケットなどを食べる。

もともと三食、更には三時におやつまで食べていたルディエラにと  
つてここでの食生活はまさに地獄だつた。

「そんな悪臭漂わせた人間が食堂にいると迷惑なんだよつ」

ベイゼルは忌々しいとばかりに吐き捨て、ついで仕方ないと呟く  
と近くにいた従卒に命じた。

「夕食のプレートを一つ、オレの部屋に届けておいてくれ」

そう命じつけると、途端にルディエラは瞳を見開いて歓喜した。  
これで今日は夕食が食べれる！ しかもきちんと風呂にも入れるの  
だ。

「副チヨー」

「あんだよ」

「いい人ですね！」

猫の子のようにほほぶらさげた状態のルディエラが、きらきらと  
した瞳をしてぐるりと顔をめぐらせて言つや、ベイゼルは「うわあ  
あああ」と叫んだ。

「もうなんだか知らんが勘弁しろーつ」

……やつぱり嫌われてるのかな。

でも副隊長はいい人だな。うん、いい人だ。

ルディエラは自分の心の日記に「副長に好かれるように努力しよう」と書き記した。

自分のその決意が「迷惑」であるなどと欠片も思わないルディエラ  
だつた。

久しぶりに見た父はやはり素敵だった。

翌朝、馬の背をブタモのブラシで丁寧に撫でてやりながら、ルディエラは口元が緩むのを必死で押さえ込んでいた。

父親のエリックはまさに鍛え抜かれた筋肉美を誇る。

騎士ではなく、もともとは傭兵であつたという父はがしりとした体躯に無駄のない筋肉をしつかりと備え、またその一見重そうな体を音もなくしなやかに動かして獲物を捕らえるのだ。

ティナンはその点華奢な体躯をしている。

騎士団の人間はおおむね均整の取れた体躯をもつてゐるが、ティナンは華奢だ。

何より、王族警護という役職である三騎士団の人間は見事麗しいものと定められているのだろう。

ルディエラにしてみれば、外見の美醜などまつたくもつて意味は無いと思つてゐるのだが。

そう、人間何より大事なのは顔の美醜などではない。人間にはもつと大事なものがある。

「何にやにやしてんだよ、喜色わりいな」

丁度朝の馬慣らしから戻つた副隊長が眉宇をひそめて馬房の入り口に立つた。

その手首には鞭が引っ掛けられ、胡散臭いものでもみるよう馬房内をぐるりと見る。

「いやあ、昨日顧問に会つたんですね」

「あ？ ああ、エリックの旦那ね。そういうやあ、戻つたらしいな」つて、顧問といえばおまえの親父だろう。という突つ込みをベイゼルは飲み込んだ。だが、その顧問の話題はルディエラにはツボなんか、ペラペラと口を開く。

「かつ」いいですよねーっ

おまえ、どんだけ親父好きだよ。

「あの筋肉。あの敏捷性。あー、ぼくもいつかあかなりたい」

絶対にムリ。

うおお、すげーっ突つ込みてえ！

瞬時に頭の中で浮かぶ言葉に、ベイゼルは口元が痙攣するのを感じた。

「スゴイんですよー。顧問、胸がびくびく動くんですっ」

死ね！

つてかオレを笑い殺す氣か、この糞餓鬼。

おかしなもん想像させんじゃねーっ。

「いいなあ、筋肉！」

うつとりと馬の筋肉を愛おしそうになでるしげせに、ベイゼルは完全に引きつりつつ「おま、あんな筋肉だるまがいいのかよ」と、不用意な言葉を投げかけてしまった。

「失礼なー！」

「失礼つて」

「筋肉は正義ですよ！ あの筋肉をどれだけの訓練で維持しているのか。断然あこがれる。たるみなんてないんですよ。さわると力チカチですっ」

筋肉は正義……

そう、人間に大事なのは顔の美醜ではない。筋肉だ！

興が乗っている様子のルディエラは、おもむろに自らの上着の袖をまくりあげ、ぐつと力こぶを作つて見せた。得意げに。しかもかなり。

「ぼくだって結構す」いんですっ」

「ぼく言つな」

そして止める。その、たあ触つてみろといつ誘いは止める。ふるふると右手が勝手にその軽く盛り上がった一の腕に触れようと動くじゃねえか。

「結構固いけじ、でも顧問には全然おいつかないです」

ふるふると筋肉が弛緩する。

ちくしょう。何の罠だこの野郎つ。触れといわなければ触りたい。ベイゼルは生糞の女好きだった。

女という性別であればたとえまな板胸であろうとも。いや、駄目だ。オレの好みはポン・キュー・ポン。

こんな糞餓鬼を相手になどしたら、心の恋人、事務補佐官ナシユリ一・ベイワーズ中尉に申し訳がたたん。あくまでも心の恋人だが。

「オレは女が大好きなんだーっ」

「ぼく男です」

死ね、オレッ。

くうつと悪魔の誘いにがしりと一の腕を掴み、ベイゼルは呻いた。

「うわ、固っ」

思つたより固い。

そして固いと言われたことに対してルティヨラは嬉しそうに口元を緩めた。

「意外と鍛えてるんですよ」

「へえ。今までどんな訓練してきたんだ?」

本来であれば女性特有のふにやりとした柔らかさがある筈だといふのに、いがいにしつかりと筋肉がついている。確かに男の筋肉に

は程遠いが、それでも脂肪ではなく筋肉だ。

ベイゼルは関心しながらふにふにとその筋肉をもみ、ついでゆつくりと手を移動して一の腕から下方へと手の平を握つてみる。

一般的にルディエラの年齢であれば女性特有のしなやかな指先でありますに、そこにあるのは多少固い指先と手のひら。

幾度も肉刺まきを作り、そしてまた潰して作られた意外にもしつかりとした手だ。

貴族の令嬢とはまったく違つ。勿論、娼館の女とは違つ手触り。ふむ、などと咳き考え深くにぎにぎと握つてみると、突然「うわーっ」と背後、馬房の入り口から声が上がつた。

「副隊長が男に走つてゐる！」

「やべえっ、両刀使いだつたか！」

「女好きは力モフラー ジュ？」

部下たちのふざけた物言つて、ベイゼルは脱力しつつも振り返つて答えた。

「阿呆なこと言つてねえで」「

「そうですね、阿呆なことを言つてている場合ではありませんよ。訓練の時刻はとうに過ぎてゐる」

ひんやりとその場の温度を確實に下げる平坦な物言つて、ベイゼルは思わず自分よりもずっと小さなルディエラの背中に隠れたくなつた。

半眼を伏せるようにして奇妙な笑いを口元に貼り付けた上顎は、ベイゼルをひたりと見つめていた。

感情の欠落したよつた顔で。

「ベイ、今日は天氣が宜しい。中庭で稽古を付けてあげましょう」

「……うわー、楽しみだなあ」

切り刻む。

確実に隊長の目がそう告げている。

「ぐ、組み手にしてもらつてイイスカね？」

剣よりは死への階段が長い気がする。

「ぼくはどちらでもかまいませんよ」

打ちのめす。

冷ややかに主張する眼差しの前では、天国の階段の長さなど、あまり大差はないかもしねり。

「うらやましい。」

ルディエラは軽くねたましい気持ちで兄と、そして副隊長とが対峙する様を見ていた。

第三師団の為の中庭　馬柵の横の運動場には、第三師団の隊員達が面白い見世物がはじまるところばかりに中央部を囲むように見物している。

ティナンは騎士団の仕事が忙しそうともルディエラの訓練に付き合ってくれたことが無い。

時折自宅に戻つても、どんなにせがんでもみせてもティナンは訓練に付き合つてはくれなかつた。本気にとつてくれなかつたのかもしない。

まるきり小さな子供を扱つように、頭を撫でて「怪我でもしたら大変だからね」と笑つていたものだ。

幸い年齢の近いセイムがいたから訓練相手に困つたことは無いが、それでもティナンに稽古をつけて欲しいと思ったのは一度や一度ではない。

中庭の中央に立つティナンとベイゼル。

組み手ということで剣も剣帯も、鎖帷子もはずされている。

冷ややかな隊長は軽く手袋に包まれた指を握つたり開いたりを繰り返し、淡々とした口調で言つた。

「どうした？」いつでもくるといい

「いやいや、ここはやっぱり序列を大事にしてですねえ」

「年齢を敬つてやう」

ふつと笑つて見せるティナンに、ベイゼルは「や」と口元をゆがめた。

「たかが数ヶ月でしょうに」

軽口のように言いながら、けれどはじめて動いたのはベイゼルだった。突然身を沈めたかと思うと左手を軸にして蹴りを入れるよう下半身をぐるりと回してティナンの足を攻撃したが、ティナンは容易くよけるそのままベイゼルに蹴りを繰り出した。

「組み手ではなかつたかな？」

「いやあー、普通に組んだら負けるでしょー？」

「そうですか」

相手の蹴りをよけきれずに腹部に軽くダメージを受けたベイゼルは距離をとらうとするのだが、相手のほうが早い。

一旦身を引き、その弾みを利用して進む。近づいた途端に襟首を掴みあげて腹部に膝を叩き込み、それを押さえようとするベイゼルがそちらにばかり意識を持つていかれたことをいいことにぱつと掴んでいた襟首を離した。

押さえを失つたからだがバランスを崩したところを見逃さずに首の辺りに肘を叩き込んでいく。

その躊躇ない動きをわくわくと見ながら、ルディエラはぐつと拳を握り締めた。

兄様、スゴイ！

なんて綺麗なのだろうか。

さすが近衛騎士。動きが滑らかですばやい。ベイゼルもすんまでで相手の攻撃を抑えているが、反撃に出るまでに至らない。当初に食らった腹部が痛むのか、その腹部をかばつように動くのだが、ティナンはそこを的確になぶるように攻撃の手を緩めない。

行儀の良い筈の騎士団の人間が、やがてその試合に熱を持つて声をあげはじめた。

「副隊長、やつちまえ！」

「ここにやられねば男が廃る」

「隊長っ、ボツコボコにしけやつて下さー」

ひやかすような野次を飛ばしているが、ルディエラは瞳をきらきらとさせて滅多に見れないティナンの姿を見つめた。

やがて重い、どうつ、という音をさせてベイゼルの体が地面に叩きつけられ、腹部に足をかけて片手を捻り、そしてもう片方の手でしつかりと首を掴んだティナンが冷たい口調で「終わりです」と告げた頃には、シンつとした静寂が辺りを満たした。

ルディエラの心臓が激しく高鳴る。

本来であれば見習いのルディエラはこの時刻は道場の掃除だが、そんなこともつかり忘れて他の隊員のすみで拳を握りこんで兄を応援してしまった。

兄様、強い。

華奢なティナンだが、いつさいの無駄を省くよつと動いた。おそらく体力の消耗を抑え、なおかつ相手の体重や動きすら利用しているのだ。次兄の力任せの戦いとは違うのだ。

ベイゼルが腹部を押さえ込みへたり込めば、救護係が一人近づきベイゼルの体を引き上げた。

なんて羨ましい。

ぼこぼこにそれでいるが、兄に稽古をつけてもらえるなんてなんて羨ましい！ ルディエラは心からベイゼルに嫉妬したが、その思いはすぐに消えた。

「見習い！ アイギルっ」

突然、兄の冷たい眼差しがルディエラを捕らえ、さういきつい口調で言った。

「職務をさぼるとはいひ度胸ですね。  
来なさい 稽古をつけよう」

それは天上の誘いだった。  
すくなくともルディエラには。

だが、さすがに他の騎士達が戸惑いつゝに声をあげたのだが、ティナンはそれを一瞥で黙らせ、顎でルディエラを呼んだ。

呼ばれたルディエラはまるでうきが跳ねるようにぱたぱたと兄の元へと駆け寄り、心底嬉しそうにぺこりと頭を下げた。

「お願いします！」

身軽さには自信がある。

セイムとの訓練で、女の体がどれだけ力が無いかは承知している。  
力のかわりに自分にあるのは軽さと敏捷性。それは最大の武器。

だがルディエラはそんな容易いものではないのだと、すぐに知ることとなつた。

自分はただ彼等の組みあう様を見ていただけ。一方、ティナンの体はすでに慣らしを終えて体も適度に温まっている。ベイゼルの時のように相手の意表をつくような動きは見せなかつた。ただ率直にティナンの手が襟首に伸びる。

先ほどの様子を見ていたルディエラは、頭の中で兄の動きを軽く分析していた。一度目の動きは陽動。一二手・三手先の布石。だが、ティナンはそんなことをしなかつた。そうするまでもないと判断されたのだ。

侮られた。

力つと自分の熱があがる。

つかまれた襟首に怒りがわいて、ルディエラはそれを振りほどこうと身を沈めたが、その力は存外強い。それならと相手の下半身を狙

おうと切り替えた。

途端、ルティエラの体は容易く宙を舞い上がり、どすんっと音をさせて地面に叩きつけられた。ついで腹に一撃、混乱する頭が全てを理解するより先、押さえ込まれ腕を逆手に捻り上げられ、ついでティナンの低い声が言った。

「腕を一本、貰います」

「腕を一本、貰います」

ぞくりとする間に捻られた左腕がぎしづと悲鳴をあげる。

兄、兄もまつ。

歯をぎりぎり噛み合わせためめき声がもれそなその時、

「ヤレマドリー！」

深く鋭い声がその場に響き渡り、声と同時にルディーハラの上にのしかかっていたティナンの体が他の騎士達によつて引き上げられた。ティナンが彼らしくなく舌打ちする音がルディーハラの耳に容赦なく届いた。

息が上がり、身が震えていた。

頭の中がもわもわと氣振り、耳鳴りが響く。

立ち上がらなければいけないといつのに、体は言つことを利用かない。左腕がしごれてやけに重く感じられたが、折られる音はしなかつた。そう、折られてはいけない。

折られたのは、心だ。

兄は本氣で、腕を折ろうとしたのだ。

誰かの腕が自分の上半身を引き上げ、立たせようとする。

そこではじめてそれが騎士団の制服ではあるが、他の隊のものであると気が付いた。

そして、先ほどティナンを止めたのが、彼等の主であることも。

どこか別次元のもののように視界に入り込む第三王子殿下は、厳

しい表情でティナンを見つめ、「新兵虐めのよつな真似を許した覚えはないぞ」と低く告げている。

「ただの訓練の一環です」

言葉を向けられたティナンは無機質な言葉で返した。

吐息を落とすと、キリシュエータはルディエラを支えている騎士に「救護室へつれて行け」と命じた。

「殿下、これは我が隊のこと。余計な手出しさ困ります」

「判つていな、ティナン。確かにこれをあまえに預けたが、漬せと命じた訳ではない。一週間見ていればただの下働き扱い。おまえの率いるのは騎士であつて従卒ではない。その拳句にこれだ。少しは頭を冷やせ」

「」

「確かに特例だらう。突然の人事で不満を持つものもいるだらう。だがその筆頭が隊長であるのはいただけない。おまえの不満で私刑まがいなことを許す程、私は愚かではないつもりだ」

とんとん、殿下の拳が扉を相手にするよつに氣安い調子でティナンの胸を叩いた。

「今日はあれの訓練は終いだ。いいな」

\*\*\*

「やられたか?」

救護室に引きずられるよつに連れていかれれば、そこには上半身に包帯を巻いたベイゼルが器用に自分の左手に包帯を巻きつけ、歯と指とをつかつて包帯の端をきゅつと結んでいた。

その姿を見た途端、ぐつと腹部に何かがこみ上げてきたが、ルディエラは必死で耐えた。

今も兄の冷たい声が耳の奥で響いていた。

腕を一本、貰います。

そこまで、嫌われているとは思わなかつた。

「ベイゼル、彼のことを任せても?」

ルディエラを連れて来てくれた騎士が問いかければ、ベイゼルが

「へいへい」と軽く手を払つ。

ルディエラはベイゼルに椅子に座れと言われたままわり 途端に、奥歯がきしりと音をさせるほど歯を食いしばつた。そうしなければ無様にも泣いてしまひそうだつた。

「どうしたよ? 怪我してんのか? ほら、見せてみるよ。言つとくけど、救護兵を期待すんなよ? 騎士団の人間は皆その訓練だつて受けてるんだからよ。自分でやるんだ」

いや、ここのはいるんだがなー、どうせ薬草園とかにいっちゃんとてるんだよ。

ぶつぶつといながり、ぱっと見ただけで判る擦り傷の為の軟膏に手を伸ばすベイゼルに、ルディエラは小さく身を震わせながら、小刻みに首を振つた。

「つたく、泣きたいなら泣け、うぜー。

痛いなら痛いつて言え。他に誰もいねーよ。オレはおまえの副隊長で同室だからな。訓練の愚痴くらいは聞いてやる」

ぐいっと腕をつかまれ、痛みに悲鳴をあげた。

ベイゼルが眉をひそめて袖のボタンを器用にはずして引き上げると、二の腕は赤くなつていた。腫れでいるまではいかないが、おそらく時間がたてば赤紫の痣になるだろ?。

「あー、こりや痛いな。ははつ。見事」

言いながら軟膏をべしやりとその腕に落とした。

右手で手首を掴み、左手で軟膏を伸ばしていると、小刻みに震える

ルディエラの口から小さな嗚咽が漏れた。

うつむいたまま

「痛い、です……とても、とても、痛い」  
堪えきれなくなつた涙が、ルディエラの汚れたズボンに滴り落ち、  
じわりと染み広がつた。

体が痛いのではない。心が、痛い。  
兄に完全に、嫌われている。妹の腕を折りうとする程！  
そんなに憎まれるなんて思つてもいなかつた。  
冷たい視線を向けられるなんて。  
冷たい言葉を向けられるなんて。  
ちつとも思つたことなど無かつた。

「隊長容赦ねーからなあ。ま、明日になれば痛みも忘れる」  
軟膏を塗つたあとに驚く程綺麗に包帯を巻きながら、鼻歌交じり  
に言つベイゼルに、ルディエラはうつむいたまま何度もうなずき、  
きつとムリだ。と思つていた。

「この痛みは、ずっと忘れられない。

忘れたくとも、忘れることなどできない。」

もう、駄目だ。

もう帰る。

ルディエラは寝台の上に両膝を抱えて座り、膝頭に強く額を押し当てながら自分の内面と戦っていた。

へこたれるな、負けるなという自分。大好きな相手に嫌われてまで無駄なことをする意味など無いと喚く自分。

このまま軍にいたところで、決して軍属でい続けることはできない。

そんなことは理解している。けれど、それでもこの空気に触れないと望み、またその不毛さに叫びだしてしまいそうになる。

カーテンの向こうに副隊長はない。

夕食を済ませた筈だが、戻つて来る様子は無い。だからそれをいいことにルディエラは一人で黙々と孤独と戦つていたのだが、やがてそれは一つの小さな音によつて破られた。

こんつと、ためらいがちな音。

ついでこんこんつと続いて。そのまま扉が遠慮がちに開いた。

「いるのか？」

おずおずとした声は、あまり覚えが無い。

正確に言えば、ルディエラは下働きばかりであるから騎士団の人間と親しく会話を交わしたことは無い。

きちんとした紹介も受けていないのだ。

ただ、見習いとして入った者がいるとだけしかティナンは言つてくれなかつた。その為か騎士団の人間はベイゼル意外よそよそしくルディエラを避け、話しかけてもくれない有様だつた。

「チビ」

だからおそれらく名前も覚えられていない。

はじめは遠慮がちだった声が部屋へと入つてくれる。

すかすかと入つてきた足音は一人のものではなく、数名 三人だ。 気配でそれをさぐりながら、わずかに湧き上がる恐怖にぶるりと身を震わせた。

さつとカーテンが引かれると、ついでふわりと美味しそうな香りがルディエラの鼻腔をくすぐつた。

視線をあげた先、まだ年若い騎士達が普段着姿できこちない笑みを浮かべ、そのうちの一人は食事用のプレートを手に軽く手をあげた。

「メシ、食つてないだろ？」

「……あの、ぼくに？」

戸惑いながらプレートと相手の顔とを幾度も確認するように見れば、照れくさそうに笑つた。

薄暗い部屋であまりわからないが、確かに第三隊の人間だ。

「ワリイな。オレ達おまえと話すな、近づくなつて言つてさ」

「それに、おまえつて特別待遇の縁故か何かなんだろ？」

「ま、気に入らないつてのは確かにあるんだよ でも、さすがにちょっと悪いと思つたから」

口々に言つられて驚きながら、ルディエラは押し付けられたプレートを寝台の脇に置いた。

「あの、ぼくと喋つちや、駄目だつたんですか？」

「ま、ティナン隊長もちょっとどうかと思うけどや。気持ちは判るからさ」

「でもおまえがんばつてるよ。隊員の馬の世話も、掃除だつて本來なら士官学校の連中の仕事なんだよ。しかも一人一組でやるんだ」

ああ、やつぱつ。

はじめてまつといに他の隊員と会話を交わしながら、ルティニアの心は喜びと悲しさに満たされた。

無視するようにと命じつけまでしたのだ。

殿下は「いじめ」と言つた。「いじめ」の筆頭が兄である」とは疑いようが無い。

「冷める前に食えよ」

うながされて、慌ててうなずきながらルティニアは泣き笑いの顔で礼を言つた。

「ありがとウイゼンマウ」

「お、おう」

ペリットと頭をさげるが、途端にぎこちなく返答が返り、ついでルティニアの頭にぽんつと手が乗つた。

「殿下がとりなしてくれたから、明日からせ下働きみたいな仕事じゃなくなるつてよ」

「良かつたね」

「おまえがんばってるよ。監、ひやんと判つてるからわ」

口々に言いながら、あわただしく出て行く彼等を見送りルティニアは必死に溜めていた涙を数粒落とした。

がんばり。

もともと、判つたことじやないか。  
うん。がんばる。

二ヶ月、ぼろぼろになつて軍に嫌氣をもして帰つて来い。

セイムはやつ言つていたじやないか。  
もつともつとせひまつになつて、もつとがんばる。

「よしひ。食べよつー。」

兄に嫌われてもいい。その分自分が兄を大好きでいよう。

大丈夫 大丈夫だ。

根拠の無い大丈夫を呪文のように繰り返し、ルディエラは差し入れられた食事を余すことなく平らげようとした。

「……量、多すぎ」

おそらく好意であるつ、普通盛りだとて青年男性の腹を満たすに十分なその食事が、山盛りだつた。

「え、これつていじめじゃないよね？」

\* \* \*

「……邪魔臭い」

ぼそりと落とされた言葉を無視して、ティナンは三つ編みにあまれたオレンジ色の髪を両手で握り締めて幾度目かの溜息を吐き出した。そう、それは遺髪を手にする遺族のように辛気臭いしぐさで。

「おにいちゃんは、一刻も早くこんな場所から可愛い妹を引き離したいだけだというのに」

「うざい」

「嫌われたらどうしてくれますか。もう全部が全部殿下のせいです。殿下がおかしな氣まぐれをおこすから。陛下同様禿げてしまわれればいい」

「人の悪口を当人の前で言うな。ついでに私は母親似だ。その台詞はうちの長兄に言え」

びしりとキリシュエータが言つと、執務室の応接ソファで自棄酒やけだけを飲んでいる彼の幼馴染は恨めしいという視線を向けた。

「居ないところで言つたら不敬罪になるから当人の前で言つているのです」

「……当人の前でも確實に不敬罪だらう」

「そして陛下の悪口はどうなんだ。」

「殿下は妹がないから妹の可愛さが判らないのですよ。羨ましいですか、ぞまーみろですね」

「おまえ、飲みすぎだぞ」

それに、妹ならいた筈だ。

産まれて半年足らずで死んでしまった妹。失われた四番目のお供。ただし産み落としたのは父の妾の一人で、女を産み落としたことに絶望し、自ら殺してしまった。

男であればどうだつたというのだろう。すでに上に三人もいるのだ。男を産み落としたところで何も変わらないというのに。

愛妾は王の子を殺した罪で投獄され、処断された。一度も見たことすらない妹。共に暮らし、生きていれば何かがかわつただろうか。

「つかの妹は可愛いんです」

「おまえを見ていると妹なんてものは持たないに限ると思ひな」

「あげませんから」

「いらん」

キリシュニアータはきつぱりと言い切り、もつ仕事にならないと掛けていた眼鏡のフレームに手をかけてはずし、眉間の辺りを軽くもんだ。

「ルディエーラは誰にもあげません」

「迷惑な兄だなあ」

「ルディエーラに嫌われたら殿下のせいですかねー」

「……おまえ、明らかに自分のせいだろ」

「馬は？」

手袋をはめながら言つベイゼルの言葉に、ルティエラは間髪要れず  
に「好きです」と応え、軽く頭をはたかれた。

「阿呆。乗れるのかつて意味だろ」

「の、乗れます」

騎士を目指していたのだから、当然乗馬訓練だつて受けている。  
ルティエラの自慢はたとえ女性用の横鞍であろうとも障害物を越え  
られることだが、一度長男にこつぴどく叱られたのでそのことは秘  
密だ。

「おう。んじや、訓練のはじめは馬だ」

副隊長が率いる七名に混じり、翌朝ルティエラがはじめてまつと  
うな訓練を許されたのは馬術訓練からだつた。

「ちなみに遠駆け」

大雑把な副隊長は自分の指で「あつちからあつちまで」と、視界  
に入る山の中腹辺りを示し、「あのあたりにリンドゴの木があるから、  
それを三つばかりもつて速く戻る。昼の為の携帯食は不可。自分で  
狩れ。最後のヤツは今夜の酒、全額負担」はじめつぞーとおもむろ  
に出た言葉に、ルティエラは慌てて馬房から引つ張つてきた馬の鐙あぶみに足をかけた。

「チビ」

ふいに掛けられた言葉に、視線を向けると少し前で馬の首を撫で  
ているがしりとした体躯の男がニヤリと口元を緩める。

「おまえ、慣れてないだろ。オレと行くか？」

昨日夕食を運んでくれた相手だ。

声を掛けられた嬉しさでうなずいたが、黒毛の馬の副隊

長が「アイギル、騙されるなよー。そいつは最後の最後でおまえをビリにしたいあくどい商人魂を持つていい」と茶化すように口の端を持ち上げた。

途端に他の隊員達までもが口元をゆるめた。

「言つちや駄目でしょ」

「ま、この場にいる人間は全て同じ考え方だ。甘えるな」

その言葉でルディエラがその場にいる馬上の騎士団員の顔を順番に見ていけば、皆一様ににやにやと意味ありげにルディエラを見返してきた。

カモかつ。

ルディエラはむつとじ、ついで自分が侮られていることに腹をたてた。

確かに自分は小さいが、どうしてこう侮られなければならないのか。ここは絶対に負けられない。

「んじゃ、出発。遅くとも夕飯前には戻れよ

ベイゼルの言葉に誰よりも速く馬を走らせたのはルディエラだった。

\*\*\*

「おまえ、馬鹿だろ?」

誰よりも速く出立したルディエラだが、誰より早くバテたのもルディエラだった。

「短気すぎだし。物事をよく考えろ?」

「……」

「見えるからって、一日掛ける訓練だぞ? 近いと思つなよ。馬を潰す気じゃないだろうな?」

淡々と言われる言葉にルディエラは黙々と水を飲んだ。

はじめのうちに距離をとらうと、途中である川で水の補給を忘れたのだ。水分はないし、無理やり走らせた馬は不機嫌になるし、最終的に馬が完全にヘソを曲げ、ぐったりとしているところでベイゼルに頭をはたかれた。

「配分も考える訓練なんだよ」

「面目ありません」

水場を理解しているベイゼルに川に連れて来られ、ルティエラはふてくされるように直に川に口をつけるようにして「ぐぐぐ」と水を飲んでいたが、最終的に自ら頭を突っ込み、ベイゼルは「ふふつ」と噴出した。

「まー、簡潔な頭の冷やし方」

犬のようにぶるぶると頭を振つて水気を飛ばし、ぱしじと頬を討つ。

「行きます！」

「まーで。まてこひ」

ぐるりと身を翻そうとしたところで襟首を引っつかまれた。ベイゼルはぐいっとルティエラに顔を近づけ、ニヤリと口角をもちあげるようにして笑つた。

「金あるか?」

「は?」

「金だよ、金」

「きょ、きょうかつ?」

かつあげ?

田を見開いて言つと、更に頭をはたかれた。

「ちげーよ。おまえはこのまま行くと今日の酒代を全額負担だ。おまえも含めて総勢九名。一人あたり銅貨で一枚 そうだな。酒だけじゃねえな。つまみなんかもつけると、銀貨で一枚いつちまうかもな?」

その単純な計算にぞつとした。

「な、無いですよ！」

無い訳ではないが。

それでなくとも銅貨で十枚、すでにセイムにもつていかれた後だ。

「そこでだ」

ふふふつとベイゼルは悪い笑みを浮かべてみせた。

「銀貨一枚出すなら、俺様が特別におまえを連れていくつてやるつ。俺はこの訓練のプロだ。昼寝していたつてケツにはならねえ。悪い話じやないだる」

「恐喝どどが違うんですか！」

ルディーホラはギッヒベイゼルを睨みつけた。

「ぼくはズルはイヤです！」

「チツ、いい話なのになー。 おまえ、後悔するなよ」

などと悪な台詞を吐き捨て、ベイゼルは高笑いしながら血の馬の上に飛び乗り、

「迷子にはなるなよーっ」

「ちょつ、どひちに行けばいいかぐらには教えていけーっ

水場に行く為に道をそれでいるのだ。

ルディーホラは地団駄を踏むみつにして叫んだが、自分の声が木々の間をこだまするだけだつた。  
絶対に見返してやる。

ドチクショウつー！ 覚えてるつ。

ルディーホラの決意は堅い。

「「」馳走様でーす」

多重音声で聞こえる言葉に、ルテイヒラはしごひびと酒の入った口ブレットを傾けながら、

「どういたしまして」

と、自分であやふやな言葉を吐いた。

どれほど粗手を打ち負かしたいという野望に燃えていたとしても、現実というやつは厳しいものだった。

ゴール一歩手前でうつすらとした笑顔でまつっていたベイゼルの姿に「副長は本当は優しいんだ！」と一瞬感動すら覚えたが、実際はこれみよがしにほんつと一歩進み出て、にこやかに「本日の出来あるケツ決定！」と他の連中ともども喝采をくれた。

「」の隊には鬼しかいない。

「今日はアイギルの歓迎会だからな。遠慮せず飲め」遠慮する。少しば遠慮しきつ！

ルティヒラはゴブレットを持つ手をふるわせた。

自分の歓迎だといわれたところで自分が代金を持つことを知つていいる為に素直に喜べそうにな。

しかも人数が増えている。

第三隊の人間全てがこの狭い店に揃つていた。

一通り自己紹介をすませはしたが、一気に詰め込まれた名前はあやふやだ。

ルティヒラはその人数とまるで水のように消費されている酒に諦めの溜息を吐き出した。

銀貨？ 金貨だろ…… ハレ。

何かあつたらの為に、<sup>ちょうづか</sup>長靴の底にはそれぞれ金貨が一枚づつ隠されている。だがそれは物心ついた頃からの習慣で、父が仕込んでくれたものだ。何かなどあらうものでは無いと思つていていた為に、本気でコレを使わなければならぬ日が来るとは思つていなかつた。

……そしてその理由があまりにも阿呆過ぎる。

「戦士はいつでも何かの為にそなえるものだ」

と、父であるエリックはこの金貨を仕込みながら豪快に笑つていたが、確実に父の想定した何かはこんなことでは無かつた筈だ。親不孝な娘でごめんなさい。

ルディエラは天空の父に詫びた　　ぱりぱり生きているが。

騎士団はもつと高潔なものではあるのか？

やることといえば騒いで賭け事で酒場で飲み会……

ふと、ルディエラは視線を感じてちらりと視線をあげた。

兄さま。

狭い店内だが、近づくのもイヤだといつぱり正反対の席に兄がいる。

ティナンは冷たい眼差しでルディエラを見ていた。

その視線が怖くて、痛くて、瞼が自然とまた下がる。ベイゼルが軟膏を塗りながら「明日になれば痛みはひく」と言つていた腕が、また痛む気がした。

いたたまれなくて、ゴブレットの中身を一気に飲み干した。

カツと喉の奥が焼かれるような衝撃。ぶふりと咳き込むと、近くの男がゲラゲラ笑いながらルディエラのゴブレットに酒を足した。

「飲めっ！」

がしがしと頭をかきまぜられながら、遠い場所にいる兄の視線が  
いつそう冷たくなるのを感じて、ルディエラはやけっぱちで酒をも  
う一口飲んだ。

嫌われても平氣なんて、嘘だ。

自分が兄さまを大好きでいれば平氣なんて、嘘だ。  
何をしてもティナンの視線がきつくなる気がして、このまま消えて  
しまいたくなる。

騒がしい店内だといふのに、どんな場所にいねよりも孤独と慘めさ  
がひしひしと自分の身を侵食していくのを感じていく。

ちびちびと酒を飲みながら涙を堪えてると、ふいに髪を無遠慮  
にくしゃりと混ぜられた。

うつむいていた顔が瞬時にあがる。

「どうした、にんじん？」

ぶほつと口に含んでいた酒が口から吐き出され、力一杯自分をのぞ  
きこんだ相手の顔にかかつた。

咄嗟に「トウモロコシの髭つ」と呟んでしまい、慌てて口をふさ  
いだが、面前の男の耳にはじっかりと届いてしまった。噴出した霧  
状の酒と共に。

面前にいるのは明らかにトウモロコシの髭 第三王子殿下キリ  
シューネータだが、その衣装は一般騎士と同じもので完全に場になじ  
んでいる。

変装のつもりか知らないが、眼鏡をかけていたのだが、ルディが  
吹き付けた酒をモロにくらつてしまい引きつった顔で眼鏡を外し、  
胸のハンカチでぬぐつた。

「いい度胸だな」

「な、何してるんですか？」

動搖して周りを見回すが、他の一般騎士達は自分達が飲むのが忙しい。

少しも気に掛けていないのは気付いていないのか　いや、これが良くあることだからだろう。

というかいいのかソレで？

第三王子殿下キリシュエータはルディエラの隣にぞきつとすわり、今となつては誰のグラスだか判らないグラスに自ら酒をつぎながら言った。

「タダ酒飲みに」

楽しそうな相手と違い、ルディエラは自分の懐と、そして反対側から更に怒り波動を撒き散らしている兄ティナンが気がかりで覚悟を決めた。

潰れよう　お酒なんて好きじゃないけど。

潰れた後のことなど知つたことか！

【元騎士がやつていいる兵舎にそぞり近い場にある居酒屋】【アビオンの絶叫】は元騎士と諜報を生業としていた女達数名の居酒屋で毒味など一切気に掛けることなく楽しめる店の一つだ。決して広くは無い店内だが、騎士達で今はひしめき下りない喧騒が満ちている。

そして、それは突然のことだった。

ちびちびと酒を飲んでいたルティエラだが、ある時を境に判りやすく言えば、隣にへたくそな変装をした王子殿下が座ったあたりから、自棄のように酒を飲み始め、ふとキリシュエータが眉間に皺を刻んだところでおこつた。

「ぬげつー。」

ふふふふふつと微笑を湛えたルティエラは、突如すくりと立ち上がるが、少し離れた場所で陽気に酒を飲んでいた一番体躯のいい平騎士の裾をぐいと掴み、「脱げ」と言つたのだ。

一瞬場に静けさが舞い降りた。

キリシュエータはまつたく意味がつかめず、眼鏡がずり落ちるのを感じた。

その時のルティエラの表情ときたら、嬉々として追いはよきよろしく相手から衣類を剥ぎ取ろうとしている。

「ぬげ、ぬげつ、ケチケチするなー。」

「つぎやあつ。」

助兵衛なおつさんのような台詞を吐き出し、新入りが田を据わらせて極上の微笑を湛えて脱がしにかかるといつ悪夢に、つかまつたダレサンドロは悲鳴を上げた。

しかも他の人間は程よく酒が入つてゐる為にゲラゲラ笑いながら「やつちまえーっ」「貞操の危機だ、にげろお」と無責任な野次を飛ばしている。

「な、なんだアレは」

呆然としたキリシュエータだが、このままではいけないだろうと席を立つてルディエラの肩に手をかけたのだが、目のすわつている酔つ払いときたら王子殿下を睨みあげた。

「優男に用はない！」

「なつ、何をしているんだ、おまえは」

「いーですかー！世の中は筋肉です。筋肉でできているのでーす！筋肉が正義、筋肉が愛、筋肉が平和！」

筋肉を隠すなど言語道断！世界平和の為に筋肉は晒すべきである。超理論の展開に周りの人間は腹を抱えて笑つてゐる。

「筋肉の無い者に人権など無い！」

「おまえ、自分を棚にあげてなんということを」

「なんだとあつ！ボクは筋肉質ですよ、鳥肉だつてゆで卵だつて食べているんですよ。人の努力を馬鹿にするなつ」

言ひや、おもむろに脱ごうとするものだからキリシュエータはギヨシとしてその手を引っつかんだ。

「やめる、この酔つ払い」

「酔つてるわけないだろ！こつちは冷静ですよ、ははは。へソで茶が沸くくらいレーーセーだ」

「まったく意味が判らん！」

新入りと軍事将軍の掛け合いに周りの男達はのたうちまわる。

しかし、この中にはつて一人、絶対零度の冷ややかさを持つティナンはゆつくりとその騒ぎに近づくと、厳しい眼差しでルディエラを睨みつけ、ついで手にしていた酒瓶の中身をどぼどぼとルディエ

ラの頭からぶちかけた。

「いい加減にしろ、この酔っ払い」

シンッと、それまで騒がしかった騎士達が息を飲み込む。酒の場では無礼講。どんな騒ぎになつたところでティナンが隊長風を吹かせて仲裁に入ることなどない。だが、そのティナンが騒ぎの元凶に怒鳴りつけ、あまつさえ頭から酒を掛けた。

騎士達にしてみれば、二人の仲が悪いのは周知の事実だ。だが、この場で相手の行動を諫めに入るのは思つてもいなかつた。

それまで他で馬鹿騒ぎに興じていたベイゼルまでもが嘆息し、ルディエラを回収しようと足を踏み出しかけたが、その場の空気をまったくかえる行動を ルディエラはしでかしたのだ。

「大っ嫌いいい！」

うわーんっと号泣した拳句に物凄い大音量で叫んだのだ。ぶふつとどこかで誰かが噴出すのを皮切りに、皆必死で笑いを堪える。まるきり子供のように嫌いなどといふ台詞を吐いた当人はぐしぐしと泣きながら、ティナンを睨みつけて「大嫌い一つ」を連発し、言葉を叩きつけられているティナンは顔面蒼白、茫然自失の様相で軽く手を持ち上げたまま立ち尽くしていた。

キリシュエータの視線が少しばかり同情を込めて幼馴染を見て、ついでこの酔っ払いを外に連れ出すべきだと判断して動こうとしたのだが、笑いを堪えられずにぶふぶふと奇妙な音をさせているベイゼルがそれより先に濡れ鼠の襟首を引っ張つた。

「隊長、これはさつさと風呂に叩き込んで休ませますからー」

「……」

「んじや、後のことば頼ります」

「……」

ふえーんっと泣くルディエラを軽々と小脇に抱えるようにして出て行くベイゼルをティナンは見送ることもできなかつた。

……大つ嫌い。

脳裏に鐘楼の鐘のように言葉が響き渡り、その瞳は完全に瞳孔が開いている。

キリシュエータは軽く嘆息しつつ、その顔の前で手を振つてみたが、幼馴染の反応は無かつた。

頭の中で「大嫌い」という言葉が幾度も幾度も木靈する。  
くわんくわんっと果てしなく。

しかも泣きはらした真っ赤な瞳で自分を上目遣いでみあげてくるル  
ディエラの顔。

呆然自失しているティナンの横、キリシュエータは行くあてを失  
つた手を幼馴染の肩にぽんっとおろした。

「なんだ、その、つまり。生きてるか?」

「……殿下の、殿下のせいです」

ゆつくつと視線をあげてつむいた彼の副官は、まるで呪いの言  
葉のように低く恐ろしい言葉を呟くと、わざわざつと酷くゆつくつと  
した動きで自分の主を睨みつけた。

「殿下のせ・い・ですっ」

「だから、自分のせいだらうが」

そんな二人のぼそぼそとしたやりとりなど知らぬ他の騎士達とさ  
たら、相変わらず酒をすき放題に飲みながら騒いでいたが、深い溜  
息と共にキリ・シュエータは気付いた。

「誰がここに代金もつんだ?」

\*\*\*

頭から酒を掛けられたルディエラを第三騎士団の宿舎に連れ戻つ  
たベイゼルは、まるでモノのようにじりじりと浴場にルディエラを放  
り込んだ。

「酒臭い! きちんと洗い流せよ」

「ふあー……」

ルディエラは曖昧な返答を返し、酒で張り付いた自分の髪を引っ張つた。

頭がくらくらとするのは酒が過ぎたのだろう。自分の行動もどこかあやふやだ。大泣きしてしまった為に田元もぱりぱりとする感じだし、どこかはれぼつたい。

隊服のまま浴室へと放り込まれた為、はめ込まれた石タイルの上でもそもそも衣類を剥ぎ取り、夕方以降であればいつでも入ることができるようになつている湯船の中に入り込んだ。

確かに「湯船に入る前に体を洗え！」といわれていたが、失念した為に酒まみれのまま入り込んでしまった為なのか、浴室全体がふわりと酒臭い。

ほわほわと漂う湯気と酒気。

縁の辺りに顎を乗せてぼんやりとしながらルディエラはまたしてもじんわりと眦があつくなるのを感じた。

「 にーさまー」

最近のティナンは怒つてばかりだ。

以前のように優しく頭を撫でてもくれない。瞼にキスもしてくれない。抱きしめてもくれない。

兄のことを考えるとせつなくて涙腺が緩んでしまつが、もともとこんなに泣き上戸な性質ではない。こんな自分は嫌いだ。

「嫌い……嫌いだ」

こんな自分大嫌いだ。

ほわんとした空気が、酒気が体にまとわりつく。くつたりとしたままルディエラは瞼を閉じた。

自分はいつたい何をしているのだろう。

兄さまはきっと今も怒っているに違いない。あの優しい兄さまをこんなに怒らせるなんて自分は凄く最低だ。

とりとめもない思考がぐちゃぐちゃと巡る中、ぐつたりと湯船の淵に腕を預け、その上に顎を乗せてルディエラは思考を弱めていつ

た。

暖かくて、ほほほほほほ、とも……眠かった。

「アイギール、おいつ、じんだけ長風呂なんだよ  
ベイゼルは困惑していた。

放置してやつても良かつたが、結構な酒量を飲んでいたのを知つて  
いる為にうかつに放置できない。だからといって浴場を覗く訳にも  
いかず、どうにも困つた現状だった。

俺が好きなのはガキじゃなくて、出でとこは出で縛まるといは  
締まつたイイオンナだ。

具体的に言えば心の恋人ナショリー・ヘイワーズ中尉のよう、  
巨乳だ。

たとえ先日、酔いに任せとその中尉の胸をちょっとだけ、ほんのち  
ょつとだけ親愛の情を込めて撫でた 鶯づかみした だけでそ  
のまま情け容赦なくボコボコにされてしまつたとしても、心の恋人  
の地位は微塵もゆるんではない。

オレは決して教育途上のガキなどに用はない。

三度程頭の中で唱え、よしそと強くと思い切つて浴室の扉をひら  
いて怒鳴つてみたが返事が無い。

嫌な予感がして覚悟を決めると、はたしてそこで見たものといえ  
ば湯船の中で寝てゐるルディーハラだった。

「ぱーかーやーるおおお

湯船から伸びた両腕組むよつこして、その上に顎を乗せてくーく  
ーと寝てゐる。これを引き上げて着替えをせりつて、

「これは据え膳？」

いやいや、これに手を出したらどんな慰めしことがあるか知れな

い。なんといつてもあのティナンの妹で、そしてヒリックの愛娘なのだ。

「おまえは悪魔か！」

ののしりながら、それでも誰か呼ぶ訳にもいかないベイゼルは仕方なくルティエラを浴室から引き上げた。

白い肌が湯中りの為か、それとも酒の為にかほの赤く染まっている。見てはいけないと思いつつ、それでも「これくらいは役得がないと」などと抱き上げた少女の体をちらりと眺め、絶望に呻いた。

「……おまえ、第一次成長くらいしとけよ」

立派なまな板だった。

体を鍛えた為だろう。胸といつよりは胸筋きょようきんと湛えてやりたい。もめば育つだろうか……

うわ、なんだろ。泣きたい。

確かにこれでは女とばれないだろ。なんだかいたたまれない気持ちになつて、片手で器用にその体にタオルを掛けてやつた。さて 着替え、着替えね……

「なんだろね、この楽しいようで楽しくないの」  
何だか可笑しくて、ぶふりと噴出した。

おとーどがいたら、こんなかもしれない。

とりあえずコレを見て欲情するような事態にならなかつたことにホツとした立派な成人男性ベイゼルだった。

＊＊＊

「私はタダ酒を飲みに来ただけなのになー」

嘆息交じりに皮の財布からロイインを出す軍事将軍に、しかし召高  
き【アビオンの絶叫】の主人ドラッケン・ファウブロはあつせりい  
つた。

「足りやせん」

「……まける」

「まかりませんなあ！ つちほ<sup>女</sup>安全安心、明朗会計。お上御用達で  
すぜ」

「私がお上だ」

第三王子殿下が口元を引かしつらせても、ドラッケンはふふふんつ  
と鼻を鳴らした。

「まかりませんなあ！」

ドラッケン・ファウブロは殿下とこえども負けません！

「おとーさま」  
太陽の光にきらきらと輝くオレンジ色の髪。  
小さな手で花を摘んで、ぱたぱたと駆け寄る愛らしい娘。「おとーさま。ルディは素敵な花嫁さまになるの。すうごい綺麗になつておとーさまと結婚するの」と、ルディエラが言つていたのは四つまでだった。

「おとーさま」  
久しぶりに遠征から戻つたエリックの元に駆けてきた彼の小さな宝物は、その時すでに兄の着古したズボンにシャツ姿で、それでも瞳をきらきらさせて言つた。  
確かに、もうまるなくで五つになるつかといつ頃合に。

「おとーさま、ルディは剣がほしい」

「そんな危ないものは駄目だ」

咄嗟に言つたが、途端にルディエラは瞳を潤ませて見上げてくる。「だつておとーさま。ルディはおとーさまみたいに強い剣士になりたいの。大好きなおとーさまみたいになりたいの」

その時のエリックは鼻の下を無様にぐるーんと伸ばし、脳内では花が咲き誇つていたに違ひなかつた。

娘とは何故ここまで可愛いのか。

長男は怖いし、次男は自分に似すぎているし、三男は可愛くないし、四男はわけが判らないし……と、息子達が父の頭の中を覗いたら、結託して墓穴を掘り出しそうなことを父は考えていた。

「そうかー、おとーさまみたいになりたいのかー。おとーさまがそんなに好きかあ」

「うんー、おとーさま大好きつ。おとーさまみたいにルディすうごく強くなるつ」

「うんうん、いいぞ。大好きなおとーさまみたいな強い騎士にならうなあ」

軽々と抱き上げてくれる優しい父。逞しい父。

「筋肉は正義 つ！」

自分の声でばちりと田を覚ましたルディエラは、そこが兵舎にある浴室 正確に言えばベイゼルと共有する部屋の寝台だということに気付いた。

ばちりと目をあければ、薄暗い天井。窓を見ればカーテンの向こう側はほの明るく明け方であることが知れる。

そして、更にカーテンの向こうで「ううう、やめろおお」と何故か苦しそうな声が漏れ聞こえ、ルディエラはもぞもぞと体を起こしてカーテンを開き、反対側の寝台で呻いているベイゼルに顔をしかめた。

悪夢でも見ているのかもしれない。

その点、ルディエラは良い夢を見た。夢の中で父に鍛えもらつている夢だ。夢の中のルディエラの腕にも足にも理想的な筋肉がしつかりとついていた。それを思い返すとつとつとしてしまう。だが現実を見れば、自分の腕はいまいち筋肉質ではない。やせっぱちの腕は無駄な贅肉がちよろつとついている。どうしてこの贅肉が落ちないのかが不思議だ。固くてきわめて伸縮性の優れた筋肉をせひともつけたい。深い溜息を吐き出し、今度は窓辺のカーテンを引いた。

本日は天気がよさそうだ。

ほんの少し霧が出ているようだが、きっと晴れるに違いない。体調もすこぶるよそうだし、気分もすつきりとしている。今日は絶好調だ。

\*\*\*

「なんでおまえはケロッとしてんだよ…」

朝の身支度を終えて食堂に行くと、何故か色々な人間から声を掛けられた。

「え？」

「一日酔いとかないのか？」

「ああ、ぼくお酒強いんですよ」

ルディエラはさらりと流した。

好きではないが強いらしい セイムが「おまえは飲むな。酒が無駄だから」と言っていた。確かに途中で記憶はふとんでしまうが、そのかわりのように翌朝はやたらと爽やかだし体も軽い。

味は好きではないが、これから毎日飲むのもいいかもしない。

「おまえみたいなのは酒が強いつて言つんじゃない！」

ベイゼルは顔色が悪かった。

あげくその顔面にはどこかでぶつけたような痣まであるのだ。

「喧嘩でもしたんですか？」

「……したくてした訳じやねえよ。風呂場で隊長と鉢合わせした挙句、問答無用で殴られただけだ」

その言葉にルディエラは驚いた様子で瞳を幾度もまたたかせ、軽く首を振った。

「副長が何か悪さしたんでしょ。隊長が訓練意外でそんなことするなんて考え付かない。ちゃんと謝つたほうがいいですよ？」

「おまえはほんとつに可愛いヤツだな！」

ぐーすかと気持ちよく寝こけている馬鹿娘の着替えをさせていたところでティナンが風呂場を訪れ、問答無用で襟首を締め上げられた挙句に殴られたのだとつてやりたかったが、着替えさせたことすら忘れている様子の相手に何を言ったところで無駄だ。

何といつても、朝の挨拶で爽やかにルティエラは微笑んだ。

「おはよー」といいます。いい朝ですね！」

「……」

その笑顔を見ただけでベイゼルは悟ることができた。

「いい、なんつにも覚えてねえ！」

隊員の一人にからんだことも、キリシュヌータにくつてかかったことも、当然ティナン隊長に「大嫌い」とやらかしたことも！

ぐつたりとしながら朝食のプレートを手に歩くベイゼルの後をひょこひょことついて行くルティエラだが、その間も他の騎士達が面白そうにこちらを見てくることに眉をひそめた。

「副長」

「あんだよ」

「昨日何かしたんですか？ なんだか皆にやせやせと見てますよ？」

「おめーだよ！」

さすがにベイゼルはぐるりと身を翻し、びしりと指を突き付けた。

「おまえが酒かつくりて隊員の一人を脱がそつとしたり、殿下を優男呼ばわりしたり、拳句の果てに隊長を大嫌いって言つたんだよがて大きく息をついて首を振つた。

「ぼくがそんなことするわけないですよ」

「！」

「それにぼくお酒飲んだらすぐ」に漬れちゃうんです。どうしてそんな意地悪言つんですか？」

そもそもぼくがどうして服を脱がそなうなんて？ 隊長を嫌い？ そ

んなことあるわけない」

どこまでも爽やかな笑顔で言われ、ベイゼルは脱力した。  
駄目だ　　」いつ本気で酒癖悪いことを理解していない。

しかし、ベイゼルが忌々しいとばかりに列举した事柄が、どうやら事実であるらしいことをルディエラはすぐに知った。

「オレに近寄るな！」

隊内一ガタイのいい男、ルディエラに衣類を剥ぎ取られそうになつたダレサンドロが、ルディエラが近づくと物凄い勢いで逃げるようになつた為だ。

ルディ・アイギル　男好き説絶賛浮上中。

「あ、それよりも」

「あんだけよ！」

「昨日の酒場の代金つてどうなつたんです？」

朝起きたら自分のブーツの金貨は無事だつた。そこだけが気がかりだつた。潰れてしまつるのは現実逃避だつたが、逃避できない現実だつてある。

「さあな。どうせ殿下あたりが払つたろ」「

ベイゼルは気にするなと軽く手を払つた。

あの状態で　可愛い妹に「大嫌い」攻撃をくらつてしまつたティナンに他に余裕があるとも思われない。

タダ酒を飲みに来てすべての代金を支払わされたキリシュエータは容易く想像がついた。

相手は殿下であるし、気にするなと言われたことに気をよくして、

ルティニアはもうそのことは忘れたことにした。  
ほり、やつぱり潰れてしまつて良かつた。

体調はいいし、代金は払わなくて良かつたし！

そう思つていられるのは自分に芳しくない尊があることを知る  
三日間の間だけであつたが。

\*\*\*

「おにーちゃん」  
ちつさな妹は舌足らずに両手を伸ばして抱っこをせがんだものだ  
つた。

たいていは長男が当然のように抱いて移動していたものだが、下に  
おろされる短時間にはたばとやつてきてはティナンの足に張り付  
いた。

「にーさま。大好き！」

あけすけな愛情表現で愛らしく言つていた妹。

「だいつ嫌いいい」

この耳の奥でこだましているのはきっと幻聴。幻聴だ！

「食べちゃいたいくらい可愛い妹の口からそんな暴言がでる筈はない！ そうですよね、殿下！」

「私に聞くな、頼むから」

ティナンまだまだ廢人中。

「う、馬屋番が懐かしい……」

ルディエラは心底疲れきった口調でぐつたりと馬の背中にもたれかかつた。馬特有の体臭とほかほかとした体温が実際に心地よい。馬屋番もきつかったが、体中が癪だらけになつたり痛みに歯を食いしばるようなことは無かつた。

今といえば、毎日の訓練についていくのに四苦八苦して喘ぐ毎日だし、どんな訓練も追加訓練を言い付かつてしまつ。夕食はなんとか誰かががとつておいてくれるのだが、それを食べるよりもむしろ眠りたいといつぶらじ空腹だか何だか判らない現状が続く、四日目。

そう、まだ騎士団に入り込んで一週間も経過していないといつこの自分の体ときたら笑う程ぼろぼろだつた。

何より！

「おまえ、男好きだつて公言しないほうがいいぞ？」  
「誰がそんなことを公言しているか！」

まったく意味の判らない忠告に、頭の中がパンクしそうになつたものだが、こんな誹謗中傷などに負けてなどいられない。

騎士団というのはもっと高潔なものではなかつたのか？

男臭いし粗野だし！

いいことがあるとすれば、それは筋肉だ。さすがに皆鍛えているだけあつてうらやましい程の筋肉をそなえている。ぜひとも腹の腹直筋が蟹の腹のように割れているのを見たいものだが、何故か男好きだと思われている為に、誰しもがルディエラに見られることを嫌がるのだ。

「あんた？」

近くでがしがし馬の腹にブラシをかけていたベイゼルがルディエラの視線に冷たく返す。

「副長は見た感じ筋肉質じゃないですよねー」

「おまえその筋肉重視の視点はどうにかならねえのか？ 気持ち悪い。夢に見そうだ」

正確に言えば、ベイゼルはすでに悪夢に悩まされている。

「筋肉が正義 つ」

という仮想敵一個師団が襲ってくるのだ。これが実戦だとしたら、ベイゼルは頭を地面にこすりつけて敗北を表現するだらう。筋肉教に勝てる気はしない。

「副長は筋肉のよさがわかつてない」

「わかりたくねえよ」

何故誰も理解してくれないのだろうか。そもそもセイムだつて筋肉の話は嫌がつていた。それはセイムがあまり筋肉質でないせいだと思つていたのだ。男ばかりの世界ではきっと皆筋肉の話に熱くなり、筋肉の話で盛り上がると思つていたというのに、ここにきてはじめて筋肉は万国共通の素晴らしいものではないのか、と自分の信念が揺らぎ始めてしまつた。

「騎士団に所属すれば、もっと筋肉天国だと思つていたぼくの夢をいつたいどうしてくれんんですか」

「おまつ、頭おかしいんじゃないのか？ いい加減に筋肉に固執するなつ」

「脈動する背筋、上腕二頭筋」

「つひとつと夢見るようになに咳きながら、馬の筋肉を愛おしそうに撫

でるルディエラの姿はまさに つやつぽくもオソロシイ。

「あああ、顧問の筋肉が懐かしい」

「おまえは筋肉だけで人間が見分けられそうだな」

「あ、それ面白そうですねー。騎士団の皆さんのお顔はいまいち覚えてないでけれど、体は覚えられるかも」

「その卑猥な感じの言い方やめろーっ」

ルディエラは楽しげに会話を止めるよつた怒鳴り声に唇を尖らせた。

そしてふつと馬房の外を眺めたルディエラは、一瞬のうちに通り過ぎた素晴らしい大胸筋に「ぶふーっ」と口から奇妙な音を出しそうになってしまった。

慌てて馬の後ろ側に回り込み、だらだらと流れ出る汗をなんとかやり過ぐす。

「何してんだよ?」

「スゴイです、ぼくってば本当に筋肉だけでヒトがわかるー。」

「はあ?」

「……なんでもありません」

今の特徴的大胸筋。上腕二頭筋、上腕三頭筋、そして素晴らしい腹直筋!

あああ、服の上からでもなんて素敵なのバゼル兄さまっ。

ルディエラは必死に身を縮めてなんとか相手がそのまま姿を消すのをまつた。この姿をバゼルに見せる訳にはいかなかつた。

切られてしまつた短い髪。騎士団の見習いの隊服。

バゼルは兄弟の中で一番ルディエラにオンナラシサを求める兄だつた。一番筋肉質で男らしい次兄だが、一番「愛らしい」ものを愛し

ているのだ。ルディエラが筋肉愛なら、バゼルは愛らしいもの愛！  
そんなバゼルはルディエラが自分の前で少年っぽい格好をするの  
すら嫌っていた。

西端に在勤している為滅多に顔を出すことはないが、顔を出すときは決まって物凄い量の愛らしいドレスやら小物やらを携え、バゼルが家に滞在する間ときたら、ルディエラはいつせいの男臭さを手放さなければいけないのだ。

大好きだが、一番苦手な兄。

あの筋肉はとても素晴らしいのに、何故バゼル兄さまはあんなに残念なヒトなのだろう。などと一番残念な思考回路を持つ自分をすっかりと棚にあげている。

少なくとも、筋肉愛、筋肉正義のルディエラにだけは「残念なヒト」などといわれたくないだろう。

「せつかく可愛く産まれたんだから、おまえはレースにまみれて生きるー。」  
と熱心に言つバゼル。

ルディエラの髪をまさに神業で編みこむのが上手なのもバゼルだった。あの無骨そうな指がどうしたらあんなにも美しい編みこみを作り出せるのかが謎だが。

「アイギル？」

「……よし、行つた！」

どきどきしながら確認をとり、ルディエラは自分の平べつたい胸をなでおろした。バゼルに発見されたらこの髪の言い訳だとかこの隊服のいいわけだとでたいへんだ。

隊服をはぎとられたあげくひらつひらのドレスを着せられたまらない。そもそも、なんだって西郷の兄がこんな場にいるのだろう。

それは定期報告の為に顔を出しているのだが、そんな恐ろしい定期報告が週に一度存在することすら知らないルディエラだった。

絶対にバゼル兄さまと顔を合わせてはいけない。

ルディエラは心の中でしつかりと確認した。

\*\*\*

「よ、ティナン」

自分よりも頭二つ分は高い位置からかけられた言葉に、ティナンは腹の底がひやりと冷めた。

「バゼル兄さん」

「家に寄つてから来たんだけどな」

バゼルはつんつんと跳ねる髪をわしゃわしゃとかき混ぜ、眉をひそめた。

「おまえ知つてたか？」

何を言われるのか覚悟しながら、ティナンは冷静さを装つて兄を見た。

「何ですか？」

「ルディエーラが旅行に出てるつて？ せっかくあの子に土産を持つてきたのに、がつかりだ」

「り、旅行ですか？」

「ああ、セイムが言つてた。なんだ、おまえ知らなかつたのか？」

セイム！

思わずティナンは心の中で感謝の祈りを捧げてしまった。バゼルにはさすがに「騎士になる為に騎士団宿舎にいいます」と言えなかつたのだろう。なんて世渡り上手。

「それにしても、旅行つて 何故セイムを連れていかないんだ。  
世の中は危険だといつのに。護衛を他に雇つたとか言つていたが。  
・ルディエーラの警護はもともとセイムだらうに。あの役立たず」

いやいや、十分役に立つてゐる。

給料を減らすべきだといつバゼルのぼやきに、ティナンは減らされた分は増やしてやろうと決めた。

「兄さん、こんなところで愚痴つていないで、早く仕事を終えないと」

「ああ、そうだった。そうだ、家に行つたらクインがいた」  
さらりと言われたことに、ティナンは噴出した。

「なつ、兄さんが？」

長兄、クインザム 父親を含めて唯一所領と騎士以外の爵位を所有する兄は、いつも各所の領地を見回つたりしている為に不在がちだつた。

「驚く」とじやないだろ？ なんだかおまえに話があるから家に来るようについて頼まれた

「……はあ」

「なんかやたらとこやかだつた。おまえ何かした？」

「身に覚えがありますが。

「一緒に行きませんか？」

バゼルの前ではさすがにクインザムもルディエーラの件を言及できまいと引きつり笑顔で提案したが、バゼルは「何したか知らないが、説教は受け流せ」とにやにやと笑い、ティナンの肩をぱしばしと叩いた。

受け流せるだろうか。

いろいろと不安だ。



つうつと神経質そうな指先が机の上を走る。

埃などついてもいな箒だというのに、指先を一度確認し、その視線をひとりと弟へと向け親指の腹でこすりあわせて微笑んでいる男は、ティナンと良く似た面差しをしているがその漂わせる雰囲気はまったく違う。

ただじっと見つめられていることが耐えられず、ティナンは喉の奥に溜まつた唾液を無意識に飲み込んだ。

「三男坊、呼びつけてからしばらくたつた気がするよ」

「ぼくも忙しいんです」

固くなる声で答えると、長兄クインザムは微笑を湛え、頬に掛かる髪をかきあげた。

クインザムはティナンにとつて物心ついた頃からオトナだった。この家族の全てを取り仕切る大人。

静謐な空気を持ち、切れ長の眼差しで淡々と事実を積み上げて「さあ言い訳してごらん」とうながす恐怖の大魔王だ。

本来の父親ですら萎縮させ、土下座させて「悪かった」と言わせる最強の長男、キング・オブ・家長である。

家長である父を完全無視して。

多少の憧れを込めて、実はティナンの髪型は兄に似せてある。

肩甲骨のあたりまで指一本分ばかりを伸ばし、組み紐で一本に結わえてあるのだ。

「一人で来たのかい？」

「……何も指示はありませんでした」

「そう？ 君には判断力がないのか。そこに気付かなかつた私の落ち度だな じゃあ、戻る時には是非とも土産をもつていつておく

れ。ルディに」「

指先で示された包みをちらりと見て、ティナンは内心でぶつぶつと呴いていた。

殺すなら殺せ。

「うじりじりと生殺しにするのは本当に勘弁して欲しい。

クインザムは穏やかともとれる微笑を湛えたまま、自分の弟を優しくやさしく見つめている。慈愛に満ちた微笑だ。

「私のナーナが作った肌着と室内靴だよ。きっとあの子も氣に入るだろうから」

ナーナというのは、クインザムの妻だ。彼の領地に暮らしている為、父親の家であるこの邸宅には暮らしていない。

「ルディは、元気にしているかい?」

「元気ですよ。かわらず」

「やべ、なりいいんだ」

ちらりと言われた言葉に、ティナンはほつと安堵の息をついた。怒られるものと決めてかかっていたものだが、クインザムにはその気が

「何かあつたらたたじやすまないよ」

一旦安堵したからだが、一気に緊張でふわりと鳥肌をたてた。

「でも丁度いい。あの子もそろそろ年頃だ 男達を良く見て、旦を養うのは悪いことではない」

「はい?」

「あの子ときたら何故か趣味が悪い。だがそろそろ嫁に行くことも考えなければ。

嫁になど行かなくともいいが、おかしな男に引っかかるのも困る。いい相手を是非とも見つけてくれるといのだけれど」

「つて、兄さんつ?」

「なんだい？」

「騎士団にいることを怒っているのではないんですか？」

自分から触れたくはなかつたが、思わず口にしていた。

絶対に怒つっていて、それを自分にぶつける為に呼び出したに違いないと思つていたが、兄の口から出た言葉はまったく違う。

「怒つてやいないよ。私はあの子が騎士団に入りたいといつとは承知している。まさか本当に入り込むとは思つてはいなかつたが、まあ、たすがあの子だ。何事もがんばつて欲しいものだね」

せりりと言われた言葉に、今度こそ安堵した。

やんわりとティナンの口元に笑みが浮かんだといひで、クインザムは口角を上げた。

「悪いのは馬鹿殿下とおまえだから。私はあの子に怒つたりしない  
怒つてるじやないか……

「騎士団ならばあの子の目に適つものもいるだらう。まかりまちがつておかしな男に惚れたとしても、周りにいるのは身元のはつきりとした者達だ。消すなり飛ばすなり考えようはある」

さらりとまずそうなことを言つてている気がするが、ティナンはソ

「は流した。

「ルディエーラはまだ十六ですよ。結婚なんて早い」

「私のナーナは十六で嫁いで来たよ。早いことはない。ルディもあの髪を結い上げて大人しくしていれば誰よりも愛らしい淑女になれる。欲しがるものが多いだらうね。良い相手が見つかるといいが

あの髪を結い上げて……

その結い上げる髪は、おそれべ二年は待たねば伸びません。

ティナンは口の端を引きつらせ、視線をつづつとずらした。

兄にもルティエラの髪を分けてやろうと思つていたティナンだが、とりあえずしばらくは止めておこうと胸元を押された。

しかしいつまでも自分ひとりで持つていたら後々が恐ろしい。いや、だが……

「兄さんは、ルティエラがあんな場にいて危険だと思わないんですか？」

「私はずっとあの子が努力していたことを知つてゐるからね。やりたいと願つことであれば何でもさせてあげたいと思つてゐるよ？ただし、それはあの子の何かを損なうことであつてはいけない。できればセイムをつけたいところだけれど」

損なう……

につこりと柔らか穏やかに積み上げられている台詞に、ティナンは兄が何を知つているのか気に掛かつて仕方なかつたが、表面上はそれをひたかくした。

「セイムを騎士団にいれようなんて、無茶です

「判つてるよ。言つてみただけだから」

クインザムは微笑し、細めていた瞳を真撃に三男へと向けた。

「うちの次兄には言わないほうがいいだろうね。あの子ときたら直情的だから もしルティが男ばかりの場所で暮らしてゐるなんて知れたら、暴れそうだね。あの子はルティに夢を見すぎていて、かよわい乙女だとでも思つてゐるから……もしルティに何かあつたら相手をあの大剣で八つ裂きにしてしまいそうだね。まあちょっと楽しそうだけど」

「……」

「あの子ときたらうちに来てルティがいなつていうんでとても悲しんでいたよ。まったく面白い。まるきり纖細なお人形のようと思

つているのかな。あの無骨な手でルティの髪を結い上げたくて仕方ないんだろう」「う

ティナンは降参した。

「すみませんでした」

「何がだい？」

「……ルティーラの髪を切つたこと、ご存知ですね」

反省しているのですぐすぐ生殺していたぶるのはもつ止めてトセ。血口申告したティナンだったが、クインザムは微笑んだ。

「女の子の髪を、切つたんだ？」

「え？ と続ける兄に、ティナンはさあと血の気が下がるのを感じた。

完全な墓六<sup>ぼけつ</sup>……いや、もつ率先して自分で墓六<sup>はかな</sup>を掘るので、今すぐ入させてください。

「うわ、生ゴリ…。」

馬房の裏手で壁にもたれてふくらぎをもんでいたルディエラはその気配に気付いていた。

昼の休憩時間。

今までには休憩らしい休憩もとれずにいたが、少しづつ体が慣れてきているのだろう。いつもよりも多く昼食の為の果物も食べたし、まだ余裕がある。

馴染み深い軽やかな足取りで顔を出した幼馴染。

「セイム。どうしたの？」

「姉さんから頼まれて、着替えと菓子を届けに」

そういうながら、セイムは持ってきた包みから焼き菓子を取り出すとルディエラの口に放り込んだ。

「ルディ様すいぶんとさつぱりしましたね」

とは髪のことだろう。

苦笑しながらうなずくと、セイムは荷物を地面におろし、自分も身を沈めるとルディエラのブーツを紐といって慣れた様子でその靴を剥ぎ取った。

ルディエラは抵抗せずに相手のするに任せた。

靴も靴下も抜かれると、冷たい外気が足に触れた。

「……くさい」

「失礼なつ」

「ああ、もあつ。ミントの葉とかちゃんと使って下さこよ。

そういう細かいトコ本当にやらないですよねつ」

「ぶつぶつと言つセイムは、すつと立ち上ると荷物からタオルと彼自身が腰につるしているケースから薬草を取り出し、馬用の水にタオルを沈めて絞ると薬草をタオルにこすり付けて丁寧にルディエ

「の足を清めた。

ひやりとした冷たさが足を刺激し、すーっと心地よく染み入るこ  
とにルディエラは口元を緩めた。

つこでセイムは女性の足とは思われない固い皮膚の足に、ポケット  
から取り出した軟膏を塗つて丁寧に揉みほぐしていく。

ルディエラは慣れたマッサージの気持ひよさに目を閉じて全体重  
を壁に預けた。

「一週間田だけど、もう随分とずたぼろですね。楽しいですか？」

「うん……まだまわりまで目が、いかないけど……楽しい」

日々精一杯乗り切つていいるだけだ。

最近では騎士団の面々と会話も成立してきた。ただ意地悪な人間も  
確かにいたりして、いやみも耳に入るようになつたのが少し残念だ  
けれど。

わすが縁故だよな。それともお偉いさんの足でも舐めて入れて  
もらつた口なんじやねえの？

舐めたのは足じやなかつたりして。

げらげらと吐き出された言葉には悪意のトゲで満ちていた。

最近やつとまわつまで田が向いてきたから気付いただけで、もとか  
らもつと酷いことは言わっていたのかもしれない。そういうとせた  
らと切ない。

セイムの手でもみほぐされていく足が血のめぐりを良くしてほか  
ほかと暖かい。休み時間はそれほど歩くないから眠つては駄目だと  
思うのに、あふりと欠伸が漏れた。

「セイム……」

「なんですか」

「しようか

「やですよこんなとこひで」

あつさりと拒絶され、ルディエラはもう一つ欠伸をかみ殺した。

「でも眠いんだ。体を、動かさないと」

「こんなにぼろぼろなのに」

「田え覚めるでしょ」

田元をぐしごしとねぐつと、セイムは身を起こしてニヤリと口元に笑みを刻んだ。

「前回と同じで？」

「やだ、二十」

「まだ根に持つてゐるし」

「とーゼ」

んと続けようとした言葉が、ガンッと乱暴に壁を蹴られた振動でたちきえた。

馬房の壁、その向ひ

「おまえら何の話ししてんだつつ。つて、アイギルつ、そいつは誰だつ」

突然ふつてきた言葉に、ルディエラとセイムは視線を向け、不思議そうに瞳をまたいた。

馬房の窓から顔を出したベイゼル副長は顔を真つ赤にしている。

「賭け試合」

「うちの家人です。あの、何かおかしなこと言いました？ つああ！」

賭けとかつて駄目ですか？」

でも飲み会のときに賭けポーカーをしていた人間もいたのに。

ルディエラの不思議そうな眼差しに、ベイゼルは頭を抱えた。

「おまえなんか嫌いだーっ」

……なんで嫌われるんだね？  
副長に好かれようと努力しているのに、なかなかルーティーハラの思うようにいかない。

叫び声をあげてそのまま走つていってしまった副長を見送り、ルーティーハラは蹴られた反動で軽く痛む背中をさすつた。

「かわった人ですね」

「いい人だけどね……ちょっと怒りっぽいんだ。ぼくがすることなすことすぐに入る」

首をかしげているルーティーハラをしげしげと見つめ、セイムはやがてしみじみと言つた。

「ま、気持ちは良く判ります」

「どういう意味だ？」

「ルーティ様の相手はホント疲れるんですよ」

笑をこらえるように喉を鳴らし、揉み解していく足をペしんっと最後に叩いた。

「田は覚めたようですね。訓練、がんばって」

言しながらセイムは軟膏ちようかでべたつく手をタオルで拭い、ルーティエラの軽く異臭騒さわぎの長靴ロングブーツの中にミントの葉をもんと放り込んだ。

男のなかにあつて女らしさは更に退化したらしく。

セイムは「つそりと溜息を吐き出した。

### その3（後書き）

【詰め合せギフトパック】にクイン兄ちやんと嫁のお話をこっやしました。 タイトルは「にーちゃんと嫁」現在2話まで。

じりじりとした緊迫感がその場の空氣をつめたいものへと浸していく。

こくりと動かす喉の音すら、捨い落とすことのない緊張。ぴくりと指先がためらいがちに動き、息を飲んだ痛みが……

「うせえ！ おまえすぐえうせえ！」

げしりと無遠慮に長靴ながくわがルディエラの足を横から蹴り、

「おまえ絶対にスリーカード以上、俺はおりる！」

ベイゼルはばさりと持っていたカードを石畳の上に放り出した。寒風吹きすさび、松明の炎が赤々と辺りを照らし出す宵闇。砦の外を巡る森からは時折フクロウの声が不気味に響いていた。

「えええっ、ずるいですよ！」

ベイゼルはルディエラの手札を高くかつたようだが、だがしかし実際はツーペア。Aのツーペアの為に交換で良いカードを引くことができれば確かに勝てるかもしれないと思つたが、それ程顔に出ていただろうか。

ルディエラはツーペア如きで死ぬほど緊迫した空氣をかもし出していた訳だ。

「おまえはポーカーの何たるかを勉強しなおして来い、馬鹿がつ！」

「鼻息あらいんだよ！」

「初心者には優しくしましょうよ！」

ベイゼルは乱暴にルディエラの頭をはたき、無駄に緊張したからだをほぐすように腕を回し、ついで首筋をもんだ。

「あー、さみいっ。酒のみでえ！」

彼等が居るのは南方砦、外部訓練の一環で訪れた先の鐘楼を有する物見台の上、ベイゼルがポーカーで負けた為に彼の下についている総勢七名が本日の見回りに借り出される羽目に陥っていた。キリシュエータ、ティナン以下残り十名は歓迎といつ名の宴会まつただ中だ。

そもそも騎士団とはもつと高潔なもので、黙々と訓練に明け暮れるものではないのだろうか。ルティエラは自らの想像とまったく違う現実に溜息しか出ない。

「飲んでばつかじやないですか」

「それ以外に何しろつて？」

「……酷すぎる」

確かに日々の訓練は厳しいものだ。

ルティエラは必死についていこうと躍起になつていて、基本体力の違いをひしひしと感じている。重い荷物に鎖帷子をつけ、鎧を着込めばまっすぐに立つだけで苦痛を覚える。籠手などの重装備をまとつて走る訓練などした日には、空腹なのか吐き気なのか理解できない段階にまでもつていかれてしまう。それでも、日々の訓練は騎士団にいるのだとひしひしと感じることができ、喜ばしいことだった。

筋肉もつくし。

だが、どうも思つていた程面目な場ではない。

筋肉の話題を出すと怒るし。

「アイギル、酒貰つて来い。酒

「ぼく達は仕事中です」

「おまえなあ、こんな僻地で見巡りしたつてだーれもこねえよ！裏手の山の向こうは切り立つた崖だし、しかも一番近い他国つたらイリーシェス妃殿下の母国じやねえか。襲撃とか無い無い」

ひらひらと手を振るが、実際彼等の国が他国と領土を争つたのは、すでに十年近く前の話だ。今は表面上協定が結ばれ、商人の行き来もある平和な時代だ。騎士団の存在意義はもっぱら王宮警備であり、今回のように四方砦におもむくのはただの視察だといわれている。

「酒！」

がうつと嘙み付くように言われ、ルディエラは嘆息して立ち上がりうとしたが、それを押し留めたのは一緒にカード遊びに興じていたユージンだつた。

「俺行きますよ」

穏やかな先輩の言葉に、ルディエラは慌てた。

「ぼく行きますから」

物静かなユージンに行かせる為にぐずつた訳ではない。ただ、見まわりをしていると言うのに酒など飲みたいと騒ぐベイゼルを非難していただけだ。見まわり中に自分も含めてポーカーをしていたのはひとりあえず棚にあげる。

「いやにやとしたベイゼルが更に笑みを深めた。

「鐘楼の幽霊には気をつけろよな」

「幽霊なんていませんよ、馬鹿らしい」

「いるって。ここには昔つからいるんだよ」

「ハイハイ。幽霊を見つけたらとつ捕まえて見世物小屋に売り渡してやりますよ」

ふんつとルディエラは顔をそむけたが、その話はこの砦に来る前から何度も他の隊員から聞かされた。

物見台の警備中に同僚に言い寄られた拳銃階段で転がり落ちて首を折つて死んだ無念の靈が寂しさに仲間を呼ぶのだと……

まつたく馬鹿らしいが、口々に耳にいれられた為にほんの少しだけ「本当かも」という思ひがよぎる。

もし幽靈など出たのであれば、金貨一枚一枚にはなるかもしない。

ルディエラは嘆息しつつ、ランタンを一つ手に石階段をひとつとおりた。

上に続く階段は鐘楼へと続き、下までの三階層分はただ螺旋階段が続く。冷たい空気が下から吹き上げるような感覚に身震いし、ふいに下からぼつりと現れた光にルディエラはびしりと体を硬直させ、ゆらゆらとそれが近づいてくる感覚にぶわりと鳥肌をたてた。

### 鐘楼の幽靈！

いや、そんな馬鹿なつ。幽靈なんて居ない。

子供の頃に次兄がよくからかって言つたものだけれど、キヤーキヤーと脅えるルディエラに長兄が優しく「そんなものはいないよ」と根気良くなつてくれたものだ。

その足先でぐりぐりと次兄の手の平をふんずけながら。

ああ、なんでもいい、とつ捕まえて売る！

クインザムが居ないと言つているのだから幽靈なんていやしない。だがしかし、もし本当にいるのであればそれはすなわち、レアアイテム。

商魂逞しいルディエラは瞬時にそう判断した。

持つていたランタンを投げつけ、腰に下げた短剣で攻撃をしようとした途端「うわあっ」と声が上がった。

「うわああ

その声に驚いてルディエラも悲鳴をあげたが、実は驚いたのは突然ランタンを投げつけられたキリシュエータだつた。

「おまえは、本気で殴るぞ」

投げつけられたランタンを危ういところでひょいと避けた第二王子殿下は引きつた笑みを浮かべた。

「トウモロコシの髪つ

叫んでから慌てて口にフタを閉めた。

「な、何をしてるんですか。殿下」

「少なくともランタンを投げつけられる為に来た訳じゃないな」  
引きつた殿下は破壊されたランタンを呑々としてく様子で見つめた。

「おまえは、花摘みか？」

ふんっと鼻を鳴らしていつ相手の言葉に、ルディエラは瞳をまたいた。

「なんでこんな時間に花を摘みに？」

脈絡の無い単語にしか思えず、キリシュエータは一瞬奇妙な顔をし、ついで視線をそらした。

ルディエラは貴族階級に属する娘ではない。

父親はもともと傭兵であるし、家族は男ばかりだ。社交といつ場にもなじまない為に淑女が頬を染めて「花を摘みに」と廁へと行くことなど馴染みの無いことだらう。

キリシュエータ自身、どんな言葉で飾ろうとも廁は廁だらうとか思っていない。浴室や部屋の片隅に置かれているツボに用があるならあっけらかんとそういういえどすら思つたが、女性達は頬を染めて視線を逸らし「あの、お花を摘みに……」などと言つのだ。阿呆らしい。

「 そ、うか、いや、うん。私が悪かった」

キリシュエータは素直に謝意を口にした。

相手は野生のサル もとい、土に埋まるにんじんだ。廁に行きた

くば率直に言つだらう。実際に男らしへ。

「で、どこに行くんだ？」

ランタンはすでに破壊されつぶしている。灯りといえば自分が持つランタンだけだ。だから共に行くしかあるまいと尋ねれば、ルティニアはまきんと手を打つた。

「ああ、忘れてた」

じつやうの脳みそは鳥並みだ。三歩歩けば忘れるらしい。冷ややかに笑つと、ルティニアは無邪氣な口調で言つた。

「お酒をもうこご

「おまえは飲むなー」

「お酒をもう一こ」

「おまえは飲むなー」

「……ぼくじやありませんよ」

「むつとしながら言い返すと、相手はあからさまに安堵の息をついた。そしてそのまま一皿ゆるつと首をふる。

「私の前で性別を偽ることは無い」

「そういわれたところでいきなり、あたしと一人称をかえるのは気がひけた。ルディエラは肩をすくめ、

「うつかり女らしくしたら面倒ですから気にならないで下を」と返した。

「女らしい?」

「……なにか?」

「悪いが、おまえのどじをどじの見たら女らしこのか、私には一向に判らん」

何せティナンに女だといわれてもなお信じなかつた程だ。自分の副官が嘘を言つともおもえずに「女」であることを認めはしたが、どつ見ても女である要素が無い。

思わずひらべつたい胸をしげしげと見てしまつたが、ルディエラは頓着しよつともしなかつた。

「……どこが女だ。」

女であれば自分の体をじろじろと見られればそれなりの反応を示すだろう。だが、この面前の小娘ときたら平然としている。

「何言つてゐんですか! ぼくは女を捨てたことは一度もない

「……」

捨てる部分がなくてこれが。

キリシュエータは乾いた笑みを落とした。

女らしい部分があったとすれば、それはあの艶やかな髪だったろう。癖のない髪を後ろ手に一本の三つ編みで結い上げた様子を思い出す。あの髪を解いてたらし、女らしげドレスを着せればまさか男と間違うこともなかつただろう。

どれだけ胸が無くてせ。

「殿下、本氣で失礼ですよ」

「悪かつた」

ふと、一度着飾らせてみるのも楽しいかもしないと瞳を細めたキリシュエータだったが、ふるりと軽く首を振つた。

その動作が悪かつたのだろうか、突然 キリシュエータの手にあつたランタンの炎がふつと消えた。

小さなランタンの小さな灯り。

しかし場に他に灯りは無く、一瞬のうちに闇に閉ざされたそこでルディエラはひゅっと喉の奥を鳴らし、

「あやああつ」

と悲鳴をあげ、キリシュエータは慌ててルディエラの手首を引っつかみ、その口にがじりと自分の手を押し当てる。

ルディエラの悲鳴が細長い螺旋階段の内を響き渡り、くわんくわんと木靈した。

「馬鹿か」

キリシュエータは舌打ちを一つ落とし、耳の奥の鼓膜が震える感

覚に眉を潜める。いくら突然闇に閉ざされたといったところで、もともとたよらないランタンの灯り一つ。しばらく待てば闇内といえども田が慣れる筈だ。やはり騎士となるには心が頼りないのかもしれない。

やれやれと軽く首を振ると、口を押さえ込まれたルディエラは「うーうううう」と声をあげ、キリシュエータの手から逃れようと顔を振る。

「落ち着けつ。すぐに田が闇に慣れる　見えるよ」

じたばたと暴れ、何故か腰の短剣を手にルディエラがもがきながら指を差したのは、キリシュエータの背後。しかしあまりにも相手の動きが激しいためにキリシュエータは思わず力任せにルディエラの腹に拳を叩き込み、落とした。

今にも剣を振り回しそうな勢いが危なすぎる。

ぐぐもつたうめき声をあげてルディエラが前のめりに倒れこむ。力を失ったからだは柔らかく、ふとそんなことに女らしさを一つ見つけた。

それを念図にしたように、ぴしゃりと冷たいものがキリシュエータの首筋に触れた。

つうつと生暖かなぬりと粘着質な液体が首筋を伝わっていく感触、そして、生暖かい息遣い。

その感覚に瞬時にキリシュエータは理解したが、ルディエラはすでに意識もなくキリシュエータの腕の中だった。

「……すまん、肝試し中だったのか」

「つて、殿下ですか？　アイギルは？」

背後でわざとらしく鼻息を荒くしていいる幽霊役の男ナシルは、慌てた様子でいうが、キリシュエータは嘆息しつつ命じた。

「灯りを」

その声を合図に階段下、そして上から人の気配がやつてきて途端にその場は明るさを取り戻した。松明とランタンとで照らし出されたそこには、ルディエラがくたりと氣を失っている。

「なつさけねえなあ」

「まつたく黙目なヤツだ」

「肝つ玉がちいさいな」

「さやかになつたその場で、見習いの情けなさを笑い出すほかの男達を前に、キリシュエータはルディエラを抱えなおした。

「悪いが、コレが氣を失つてているのは私が落としたからだ。幽霊の恐怖に氣を失つた訳じゃない」

彼女の名譽の為にそう言つキリシュエータの言葉に、階段をおりてきたベイゼルは肩をすくめ、そして階段をのぼつてきたティナンは主の腕にいる妹を引き取ると、くつたりとしている妹をたたき起こした。

途端、ルディエラはがばりと身を起こし、らんらんと輝く瞳で叫んだ。

「金づるー」

危うく幽霊役の男に短剣をかざして踊りかかりそつになり、ティナンはがしりとルディエラの腕を背後から押さえ込んだ。そうしなければそのまま本気で相手を切り付けそうな勢いだった。

「つて、幽靈は死ですか？ええ？ナシルさん？つて、ぼくの幽靈は？」

とつ捕まえて見世物小屋に売りつけないと！

本気で訴えるルティエラの様子に、ベイゼルは頭を抱え、

「おまえどんだけ男前なんだよ」

と感心、きょろきょろとしている妹の姿にティナンは「可愛い…」と声もなく唇を動かし、キリシュエータは脱力した。

ルディエラが十四になろうとうとう頃に、長兄であるクインザムが静かに告げた。

実家に残っている彼の私室の窓枠に手をかけて、じつと庭先で行われている素振りを眺めていた兄が、まさに唐突に。

クインザムが声をかけてきたことに、ルディエラの近くで同じようく素振りをしていたセイムがすっと模造剣を収めて静かに頭をたれて控える。

ルディエラは気にもかけずにそのまま素振りを続けていたのだが、兄から続けられた言葉は思いもかけないものだつた。

「ルディ、そもそもおまえも自分の身の振り方を考える頃合だ」

その静かな物言いにルディエラは素振りの手を止めた。

騎士になる。

そんなことは夢のまた夢で到底かなえられるものではないことを承知している。ならば自分のような娘を示して「身の振り方」などといえばそれは結婚を意味していた。

「私は荷物を抱える気はない」

兄の言葉は辛らつだつた。

「結婚について考えるのであれば、いくらでも便宜を図りつ。おまえは貴族階級の娘ではない。だが、おまえの父親も兄達も富仕えであることにかわりはない。相応の地位のもの、商家に嫁ぐことはできるだらう」

「……」

結婚。

女を捨てている気はないが、だからといって結婚に飛びつく気持

ちにはなれなかつた。

しゅんつと沈んだ妹に、クインザムは淡々と告げた。

「もしくは　自分の食い扶持は自分で稼ぐのだな」

「クイン?」

「この家は父の家だ。出て行けという権限は私にはないよ。だが、先ほども言ったように荷物を抱えるつもりはない。この家のものは誰しも働いている。そうだろう?」

クインザムは小さく微笑んだ。

「おまえが働くことで自らの糊口をしのぐのであれば、おまえの好きにしなさい。月に銀一枚。家にいれるのであればおまえはこの家で好きに暮らすことが許される。結婚もしなくていい。衣食住に困ることは無い。ただの荷物ではないと自分の存在意義をきちんと示しなさい」

結局は末の妹に甘いだけの話だつた。

嫁に出すことが最善だと判つても、自らが育て上げた娘をどこに馬の骨とも知らぬものにほいほいとくれてやる気にはなれない。その日がいつか来るとしても、それが先であればいい。こなくとも構わない。

世の中には非道な男もいる。最愛の妹の幸せを考えれば見知らぬ男に託すより、今までと変わらず過ごすのを眺めているほうがずっといい。

クインザムは妹一人養えない男ではない。

父親はまったく当てにしていないが。

ルディーハラはぱつと表情を明るくし、クインザムの申し出に乗り気であることをありありと示したが、兄をからかうよつて口を開いた。

「クイン兄さまみたいに決断力があつて、ティナン兄様みたいに優しくて、バゼル兄様みたいに筋肉質な人がいたら結婚だつて考えて

もいいけどね」「

クインザムはクつと喉の奥を鳴らした。

「到底無理な話だから、せめて私程度に留めて」「

言葉が途中で途切れ、ふとクインザムは視線を剃らした。

「兄さま?」

「……私のような男はやめておきなさい。それより、ルークの名前が出ていないね」

その話題には触れたくないかのように話しを剃らしたクインザムだった。

自他ともに愛妻家なクインザムだが、自分のような男がルディエラを欲しがつたら全力で潰そうと心に誓つた。

そんな兄の内心など気付かないルディエラは肩をすくめながら、クインザムが切り替えてきた四男を思い浮かべてふるふると首をふつた。

「ちい兄様は結婚に向かないよ」

それに、自分も。

兄から提案された銀貨一枚を稼ぐのに、まさか妹がまつとうとは到底言えないことに手を出しまくつてはさすがのクインザムも気付きはしなかつた。

\*\*\*

「賭け試合?」

ベイゼルは目をむいて言った。

「家に銀貨一枚いれないといけないから。手つ取り早く賭け試合とかです」

勿論、いつもセイムから金を巻き上げている訳ではない。

大きなサロンなどで行われている胴元有りの賭博場だ。基本的には中堅商家などの家で行われている闘技場で、勝ち抜き戦などで戦い、

一般人に賭けてもらつて胴元から給金をもらつのだ。

月に四日、五日で銀貨なら手にはいる。まさに手軽な仕事だつたが、夜中にこゝそりと抜け出す為になかなかできないのが難点だ。

クインザムやティナンにだけはばれないようこと氣を使つてゐる。もともと一人ともあまり家にいなからいのだが、侍女のマーティアはこの件に関して決してルティエラの味方ではなかつた。

「……おまえ」

「ああ、ぼくつてば身軽だし、闘技場でも結構ひいきにしてももらつてるんですねー」

へらへらと素直に言つるティエラに、ベイゼルは前髪をかきあげた。一度息をつき、一度目は天井を睨み、

「それ、違法賭博だから」

呻くよひに言つた。

「え？」

「国がそんなもん許す訳ねえだろ、このタコー。頼むからへらへらそんなこと言つうなよ？ 本当にまずいんだからな」

もう一度と言つな、そして手を出すなよ。

指を突きつけて厳しく言つと、ベイゼルは顔を顰めた。

思わず自分達の部屋内だというのに、まわりをきょろきょろと確認してしまひ。

なんという無防備な馬鹿だらうか。自分だつて十分馬鹿だが……何よりも、こいつはティナンの弟 違つた、妹じゃないか！

騎士団長の妹が違法賭博場で賭け試合。

なんて恐ろしい。

ぶるりと身をふるわせたところに、ルティニアは瞳を瞬いてからに言葉をつのらせた。

「えええ！ 違法なんですか？ でもつむの父さんも時々やっているのに！」

「

それはアレか？

この国の騎士団の顧問をやつているあの筋肉ダルマのエリックの旦那のことか。ある意味ティナンよりずつとまづいだろうが。

「そうかー、違法だったのか。だから父をもつてばいつもへんなマスクしてたのか！」

……顔を隠して何をしているんだ、あの人は。

頼むからこの親子オレの目のつかないトコにもつていつてくれ。か弱いオレの心臓がもたねえ。

先ほどまでは他の隊員もいたところに、いつの間に気が付けばその場にいたのはルディエラと、そしてティナンだけだった。

第三隊の隊長であるティナンと、現在役立たずまつじぐらのルディエラの一人きり。

ルディエラは我知らず口元に媚びへつらうような笑みが浮かびそうになつた。

……会話がありません。

いや、会話など無くていいのだ。正しく上官と部下の立場として、無言でいるのも悪くない。などと脳内で思つていられたのもはじめのうちだけで、ルディエラはやがて話題を探そうと口を開いてしまつた。

「あ、あの……隊長」

おそるおそる話しかけると、ティナンは切れ長の冷たい眼差しをお荷物騎士見習いへと向けた。

「何か？」

「うわー、絶対零度だ。

ルディエラはしゅんっと肩を落とし、「何でもありません」と小さく応えた。

馬の世話を終えて、その日の口誌を書くために隊舎に戻り、自分の机はないので部屋の片隅でせつせつと口誌と報告書とか書いていたのだ。

そして当初は確かに他の隊員もいたのだが、気が付けばティナンと一人きり。

報告書を書くのも手間取るルディエラだった。

そしておそらくティナンが食堂にも風呂にも向かわずにその場にいるのは、手の遅いお荷物隊員をまんじりと待っているのだ、上官として仕方なく。

副長つ。酷い。どうしてぼくを一人にするんですかつ。

と、本日は馬のボロに片足を突っ込んでしまって早々に「風呂おお」と叫んでいたベイゼルへと恨み言を向けても仕方あるまい。

がりがりと粗い紙にペンを走らせながら、ルディエラはちらりちらりと兄を伺つた。

兄さま、兄さまつ。

顔を合わせればいつだつて微笑んでその両手を広げてくれた兄だつた。優しい手で頭を撫でて「いい子にしてたかい?」と言つてくれた兄だつた。

今は冷たい目で見ています。

おそらくルディエラの旋毛の辺りをじつと睨んでる。

ここで泣いたら駄目だ。そもそもぼくはいつたいいつからこんなに泣き上戸みたいに弱くなつたんだ。こんなことじや立派な騎士になんかなれないぞ!

いや、なれるとまでは思つてない。それでも少なくとも本物の騎士達と三ヶ月も共にいることができるのだ。

騎士に混じり、騎士の訓練を受けることができる!

体力だつてつくし、筋肉だつてつく。なにせ周りは筋肉質だ。汗臭さもなんのその、ビバ筋肉天国。それでいいじゃないか。

よし。行け! 突き進め。偉いぞルディエラ。がんばれルディエーラ。強いぞルディエーラ。

ルティエラはとつあえず脳内で謡の歌をつくりあげ自分自身を盛り上げてみた。

完全な現実逃避だったが、生憎と壳壁とはいえたなかつた。

「すいじぞーほくらのおルティエラ。」

兄さまの底意地悪をなんてへいちらだーい」

心の中で謳つていたものが、最後には口をついて出ていたのだ。

「ほお」

低く唸り声に、ぎくつと身がすくんだ。

慌てて顔をあげると、ティナン隊長は冷ややかに更に磨きをかけてルティエラを見ていた。

「アイギル、君の兄は底意地が悪いのかい」

「……」

「どんな兄だか聞かせてもらひやるかな」

つかつかと長靴はなわらかを打ち鳴らして近づいたティナンは、完全に退路を失つたルティエラの顎をぐいっと引つかみ、固定した。

「言つてじらん」

びよおおおおと冷たい風音を耳にいた氣がした。

\* \* \*

「隊員虐めは止めとこつてるだらひ」

呆れた口調で言いながらキリシムーターは部屋の扉に手をかけて嘆息した。

「虐められたのはほくのせいですよ」

「泣きながら走つていつたぞ？」

「泣いて走りたいのはぼくのほうです」

恨めしい視線を向けてくる腹心の部下を前に、キリシュエータはぐるりと目を回して天井を睨んだ。

「あー……おまえが泣いても可愛くないしつざい」

「ルディは何しても可愛いですからね！」

「意味不明なぐずりは止める。子供がおまえは最近壊れているティナンにうんざりとしつつ、キリシュエータはばさりと持っていた書類をテーブルの上に放り出した。

「何です？」

「次兄の外遊の為の警備網と人員についての書類と、次の議会の考察書だ」

ティナンはその言葉に、それまでのなきない表情を打ち消して真面目な表情になつて「失礼します」と書類を手にした。

「外遊といったところでリルシェイナ様ですから、第一隊全部を向けなくともいいと思いますが」

「そうだな。むしろアレを暗殺する意味も判らん それでも一応うちの次兄だからな。見劣りしない程度に揃えてやつてくれ」

「判りました。第一隊の隊長とそこは話をすすめます」

ぱらぱらと書類をめくる青年はすでに妹馬鹿ではなくなつている。真面目な副官の姿に満足気にうなづき、キリシュエータはどさりと自分の椅子に座り、眼鏡の蔓を中指の腹でおしあげた。

「それともう一つ」

「なんでしょうか」

「にんじんのことだ さすがに第一隊の外遊にあれを混ぜる訳にはいかない。一月と言つたが、もう一月おまえが面倒をみろ」

それはもう一月嫌われ続けると同義だった。

ティナンは恨みがましい眼差しを主に向けたが、ふいに口を開いた。

「その代わり議会員である殿下にお願いがござります」

「女性騎士の登用法案か？」

くすりと笑つたキリシューハータに、ティナンはまるで小馬鹿にするように瞳をすがめた。

「誰が好き好んでそんな法案の提出を願いますか」

「なんだ、違うのか？」

「この国では五百年前まで兄妹間の婚

」

「却下」

キリシューハータはくるつと椅子を回して背を向けた。

「ちよつとした冗談ですよ」

「……」

「冗談ですよ？」

もつ少しで一月　あと数日で第三隊から第一隊につつむと連づて、ルディーハラは口元が自然緩んでしまいそうになるのを必死で堪えた。

「キメハ！」

しかし第三隊副長であるベイゼルにはルディーハラのにやつきは、さればれだつたようだ。

すぱんつと小気味良い音が頭をはたく。音はいいが、しかしそれほど痛くないソレは室内履きだつた。

「なにすんですか！」

「男の体みながらニヤニヤすんな！」

「してないですよ！」

風呂上りのベイゼルは上半身裸でがしがしと乱暴に自分の頭をタオルでかき混ぜている。

「それに、副長の体は残念な部類ですから嬉しくない」

「ざあーけんな。つつうかどこ見てんだよ、この変態がつ

「騎士だといふのにズボンの上に脂肪がのつててどうこいつ」とですか。ぼーとくですよ、ぼーとく！　あーつ、許されないつ  
びしりと指をつきつけるルディーハラは大真面目だった。

「これぐらい普通じや、ボケつ」

ベイゼルは苦々しい様子で吐き捨てる、言われた自分の腹を軽く摘んだ。

そう、確かに軽く摘めるが、その程度だ。残念な部類などといわれる意味が判らない。

言つておぐが一般的な　とは言わぬが、その手のお嬢さん方に  
は好評だ。

ちきしょう！

「つうかズボンがちょっときついだけだるつが」

「ふんつ、そりやつて自分を甘やかすから、残念な体になるんです  
うー」

「おの、糞ガキ！」

ベイゼルは舌打ちし、そのままじわっと自分の寝台に腰を落とした。  
誰がお前の風呂時間を守つてやつてこると想つてゐるこの糞餓鬼  
がつ。

怒鳴りそうになつたが、ベイゼルはふと思つ出した。

「お前もそろそろ移動だな」  
「そーなんですよー 第一隊に移動ですよね」  
「うんうん、よくがんばつた」

「俺！　ベイゼルは自分を称賛した。  
偉い俺！　がんばつた俺！　すげーぜ俺！」

この糞餓鬼と一円過ぐさねばならなかつた自分は特別ボーナスに値  
する。騎士団からは無理でもぜひともティナン隊長にはたかろつ。  
酒……いや、たまには女でもいいはずだ。

娼館のそこそこランクではなく、もうちょっと上のランクの女を。  
こんな胸なしの女の面倒を一月見る為に外出まで控えたのだ。それ  
くらいは許される。

妄想の世界に耽つていると、ルティエラが「よくがんばつた」の  
枕言葉を自分のものと勘違いし、きらきらと瞳を輝かせて拳をぐつ  
と握りこんだ。

「ぼくがんばりました！　筋肉もけよつぱり付きましたし、筋肉痛

とも仲良くなれたしつ

「……筋肉？　あんま判らん」

ケツとベイゼルが胡乱な眼差しを向けると、最近首の下辺りまで  
ちょっぴり髪の伸びたルティエラは突然自分の腹部のベルトに手を  
かけ、バックルが外れないことに唇を尖らせてシャツを一気に引き  
ぬいた。

「Jの腹直筋を見てもそれがいえますか！」

えいっヒシャツをたくしあげる小娘の色氣の無さにベイゼルは脱  
帽した。

「……も、いいです」

どうだ見やがれと示されても楽しくない。確かに腹筋はだいぶ鍛  
えられたようで、女性とは思えない体つきをしている。

たーのーしーーーない。

げんなりとしながらベイゼルは未だ濡れている髪をかきあげた。

「おまえね、だれかかれかまわざ筋肉出すな。というか肌をさらすな  
あと数日でこの子供ともおさらばキャホーイと思ったが、色々と  
心配になつてくる。やれやれとベイゼルは吐息を落とした。

「おまえと一緒に部屋で退屈はしなかったよ。だけど、第一隊につ  
つたらもつとじつかりしろよ？ 第一隊は司祭長であるリルシエ  
イラ様の護衛だからな。あつちは厳格だぞ」

しおちゅう逃げ出すリルシエイラの子守部隊とか影で言われ  
ていたりもするが、それは今はナイショにしておこう。

しんみりと別れを惜しみ、優しい兄のように瞳を細めてルティエ  
ラを眺めるベイゼルに、ルティエラは感極まるように田元を潤ませ  
た。

「ぼくも楽しかったです。副長と離れ離れになつても、ぼくは副長

をもう一人の兄みたいに大好きです

「おうひ

兄でも何でもいい。これで縁切りだ。

こいつがいなくなつたらここぞとばかりに女遊びに励もう。子守で目を離せなくて辛くて辛くて、そもそも、女が同室にいるというのに手が出せないってどんな拷問だよ。

俺、本気で偉い！

あと数日で晴れてここの子守生活から脱却だ。

幸せになれ、俺。

しみじみとしているところで、ふいに扉がノックされた。

「あ？ なんだこんな時間に」

二人の視線が扉に向き、ルディエラはシャツをズボンの中に押し込みながらひよいひよいと扉を開きに行つた。

「はーい」

機嫌もよく扉を開いたルディエラが、びしりと固まつたのは扉に立つていたのが親愛なる鬼隊長。愛すべきティナン兄だつた為だ。ティナンは冷ややかな眼差しでルディエラを一瞥し、ついで寝台に上半身裸で座り濡れた髪をタオルでがしがしこき混ぜていたベイゼルへと更に冷ややかな眼差しを向けた。

「ベイ、ちょっと

すつと持ち上げられた手のひら、中指でちょいちょいと招かれたベイゼルは「うつ」といやな予感に呻いた。

「な、なんすか？」

「いいから、来い」

「いいから来なさい。

という台詞ではないところがそこはかとなくいやな空氣を撒き散らし、思わずルディエラはそそくさと飛びのいた。

ベイゼルは先ほどまでの幸せ氣分を一気に吹き飛ばされ、肩を落としてとぼとぼとティナンの許へと歩いたが、そのまま肩をがしりと掴まれて部屋の外に出されたあげく、扉を乱暴に閉めると同時にその扉に押し付けられた。

「ルテイヒラに筋肉をさらすとはい一度胸ですね」

「俺の筋肉なんぞ見向きもしねーよ」

「なんだソコ！」

泣きたい。

「そうですね、そんなみつともないものは人目に晒すな」  
残念だとかみつともないとか、もう俺カワイソウ。

この兄も嫌いだ。

「俺は出でるトコはしつかり出ててさわり心地が良くてオトナな女にしかきょーみねえよ！ 誰があんな平面胸に興味あるもんかつ」  
「つちのルテイを愚弄しているんですか！」

「どういえばいいんだーつ。

上半身裸の副官を扉に押し付け、顔を突き合わせてぼそぼそと低く罵る上官の姿は決して他人に見せてはいけないものだった。

「そんなことより、何よ？ こんな時間に何か用があつたんじゃねえの？」

「……忘れていました」

ふつと押さえ込んでいた肩から力を抜き、ティナンはふいに寂しそうに瞳を曇らせた。

それを見ると、ベイゼルは理解した。

愛しい妹が隊を移動して自分の手を離れるのだ。

この兄にしてみれば寂しいのだろう 自分とは違つて。

「ま、心配なのは判るナジロ。ナ守部隊の連中はしおよつもずっと  
品行方正……」

なんといつても仕えているのが司祭長であるリルシェイラだ。  
と言葉をつないで慰めようとしたが、ティナンはその言葉に言葉を  
かぶせた。

「来月もルティーハラを頼みます」

「は？」

「殿下から来月も第三騎士団で面倒を見ると命じられました。激し  
く不本意ですが、致し方ない。そういうことですから」

俺、俺……俺力ワイソウ。

道端に雑巾が落ちていた。

いや、正確に言えば人間だ。おそらく。

赤みの強い金髪は日の光の中で鮮やかなオレンジ色にも見える。それをじっくりと観察しながら、リルシェイナはしゃがみこみ、とりあえずつついてみようかと思つたものだが、いかんせんソレが汚れてばつたり倒れている為に得体が知れ無すぎた。

触れてよいものかどうかとじっくりと思案し、落ちている棒を拾い上げておそれおそれつついてみることにした。

軽くつついてもびくともしない。

これはまさか死体だらうか？

王宮敷地内に死体が落ちているというのも奇妙な話だが、まさか暗殺とかよからぬものが入り込み、衛兵であるこのものを殺傷し……

巡る想像にとくとくと心臓がはやる。

「ど、とつあえず祈祷か？」

司祭の祈りもなく果てた哀れな命を沈めねばならないだろうか？  
半ば真剣に考え始めたところで、

「お……すい、たー」

か細い声が聞こえ、リルシェイナはそれが生きてこむことにびく

りと身を跳ね上げた。

「死体が喋った！」

「死んだら喋るかつー！」

しかし、反論したのはソレでは無かつた。

ペしんと手元を叩かれ、持っていた棒を落とされる。リルシェイナは驚いて視線を上げると、そこに見慣れた弟の姿を発見した。

「あ、キーシュ」

無駄に偉そうな第三王子殿下 軍事将軍である弟は兄をゾーキンを見るかのように眇めた眼差しで睨んだ。

「また逃げたのか、リーシュ兄」

言いながら、キリシュエータは嘆息しつつボロゾーキンを引っ張り起こし、抱えあげた。

「おまえもこんなところで寝るな。道端に落ちてるのを回収するのが何度目だと思つてゐる」

「ううう、痛い。痛いつ。横つ腹痛いいつ、止めて」

はうううと苦痛に呻く声に、リルシェイナは「まさかおまえが無体な真似を？」王族なんだからうつくやれよと口にして、今度はギロリと睨まれた。

「何の話だつ」

「……いや、ただの冗談だけど。そのこ、大丈夫かい？」

「打ち込みでさんざやられた拳銃、剣が折れたから武器庫に行けと命じたら行き倒れただけだ。それより、あんたはどうして一人でいる？ 第二隊の人間はどうした？」

「ああ、叱らないであげてくれよ。私は昼寝の時間なんだ 隠し扉から抜け出した」

「その隠し扉今度ふさいでおく」

「王族が暗殺を逃れる為の大事な隠し扉だよー」

「死ね、ボケ」

キリシュエータは言いながら勢いをつけてボロ雑巾を肩に抱え上げ、すたすたと歩き出した。

数歩歩いたところでぴたりと止まり、眉間に皺を寄せて指を突きつける。

「部屋に帰れ」

「ね、その子さ、おん なんでもないです。なんでもないです。  
な・ん・で・も・な・い・です」

両手で広げて相手を押しとどめようとするコルシュイナと、物凄く平坦な表情で近づきすぎると顔を寄せたキリシュエータはそのまましばらく視線を交し合った。

「兄君は昼寝中でしたね」

「昼寝はおかしな夢を見やすい『テスヨネ、ソウデスヨネ。ハイ』

「そうだ、これは女だ」

しかしキリシュエータはあっさりと白状した。

「来月、いやその次の月になつたら第一隊に移動させる。男としてだ 責任持つて管理しろ」

実の兄に向かつて横柄な様子で突きつけ、ニヤリと口の端を歪める。

「別に女とばれても構わんが、あんたの第一隊で問題が起きたら大事だな、『司祭長』

「……嫌がらせ？」

「それと、『』の父親は騎士団顧問のエリックだし、当然第二隊隊長のティナンは兄だ。ついでに言えば西階の熊殺しも兄だな。何かあつた時にあの三人の攻撃を負うのは面倒くさそうだな」

ますます笑みを深める弟の台詞に、リルシュイナは蒼白になつて身震いした。

「冗談だろ？！ そんな危険な女の子なんて引き受けられないよつ

「そうか。だが第二隊に移動は確定している。観念して世話に励めよ」

「キーシュ！ 「厄介」とにぼくを巻き込むな」

「そつは言つても、もう確定している。がんばれ、応援している」  
少しも応援などしていなさそうな平坦な口調で言い切り、荷物を担いだますますたと行く弟に必死に追いすがつてみたが か弱

い司祭長が凶悪な軍事将軍に勝てる筈がなかつた。

「キーシュ！ 夜中に祈祷してやるからなつ」

「ぐだらん」と言つてないでさつと帰れ、ボケ兄」

\* \* \*

「ベイゼル、道端に落ちてたぞ」

軽くおやつを食べて生還したルティエラは恐ろしい程元気を取り戻して今は他人の組み手の見学をしていく。

「やつちまえ！」

とか言つてゐる言葉が男らしい。

それを少し離れた場所から腕を組んで眺めて言つキリシュエータに、ベイゼルはがしがしと頭をかいた。

「餌が切れると駄目なんスよね、いつもすんません」

「忘れているかもしねないが、私はあいつの回収係ではないからな」誰も回収に行けなんて言つてませんけどね。

という言葉をベイゼルは飲み込んでおいた。しかしニヤリと口の端を歪めて見せる。

ニヤニヤと無遠慮に見てくる相手を一瞥し、キリシュエータはぐるりと身を翻そうとして固まつた。

「ああ、殿下…」こちらでしたか

すかすかと歩いてくるでかい男の存在にキリシュエータは顔を引きつらせ、そしてベイゼルは一瞬意味が判らなかつたが次の瞬間には焦り、意味もなくくるりと反対方向を向いた。

「定期報告に来たのですから、きちんと執務室にいてください」

「いや、うん……すまんな。バゼル」

筋肉ダルマエリックの一番そつくりな息子は豪快に笑い、ふつと

その視線を彼らの後ろ、広場で行われている組み手へとむけた。

「おっ、第三隊楽しそうなことしてるな」

「お、おっ」

キリシューターは後ろ足でベイゼルを蹴つたが、ベイゼルは一步退いて逃げただけだつた。

「報告書は執務室に置いてまいました。必要事項は書記官に。これといって重要なことはありません」

「そうか、じゃあ気をつけて帰れ」

「了解しました。じゃ、オレはこのままひっくり組み手に混じつて

バゼルは陽気に笑い、ふと停止した。

「…」

「…」

「…」

「…」

何を、何を見ているんだ！

何に気付いているんだ。

喋れこの筋肉ダルマ！

キリシューターの腹がキリキリと痛み出し、ベイゼルがじりじりとその場から離れようとしていると、バゼルは自らの腰につるされた剣をトントンとたたきながら首をかしげ、

「いや、違うか」

と小さく呟いた。

「ど、どうかしたか？」

「いや、あの赤毛のちびっこが一瞬オレの妹に見えたんですよ。最近旅行だとかで家をあけてるらしいで、見てないからかな。赤毛を見ると妹だとおもっちゃう

はははははつと笑いながら頭をかき、バゼルは「じゃ、殿下失礼しますよ」と軽く手をあげてその脇をすり抜けた。

「おひ、ティナン。オレも混じつていいか?」

監督役を務めているティナンが兄の存在に気付き飛び退り、ルディエラが慌てて他隊員の背に隠れ、キリシュエータは思わずリルシェイナではないが胸元に手を当てて神に祈った。

ティナン、神がいれば明日もきっと生きていられるだろう。  
きっと……

バゼルの混じる組み手の間、ルディエラは「そこそと隠れて過ごした。

危うく広場に引っ張り出されそうになつたが、数名の隊員と共に雑用で指名され、そそくさとその場を逃がしてもらえたのだ。

首の皮が繋がつたと安堵したのはルディエラばかりではない。ティナンも、そしてそれはクリシュエータも一緒だった。

そんなこんなで新たな用事を言い付かつたルディエラだったが、何故か現在軽く窮地に陥つていた。

「俺は病気なんだろ」「

つらそうな言葉はルディエラの心にもやんと響く。

第一隊の純白の騎士服の隊員の名前は当然の如く思い浮かばない。なんといっても他人の名前を覚えるのが苦手なルディエラは、現在自分がいる第三隊の人間だと、未だにきちと覚えていない。

「だが、もう駄目なんだ」

何が？

ルディエラは荷物と荷物の間に挟まり、現状の打開策を練るのが懸命なのではないかとひしひしと思い浮かべていた。

頼まれて鎧帷子の修繕用に古い鎧帷子を武器置き場に取りに来たところで、武器置き場の片隅で繰り広げられる「告白」にルディエラは慌てて身を潜めてしまつたのだ。

「俺のものになれよ」

「ほそほそと聞こえているのは、これは……そり、これは間違いな  
く告白ではあるまいか。

「セイムつてば肉屋のアリイに告白されたんだつてー。」

「まつ、お肉に困らなくていいですねー。」

「勝手に盛り上がるなー！」

なんて良くマーティアと一人でセイムをからかつてしゃしゃい  
とやつっていたものだが、これは種類が違う。  
何故ならばここはむつさじ男ばかりの園。

騎士団の隊舎 警備隊であれば女性管理間や事務官が存在するが、  
騎士団には女性隊員などいないのだ。そこから導き出される答えは  
三つ。

一、外部から女性を連れ込んだ。

二、告白しているのも男、告白を受けているのも男。

三、告白しているのは男、だが告白を受けているのは男に化けた女。

……とりあえず三は無いな。

そつそう男に化けた女がいてはたまらない。

「やめて下さい」

「ノドノセと聞こえる音と、相手の拒絶する言葉。

とりあえずルディエラの謎は一つ解けた。

告白されているのも男だった。立派な成人男子の声 だ。

しかも、なんと、相手は嫌がつていてる。つまり、告白している男は  
変態かもしれないけれど、告白を向けられている男は変態ではない  
のだ。ここはひょいひょいと顔を出して「お邪魔しましたー」と言  
うべきか？ ああ、でも、どうしたらいいんだ？

ルディエラがますます身を縮めていると、壁にがんつと押し付けられるような音が響いて小さなうめき声まで聞こえてくる始末。

「これはもしかしたらヤバイのか？」

ルディエラがぐつと拳に力を込めると、今度は力強いがつんつと鈍い音が響いた。

「やめろってんだろ、このXXXXXX野郎。病氣？ そんな言葉は免罪符でも何でもない。 その腐XXX引っこ抜いて無理やりテメエの！」

笑いながらさわやかに吐き出される言葉の羅列は、とても耳に入れたくない程にお下劣でした。

延々と聞こえてくる言葉にルディエラが蒼白になつていると、やがてその場から逃げ出すような音が響き、ついでふんつと鼻を鳴らす音と、パンパンっと手を打ち鳴らし、こともあるうに武器倉庫の中、更に奥へと足を進めたその人物は荷物の間でうずくまって蒼白になつているルディエラと対面してしまつた。

「……こにはまさかのハッテン場か？」

面前に現れた長靴ちょうづかをおそるおそる上へと迫ると、その隊服は第一隊の薄い青　　冷たい黒い瞳が胡乱にルディエラを見ていた。

「あ、あのつ。すみませんでした」

ルディエラはがばりと勢いをつけて体を起こし、ペニペニと頭を下げた。

「見たくて見た訳じゃありませんつ。といふかぼく見てませんからつ。男の人に告白されてキスされて、拳句怖い」と言いながらぼこぼこにしていたのなんか見てませんからつ」

「完全に見てるじゃないか」

引きつった笑みで言われてしまい、ルディエラは更に自分が窮地に陥ったことに気付いた。

「確か、お前もビヨウキモチなんだよな？」第三隊のちび

「病気？ ぼくは健康ですけど」

「男好きって有名だろ」

その言葉に、ルディエラはかちんときた。

「ぼくは別に男好きじゃありません！」

何故そのような噂がたつて居るのか判らないが、ルディエラは男好きではない。生憎と女好きでも無いが、あれ、この場合は男好きで正解なのだろうか？

ルディエラは思わず真剣に考えてしまった。

「お前がガタイのイイ野郎の服を脱がして襲おうとしたって、このは有名な話だ」

「それはつ……」

言い返してやるつと思ったが、面前の青年は恵々しそうな顔でルディエラを眺め回し、その白手に包まれた手でぐいっとルディエラの顎先をつかんで上向かせた。

黒髪がさらりと揺れる。

冷たい黒い眼差しは無機物を見る眼だ。

「ま、確かにわつきの『カマツチ』のおっさんより、まだおまえみたいのだつたら理解はできる」

更に馬鹿にされた気がして、ルディエラは相手を振り払おうとしたが、何を思ったのかその相手は男にキスされて憤っていたにも関わらず、ふいに身を屈めてルディエラの唇を自分の唇で塞いだ。

「ぐあああ！」

男、男にキスされてるつ。

変態だつ。

一瞬混乱したルディエラだが、よくよく考えてみると自分は女だつた。自分は女だし、相手は男だからこれは正解。なんだしつとも問題無い わけあるかつ！

はじめはただ押し付けられただけの唇がすつとその圧力を弱めると、舌先がルディエラの唇の膨らみを確かめるようになぞり、その隙間に侵入しようと試みる。ルディエラはじたばたと暴れ、ふいに体を沈めたかと思うと、すばやい動きでその腕の中から抜け出し、びしりと指を突きつけた。

「何するんですかつ」

「口直し わりと悪くなかった」

きいいいいつ。

ルディエラはギンつと相手を睨みつけ、足元に落とした鎖帷子をすくいあげてふんつと顔をそむけてその場から逃げ出した。

おまえはデカマツチヨのおつさんと同類だ！ 変態つ。

色々といいたいことはあつたが、悔しさの方が先にたつてしまつた。腹立たしさのまま第三隊の隊舎に戻り、ルディエラは苛立ちを撒き散らした。

「副長が悪い！」

「は？ 何が？」

鎖帷子の修理用に古い鎖帷子をとつてきてくれと命じつけたベイゼルを罵つてしまつたが、完全なハつ当たりだ。

だが、ふと気付いた。

つまり、自分もハつ当たりをされたのだ。

だからって男とキスするか？ 口直しだ？ ふざけるなつ。

第一隊の薄青の隊服に黒髪、黒い瞳の男。  
絶対に許すまじつ。

とりあえず「ファースト・キス」を見知らぬ男に奪われるなんて、  
酷い。

とは違う次元で憤つているルディエラは女として何かが欠けている  
かもしねない。

カカツと音をさせて馬の蹄が地面をかいた。

馬上のルディエラの手が反射行動で馬の手綱をひき、突然の命令に馬の足が止まつた為だ。

「どうした？」

ルディエラの背後を並足で走つていたベイゼルも同じよつに手綱を引き、太ももでぐつと馬の背を押さえ込み、浮かせていた尻を鞍に落とす。

「……あの人、知つてます？」

ルディエラの眼差しがきつく第一隊の薄青の隊服を見て告げる言葉に、ベイゼルは眉を潜めてそちらへと視線を向けた。

司祭長にして第一王子殿下リルシェイラ の子守部隊として名高い騎士団第一隊は、今日もどつやら逃げ出したリルシェイラを探しているのか、あわただしく「あつちだこつちだ」と動き回つている。

数名の薄青の隊服の男達が、言葉を交し合いながら指であちらちらと示しているのは、明らかに何かを探している様子だ。

「あの、黒髪の人」

ルディエラが忌々しそうに言いながら顎先で示す。

ルディエラらしくない反応に眉を潜めながら、ベイゼルは「ああ」と呟いた。

「確かフォード・バネット？ バネット・フォードだったか？ なんか名前だか家名だかどつちでもいんじやね？ ってな名前だ。詳しきは判らん

あいつがどうかしたのか？

そう首をかしげて問い合わせたが、ルディエラはその時はすぐに興味を失ったかのようにぱいつと顔をそむけ、さつさと馬首を元の方向へと向けた。

ベイゼルは意味が判らず、思わずじつと黒髪の男を眺めた。黒髪に黒い瞳を持つ精悍な顔つきの男だ。ルディエラの大好きな筋肉質という訳ではないが、リルシェイラの子守部隊の中ではしつかりとした肉体を持っている。何より、あのルディエラにしては態度がおかしい。

普段であれば「副長、あの人誰ですかー？」と明るい口調で尋ねてくるだろう。だが、先ほどのルディエラは険しい表情を浮かべ、その口調は固く忌々しいというのを隠さない。明らかに好意ではなく嫌悪の類だ。

だが、バネットとルディエラの間に何の接点も見出せない。「つてか、俺が悩むことでもねえし？」

ぼやきながらベイゼルは自らも馬首をめぐらせた。

ただ、誰に対してもあけすけに疑うこともなく好意を示すルディエラにも、人を嫌うという感情があることに驚いていた。

\*\*\*

「いいか、お前は酒を飲むなよ？」

毎度毎度くどいほど言われているルディエラは、隊舎から程近い場所にある騎士団御用達の酒場である【アビオンの絶叫】の一角で唇を尖らせた。

今日も軍服姿でほぼ占めている居酒屋では、各場所でカードゲームなども行われている。

まったく平和な国だ。

酒を禁止されているのだからルディエラは酒場など来なくていいのだが、やはり皆が行くといえば一人寂しく官舎で待つのは寂しい。何より今回は鬼隊長ティナンが不在だと耳に入っていた為、ルディエラは嬉々としてくつついて来たのだ。

それに、店主であるドラッケン・ファウブロウジ皿饅の牛舌の煮込みも捨てがたい。二三三晚コトコト煮込んだといふ煮込みはまさしく絶品だ。

「ちゃんと見ているから、あまりひるべく言つてやるな」

なぜか混じつていてるキリシュエータ第三王子殿下は、相変わらず銀縁の眼鏡をかけ、一般隊員と同じような騎士団服だった。

いわゆる変装なのかルディエラが尋ねると「酒を飲みに来ているのに軍事將軍の黒い衣装に厚地のマントなんてつけていられるか。眼鏡は変装のつもりはない。普段からつけたりつけなかつたりだな」キリシュエータは言いながら、「ブレットの酒を美味そうに一口喉へと流し込む。それを恨めしい気持ちで眺めやつたルディエラは、一人寂しく果実水をすすり、ふと店内に入ってきた一団に顔をしかめた。

### 第一隊を示す薄蒼の騎士団服。

今まで気にかけたこともなかつたのだが、一度氣になると視界の端にどうしても引っかかるらしい。喉に刺さる魚の小骨のよう。

「どうした？」

「……いや、なんでもないです」

第一隊の隊服というだけでイヤな顔をしている場合ではない。なんといっても来月にはその第一隊に入ることになつてている身だ。毛嫌いしている場合では無い。

だが、ルディエラの理性がどうしてもイヤな気持ちをむくむくと

押し上げてくるのだ。

しかも、数名の隊員が入つて来たかと思うと、その後ろから問題の黒髪が顔を出しては、ルディエラの不機嫌 不愉快さも更にゲージを増していく。

出たな、変態。

男にキスする変態めつ。

ルディエラの胸の内でざわめくのは嫌悪感より先に復讐心だった。

そして相手もルディエラに気付いたのだろう。

ふつとその視線が向けられ、しばらくルディエラをしげしげと観察したかと思つと 嘲るように鼻で笑つたのだ。

力チン、と頭の中で何がが音をさせた。

鼻で笑つておきながら、そのままふいつと視線をそらして自分の仲間内となにやら話をはじめよつとする。あまりにも腹がたつたルディエラは、もつていた果実水をガンつと乱暴にテーブルに押し当てるとい、引きつるような微笑を浮かべた。

目にモノみせてやる！

「殿下、殿下」

ルディエラは自分の感情を捻じ曲げるよつて明るい口調で隣のキリシュエータの袖を引いた。

「なんだ？」

「ぼく、こないだ武器庫ですつゞいものを見

元気良く声をあげた途端、今にも【アビオンの絶叫】の一角で椅子を引こうとしていた黒髪の男は、勢いをつけてぐるりと身を翻すと、足音も高くルディエラの元へと近づき、わざとらしい声をあげた。

「ちびつ、おまえはかつさいからそんなトコにいるとは思わなかつたな。ちょっと来い」

その表情はひきつり、明らかに怒りを押さえ込んでいる。

ルディエラは嬉々として口を開いた。

「」の人と第一隊の「」

その口にぐつと大きな手が押さえつけられ、無理やり肩口を掴んで引き寄せようとする。

「いやあ、まさかこんなとこひどいとこねえとこねえ。なつかしいな、ちよつと話せうか?」

まるで古馴染みをみつけたというような言い方だが、勿論ルディエラとこの男は古馴染みでも何でもない。

その勢いに気圧されたキリシュエータと、そして第三隊のベイゼル配下は呆気に取られた。

「にんじん、知り合いなのか?」

怪訝な様子のキリシュエータの言葉に、ルディエラは口をふさがれながら「知りません!」と言い放とうとするのだが、それはむなしく「むむむむむ」といつ音になつた。

「知り合いです。幼馴染なんです。すみませんが、少し借ります

「むむむ、むむむうう」

離せ、変態! という苦情も、謎のむむむ語に変換されてしまう。

そのまま小脇に抱えてさらわれそうになつたが、幸いその場には昼間のルディエラを記憶しているベイゼルがいた。

「知り合いでしょ。で、うちのが何かしたか?」

やれやれと肩をすくめる。伸ばした手で容易く男の手をルディエラから引き剥がすと、ルディエラは自由になつた口で思い切り叫んだ。

「この人、男の人とキスしてました！」

途端に酒場はざよめき、キリシュエータは瞳を見開き、調子に乗つたルティエラはその勢いのままにさうに爆弾をたたきつけた。

「それを見たぼくにもキスしたんですよ！ 酷いつ、変態反対つ

シーンと凍りついたその場で、本名フィルド・バネットは自分ががらがらと音をさせて崩れていぐのを感じた。

「きいいこさあ、まあつ。

あそこまでされたら普通黙つてるもんだろつ！ 貴様に矜持は無いのかつ

「ぎやあつ、さわんな変態！」

「男に口付けられたのはお前も一緒だ！」といつ口封じのつもりでやつた行為すら暴露されてしまったフィルドは、その額に変態の文字がさんざんと輝いてしまったのをひしひしと感じていた。

納得がいかない。

ルディエラはアヒルのように口を尖らせ、ぎつぎつと奥歯を噛み合させて眉を潜めていた。

それに反してベイゼルときたら必死に何かを堪えて肩を小刻みに震わせている。この場合の何か、それは笑いというものだ。

腹の底からこみ上げてくる笑いの渦は、やがて決壊しベイゼルの身はばつたりと崩れた。

「たまんねえつ。クソ面白いー。」

「ちつとも面白くないつ」

ルディエラは怒鳴り散らしたが、思わず本気で涙が滲みそうになつた。

先日【アビオンの絶叫】での出来事は、あつといつ間に広まった。それはそれは面白おかしく。

曰く、第一隊のフィルド・バネット 通称ファイードは男好きである。

これはいい。

この噂に関して、ルディエラは「よしー」と拳を握り締めてケケケケケと謎の笑いを腹の底から吐き出した。まさに「ざまあみろ！」と腹のすぐ思いだつた。

曰く、ルディ・アイギルとフィルド・バネットはフドウトクな行為をしているところを田撃された。

これは違う。断じて違う。嘘つぱちだ。

見ていたのはルディエラであって、フドウトクな行為　はルディエラには少ししか関係がない。

そう、この噂はまだ面白おかしく脚色されて遊ばれてしまっているだけなのだが、当然当人にはたまつたものでは無い。

「どうしてぼくまでつ」

「本気で言つてるヤツなんて六割程度だ。気にすんな

ベイゼルは快活に笑つて見せたが、勿論嫌がらせだ。

「六割が本気つて、勘違いしている人間のほうが多いじゃないですかつ！」

「だつてもともとお前が男好きだつていう噂は流れてたから、更に信憑性が増しただけつうことだな！」

ぽんぽんつと頭をたたかれ、ルディエラは一層惨めな気持ちになつた。

\*\*\*

あの日、【アビオンの絶叫】の店内はまさに大騒ぎだつた。

店内にいた人間達は、はじめのうちこそルディエラの発言に水を打つたようにシンつと静まり返つたものだが、やがてルディエラとバネットの掴み合いを面白がるようにはやし立てた。

そう広くも無い店内だと、バネットはルディエラの襟ぐりを掴みあげて怒鳴りつけ、ルディエラはそれに対して「喧嘩なら買いますよつ！」と息巻いている。

酒はどちらも入つていないので、このまま放置しておけばまさに転げまわつて阿呆のように取つ組み合いの喧嘩になりそうな雰囲気だ。

それを「あー、ベイゼル」と顎先でキリシュエータが命じつけて引き剥がし、キリシュエータは店内の喧嘩を沈める為にパンつと手

を打つた。

途端にその場が静まるのは、どんなに騒いでいたとしても誰もがこの王子の存在に気が付いていたし、また誰もがその動きを把握していることだろう。

ベイゼルはルディエラを背後から押さえ込み、第一隊の副長であるサイモン・クロールがフィルドを押さえ込んだ。

キリシュエータは「どうして私が喧嘩の仲裁などしなければならないんだ」とぼそぼそと呟きながら眼鏡を左手の中指で押し上げ、瞳を細めた。

しばらく睨みあつてゐるルディエラとバネットとを交互に見つめ、そして先ほど二人が言い合つてゐた言葉を頭の中で纏め上げる。一瞬にして「どうして自分は今日酒場にいるのだろうか」という激しい後悔が押し寄せた。面倒ごとは嫌いなほうではない。そういうことを楽しめるタチだ。だが、あまりにも下らない。

「つまり バネット」

「殿下。言つておきますが今のこいつの言葉は足りない部分が山とあります。私は同性にたいして何の感慨も持ち合わせてはおりません！確かに、あの日武器庫で不遇にもそういうした場面がありますが、私の本意では決して無い」

「話が見えん。きちんと説明するならきちんと説明しや」

つきつきと頭が痛む。

ちらりとルディエラに視線を向ければ、ルディエラはその瞳を爛々と輝かせ、その口元はベイゼルによつてふさがれている。

キリシュエータはふつと浮かんだ不快な気持ちにとりあえず蓋をした。

なんだか今ちょっととイヤな気持ちになつた気がするが絶対に気のせ이다。そう、絶対に。

「にんじん。言いたいことは？」

その言葉にベイゼルがその手を離すと、ルディエラは大きく酸素を取り入れるように呼吸し、キツとその眼差しでバネットを更に睨みつけた。

「確かにその変態が他の男に無理やりキスされていたのは本意じゃないかもしねないですが、でも、ぼくにキスしたのは許せない！」

「普通に考えて口止めだらうが！ 同じことされたんだぞ。私がクソ野郎にキスされたなどと言わなによく、貴様も同じ田にあわせただけだ」

なんで貴様はそつべらべら言えるんだ。

野郎にキスされたことを口にするなんて、頭おかしいだらう！

また怒鳴りあいになり、ベイゼルは慌ててルディエラの口をその手で塞いだし、バネットを押さえ込んでいるクロレルは力いっぱいバネットの足を蹴つた。

そう、ソレは頭がおかしい。

キリシュエータはつきつきと痛む額に軽く手で触れ、溜息を落とした。

「第一隊、クロレル」

「はい」

「第一隊は明日から一週間、全員減俸。隊の風紀を乱すな

「申し訳ありませんでした」

「バネットの処遇は隊長に任せます。報告書は必要が無いな？」

口

頭でのみ報告しろ

丁寧に頭を下げるクロレルの様子に、ルディエラは固まつた。

まさか隊の減俸などとこいつ話に発展するとは思つてもいなかつたのだ。

その眼差しを見開いてキリシュエータを見つめると、キリシュエータは今度はその眼差しをベイゼルへと向けた。

「第三隊、ベイゼル」

「はい」

「第三隊は明日から一週間、超過勤務を命じる。アイギルの処遇についてでは隊長に任せることにしたいところだが」

ちらりとその眼差しがルディエラに向けられた。

ベイゼルに逆手を取られておさえられ、もう片手で口を塞がれいるルディエラの瞳が、じぼれそつた程見開かれてキリシュエータを見つめている。

キリシュエータはふっと笑った。

「ティナンに任せたら十中八九、クビだらうな」

ベイゼルも苦い表情を浮かべているのを見れば、さすがに除隊せられるのは哀れに思うのだろう。

そしてキリシュエータはその視線をバネットへと向けた。

バネットの眼差しはルディエラへと向けられ、明らかに冷たく「ざまあみる」と輝いている。

キリシュエータは深く、深く息を吸い込んだ。

ルディエラを騎士団に引きこんだのは、遊びだ。

退屈な日常にいつもとは違うものを放り込む、遊び。

ただの思いつきで、何の弊害もなければ、何の意味も無い。

女性騎士の登用など本気で考えている訳でもない。そもそも、ルディエラはよくやっているといえばよくやっているが、それは女性としては良くがんばって騎士達についてきているというだけの意味で、

他の隊員に喰らい付いているのが精一杯だ。

女性隊員を入れることにうまみを感じさせるものではない。むしろ男しかいない場でこんな阿呆な騒ぎを起しそうのだから、ますます女性など不必要だ。

三ヶ月持たない か。

キリシュエータは瞳を閉じて、ふるつと首を振った。  
コレは自分の遊びだ。

こんなクソ下らないネタで潰してもうつては困る。

「アイギル」

声をかけると、ベイゼルがまた手をはずす。

勢いこんで口を開くかと思えば、ルディエーラは滲むような小さな声でこたえた。

「はい……」

頭に手を置いてぐりぐりとかきまぜてやりたい気持ちになつた。  
悔しそうな顎と舌を結んだ。それを見つめ、浮かんだものに苦笑する。

「酒場での喧嘩は全て戯言だ。翌日に響かせるな」

意味が判らないと上田遣いで見上げてくるのに手を細め、軽く手を払つた。

「酒の席だ。クロレル、ベイゼル 今は忘れる」

それを合図に【アビオンの絶叫】は普段の酒場に戻つた。彼らの主の言葉は絶対だ。ただの余興として流されるだけ。酒場は普段どおりに戻つたが、おそらく一人の禍根は根強く残るのだろう。キリシュエータはベイゼルにくしゃくしゃと頭をかき回されているルディエーラを一瞥し、瞳を眇めた。ついで複雑な様子を見せてい

るバネットに近づき、その肩を叩いた。

「咎めはしない。だが、お前が闇討ちにあつても私は知らぬふりをするからな」

「は？」

小さく低く囁いたつもりが、ベイゼルにも聞こえたのだろう。ベイゼルはバネットの反対の肩をぽんぽんと一度叩いた。

「生きる？」

「は？」

私の玩具で遊んだ罰としては、十分な仕置きになるだらう。

ルディエラは皮袋に入った銅貨と銀貨、そして金貨に困惑していた。

昨日はいわゆる騎士団の給料日。隊長によりじきじきに下されたるそれだが、当然のように見習いにはそんなものは無い。がんばつてこるのにそれはちょっと寂しいなあと思つていたのだが、その日ルディエラは思いがけない贈り物に驚愕した。

「ほら」

と、まず銀貨一枚くれたのはベイゼルだった。

「へ？」

「下のモンの面倒みるのも上のモンの仕事だ。菓子でも食えよ」

それを筆頭に、通りかかるほかの隊員から「煙草代」だの「飴代」だのという名前で「インが渡され、あつとこつ間にルディエラの財布はそこそこ一杯になつたというのに、どどめのように第三王子殿下キリシューハータは金貨一枚ルディエラに手渡した。

「肥料代」

その名前は一番最低だった。

口の端をあげ、実に楽しげに「ちゃんと肥料を足しておかないと成長しないぞ、にんじん」とからかう口調で言つ。

流石に金貨は金額がでかすぎると思ったら、「見習い期間は給金がないのだから、何もいわずに受け取るのが見習いの仕事だ」だの「たまには服に気をつかえ」などと取り合はない。なんとこうかあつといつ間に一財産だ。

ルディエラは仲間達の優しさに心を暖かくし、皮袋を腰にぶら下げる鼻歌交じりにてこと隊舎の渡り廊下を歩いていたのだが、前方から敬愛すべき第三騎士団隊長殿が歩いてくるのを感じると、びたりと足をとめて壁際により、慌てて軽く頭をあげた。

「アイギル

低く、冷ややかな声が耳に落とされる。

たいていの場合ティナンは声など掛けずに無視していくのだが、その時は違つた。

びくりとルディエラの心臓が跳ね上がる。意味もなくじわりと自分の中に滲むものがあり、歯を食いしばつた。

「はい」

「顔をあげなさい」

淡々とした問いかけにおそるおそる顔をあげると、呆れるような奇妙な眼差しでルディエラを見つめたティナンが、ふいにルディエラの胸のポケットにすっと右手に包まれた手を向けた。

「ぼくはおまえの働きを認めはしないが、これは慣例の一つだ」

胸のポケットに落とされた一枚のコインの感触に、ルディエラは軽く目を見張つた。

「休暇を楽しみなさい」

ぐつと拳を握り込み、ルディエラはティナンに抱きついてしまつた。許されるのであれば兄に抱きついて「兄さま、大好きつ」と言つたいところだが、ここは隊舎で、そしてティナンは兄妹であることを示すことを良しとしない。

頭をさげてティナンを見送り、ルディエラは言われた通り休暇を楽しむべく、ばたばたと渡り廊下を走り、自室に飛び込むと着替えの最中のベイゼルに言った。

「副長！ 町に行きましょうよ  
……行くけどいかねえ」

ベイゼルは途端に嫌そうに顔をしかめ、ベルトのバックルを止めた。

そしてふと思いつくように口の端をイヤらしく舐め、ルディエラを指先で招くと、がしりとその肩を抱き、声を潜めた。

「それともやつぱ一緒に行くか？」

「だから町に行くんでしょ？」

「たりめえよ。久しぶりの休暇だからな。たあつぶり銳氣を養うんだよ、娼館で」

くくくくくと嫌らしい笑みを浮かべて見せる相手に、ルディエラは慌ててわたわたりと腕を動かし、相手の手を振り払った。

「なつ、昼間つから何言つてるんですかつ」

「お前も連れて行つてやつてもいいぞ？ 何ならおいつてやる」

当然、そんなつもりは毛頭無いベイゼルだった。ただルディエラをからかっていたのだが、ルディエラは真つ赤な顔をしてギつと睨みつけてくる。

「だつて副長コイビトがいるんでしょ？」  
「おまえ、人の心をえぐんじゃねえつ」

ベイゼルは忌々しいといつぱに舌打ちした。彼の言つところのコイビトの名はナシュリー・ヘイワーズ中尉。騎士隊隊舎とは王宮を挟んで逆側にいる警備隊の事務補佐官をしているが、生憎と心のコイビトであつて実際の恋人では無い。幾度かアプローチをかけているのだが、腕をひねられ、投げ飛ばされ、腹部に蹴りまでくらつたこともある。

ただいま連敗記録を伸ばしている最中だった。

「別れたんですか？」

小首をかしげる悪意のなさそつなルディエラの表情に、ベイゼルは毒氣を抜かれた。

「もういい」

別れるも何もはじまつてさえいない。

ベイゼルは苦虫を噛むような顔をし、がしがしと前髪をかきあげた。

「それで、お前は今日はどうするんだ？」

「町に出て皆さんにお金を貰つたお返しにお菓子を買って、自分の分も買つて、それでたまには市とか覗いて、最後には実家に行ってこようかなつて思つてます」

色氣よりも断然食い気なルディエラだった。

それを眺め、ベイゼルは嘆息した。

「んじや行くか

「ぼく娼館はつきあいませんよ」

「ちげえよ。馬鹿みたいに皮財布ふくらませたお前を一人で放置で  
きるか。阿呆 順番ははじめにお前の家だ。不必要な分はおいて  
来い」

疲れたようなベイゼルの言葉に、けれどルディエラは顔を曇らせた。

ベイゼルはティナンの生家を知っているのだろうか？ という謎が浮かんだのだ。自分とティナンが兄妹 兄弟であることは内密になつていて。もし、ベイゼルがティナンの、若しくは騎士団顧問のエリックの自宅を知つていたら面倒くさいことになつてしまつ。

本気で焦つたのだが、ベイゼルは勿論そんなことは百も承知だ。顔色を曇らせているルディエラに、ベイゼルは上着に手を伸ばし

ながら何気ない風を装つて声を掛けた。

「おまえん家つてどの辺り?」

「ちよつと町の外れです。クレインの鍛冶屋のまつ」

「へえ。あつちは行つたことないな。鍛冶屋のとこで待つていいか? 新しい剣でも鍛えてもらおうかな」

そくベイゼルが言えば、途端に曇つていた表情が明るくなつた。

「じゃ、早く行きましょう!」

\*\*\*

「ああ、これとこれ下さい」

キリシュエータの私室の壁に飾られているナイフを指先でなぞつていたティナンが、ふいに言いながらソレを取り上げた。

「なんだ? 自分のヤツはどうした?」

細かい細工が施されたナイフは武器とこいつよりもすでに芸術に近い。キリシュエータはそういうものを飾るのを好むが、物に執着は無い為に他の隊の隊長に持つていかれてしまつこともよくあることだつた。

だが質素なものを好むティナンはわざわざ細工の施されたいるナイフなど使用しようとはしない。

今までキリシュエータのコレクションを持つてこへりとなど無かつたのだ。

ティナンは手にしたナイフの重さを確かめるより手の中で弄びながら、にっこりと微笑んだ。

「一本は夜中に真つ黒い虫がいたので投げつけてしまつました」

「……」

「もう一本はあんまり腹がたつたものだから、ヤツの寝てゐる枕に

突き刺してやりました

汚らわしいから回収するのもイヤです。

機嫌の良さそうな幼馴染は、一本のナイフを背中のベルトに差し込んだ。

鼻歌まで歌いだしそうなその様子に、思わずキリシュエータは心持下がつてしまつた眼鏡を中指でおしあげながら、

「私の印章入りのナイフでおかしなことをするなよ」

と、一応忠告だけはしておいた。

「いやですよ、殿下。ナイフばかりじゃ芸がないじゃないですか」「どうやら次は違う手にどうとしている幼馴染の様子に、キリシュエータは肩をすくめて、

「一度ですませる、一度で」

と嘆息したが、絶対に主人に向けてはいけないような馬鹿にしきつた眼差しが返つてきてしまった。

「私の可愛いルディが感じた心の痛みを、恐怖をひしひしと体の隅々にまで呴きつけてやらねば気がおさまりませんね」

「……」

いや、あいつもう忘れてるみたいだぞ。

たつぱり入つた皮袋を揺らしてへらへらとしていた小娘を思い出し、キリシュエータは複雑な気持ちになつた。

「まさかファーストキスとかでもあるまいに」

「当然です！ 赤ちゃんの頃から一杯してますからねつ。でも聞いて下さいよ、殿下つ、まだ舌は入れたことがないんですよ。どう思いますか？ 他の誰かにやられるくらいならぼくが自分でしちゃつたほうが安全な気がしませんか？」

「おまえはにんじんに近づくなっ」

「近づきたくても近づけないんですよ。せつだつて、お小遣い渡す時にめぢやくぢや緊張しちゃいました。

ああ、ルディ可愛い。なんであんなに可愛いんでしょ？」

彼の脣にはもう駄目かもしません。

「いいから、休め」

ぽんつと肩を叩いて溜息をついたのは第一隊副隊長サイモン・クロレル そして肩を叩かれたのは、彼の部下の一人であるフィルド・バネットだった。

「最近のお前は疲れているんだ」

「……そんな訳ではありません」

「小さなミスが目立つ。いいから休め」

厳しく言つサイモンに、丁度通りかかった司祭長第一王子殿下リルシェイラは小首をかしげた。

わざわざ夜眠るときに幾つもの三つ編みを作つて眠るというリルシェイラの髪は、王族特有の鮮やかな蜂蜜色の金髪、そしてしつかりと癖のついたウェーブのふわふわだ。

女じやあるまいに、阿呆か。

と、少なからずの人数が思つてゐるのだが、誰一人としてそれを指摘した猛者は今のところ彼の弟であるキリシューターしかいない。

「しかし、休みなど……」

「フィード、じゃあお使い頼んでいい？」

突然の休みを渋るフィルドに、リルシェイラは「町におりてリラ・フィンデルの薔薇菓子を買つてきて」と「コインを数枚フィルドの手に握らせた。

「明日のおやつにするから、明日までね」

「……はあ

何故自分が菓子屋に行かなければいけないのか。

フィルドの心に冷たいものが走ったが、上官達の優しさをおとなしく受け入れることにした。

そう、これは心遣いだ。余計な世話をとしても。

「フィーデってば最近呪われてるんだって？ なんか上からナイフだとか壺だとか降つてくるとか。枕にナイフが刺さつてるとか」

「……壺は無いです」

今のところ上から落ちて来たのはナイフと、水と、斧だ。そして疲弊して眠っていたフィルドが目覚めると、目の前にナイフが刺さつていた。

自分が使っている枕にナイフがずつぶりと。

ざつと頭の中が真っ白になり、慌てて体を起こさうとしたものの反対側にあるのではないかといつ恐怖から、体を起こすのに物凄く神経を使つた。

もし寝ている時に寝返りを打つていたらと思いつと血の気が完全に引いてしまつた。

「エリックとの訓練で危うく肋骨折られそうになつたつて話も聞いたし」

「いや、それ以前に失神させられましたから」「劍技でなくて良かつた。

何故か機嫌のよくない騎士団顧問のエリックに思い切り投げ飛ばされ、背後から羽交い絞めにされて気付けば医療室だった。

骨折れてなくて良かつたなと同僚に言われたが、折れていなかつたのはただの奇跡に違いない。

「祈祷しておいてあげるよ。きっと呪いなんて吹き飛ばせるよ」

善意からではなく、明らかに他人の不幸を楽しんでいる様子のリ

ルディエラに、フィルドは口の端をひくひくと痙攣させながら心にも無い礼を口にした。

「ありがたき幸せに」

死ね、この脳内花畠。

何より、あの筋肉ダルマの騎士団顧問の機嫌が悪かつたのは間が悪かつただけだ。だが、それ以外のことに関するれば思い切り犯人に心当たりがある。

「つ、の、クソガキ！ とつつかまえてやる」

「のところすつと脳内でひょこひょこと踊っている第三騎士隊の見習いを思い浮かべ、フィルドは半眼を伏せて右の拳を握り締めた。

\*\*\*

「へぐしゅつ」

突然鼻がむずむずとうずき、ルディエラは思い切りくしゃみをした。

「つきたねーな。せめて口を塞げよ、阿呆」

「ううう。鼻が突然むずむずしたんですよ。両手は塞がってるし…」

馬の手綱を握っていたルディエラは唇を尖らせて言いながら、ポケットからハンカチを取り出して口もとを拭つた。

丁度目的地の近くに来ていた為に馬の速度を落として助かつた。もし速歩の時に思い切りくしゃみをし、手綱を引いてしまつたら臆病な馬は竿足立て嘶いていたことだらう。

今も馬はびくつと身を一旦固くし、耳をぴくぴくと動かしている。それを首筋を叩くようにして宥めて、ルディエラは肩をくめた。

「あれか？」

隣で艶やかな葦毛を操るベイゼルは、顎先で丘の中腹にぽつりと立つ一軒家を示した。ルディエラはこくりとうなずき、小さく「あ……」とつぶやく。

その視界に、馴染みのものを見つけたのだ。

城下町のかなり外れの方にある鍛冶屋へと馬を速歩で駆けさせ半刻程 まるで訓練かというように並足、速歩を繰り返してやつと辿りついた鍛冶屋の丸太小屋の前で、ルディエラは馴染みの顔を二つ見つけることとなつた。

建物の入り口の右手にある切り株に斧をつきたて、一人の男が談笑をしていたのだ。

楽しそうに笑い声をあげていた一人だが、馬で近づく二人組みの姿にその笑みをとめて視線を向けてくる。

やがて馬上の人物の一人が良く知る相手だと見て取ると、緊張した表情が変わつた。

「ようつ、ルディエ 」

鍛冶屋で見習いをしているグレゴリーは薪割りの斧に寄りかかるようにして軽く手をあげて声を張り上げたのだが、その足を力いつぱい隣にいたセイムに蹴られた。

脛を遠慮なく蹴られたグレゴリーが呻いて身を沈める横で、セイムはわざとらしく口元に手を当てて声をあげる。

「ルディ様！ 若様こんな場所にどうしたんです？」  
訓練ですか？

と、セイムが隣の悶絶男を完全無視で話しかけてくる。

ベイゼルはその男をしつかりと記憶していた。

時折ルディエラの元に荷物を届けに来るルディエラの家の下男。もしくは従僕 そして、ルディエラの幼馴染。

鳶色の瞳と髪の青年は、下男というよりは女衒とかが似合いそうだ。優しい言葉で女を扱い、娼館で売り飛ばす。何故かそんなイメージがベイゼルの脳裏を掠めた。

「セイムつ」

ルディエラは馬が完全に止まるより先に身を起こし、体重を移動させて片足を軸に鎧を蹴った。

ぎょっとするベイゼルの面前で、当人が自慢するその身軽さでたんつと地面に降り立つとそのままの勢いで女衒 ではなく下男に抱きついたのだ。

広げた腕でぎゅっと抱きしめ、元気よく声をあげる様は届託無いといえば届託がないのだが、どうにもあけすけ過ぎる。

「ただいまつ」

「おかえりなさい。ちゃんとお風呂は入つてますか？ 汗臭いですよ。耳の後ろとか洗い残してたりしてませんか？ ブーツはきちんと風に当てないとまたひどいことになりますからね」

しかし、相手の口から出たのは小姑かという内容だった。ぽんぽんつと親しげに背中をたたきながら、ルディエラの幼馴染は矢継ぎ早に小うるさいことを口にし、ちらりとその人懐っこそうな抜け目なさそうな視線をベイゼルへと向けた。

「確か、副長さんですよね？ うちのルディ様がお世話になつてます」

ベイゼルはルディエラの放り出した馬の手綱と自分の馬の手綱を掴みつつ、口の端をあげた。

「本当に。眞面目に感謝してもらいたいわ」

「お前らあああ、人のこと無視して会話すんな、タコ」  
呻くような声をあげたグレゴリーに三人の視線が集まり、ルディエラとセイムはほぼ同時に「あれ、グレゴリーいたの?」とぱつさりと切った。

グレゴリーが顔を顰めるとルディエラは笑い、ベイゼルに視線を向けた。

「副長、コレは鍛冶屋見習いのグレゴリーです。グレゴリー、この人は王宮警護の騎士隊第三隊の副長さんをしている……あれ、副長つてベイゼルつて名前? 姓?」

ベイゼルはぱしんっとルディエラの頭をはたいた。

「ベイゼル・エージだ」

そのままグレゴリーに手を差し出し、軽く握手する。グレゴリーは愛想よくその手を受けてうなずいた。

「グレゴリー、副長に鍛冶屋の中を見せてあげといて。ぼく一回家に戻るから」

「グレゴリー、話してあるよな? うちの若様の上官だからくれぐれもおかしな粗相がないように」

セイムは念を押すように言い、慣れた様子でベイゼルの手からルディエラの馬の手綱を受け取り、

「前、後ろ?」

とルディエラに馬を顎で示した。

「前に決まってる」

「はいはい。じゃ、失礼します」

セイムはぺこりと頭を下げ、手馴れた様子で勢いをつけて馬上に

乗りあがると、片手を示してルティーハラを自分の前に引っ張りあげた。

「 仲が宜しい」って

我知らず冷たい口調になつたことに気付き、ベイゼルは口の中に苦いものを突っ込まれたような気持ちになつた。

今のナシ。  
今のナシ。

今の絶対にナシ！

突然喉の奥でうめき声をあげたベイゼルを見ながら、グレゴリーは田を白黒させて眉を潛めた。

「 具合悪いんですね？」

「 そういうことにしどくてくれ」

そうだ。これはアレだ。

可愛がつていてるペットが、他の人間に尻尾を振るのが面白くない感情だ。

ベイゼルは一度いい例えを発見し安堵するように息をつくと、訝しきに自分を見つめているグレゴリーの存在に少やく呻いた。

なんで残念な人を見るみたいに見てんだよ！

ルディエラの自宅は町から少しばかり離れた森の中にぽつりと立てられた三階建ての邸宅だ。

兄弟達がもつと幼い頃は町の入り口の辺りに暮らしていたのだが、ある事情により人里を離れることとなつた。

鶏並みに早起きの筋肉ダルマエリックが朝一番に大きな声で体操をしたり、子供達を相手に組み手、剣術とはた迷惑な日々を繰り広げた為 つまるところ近所迷惑が主な理由だ。

森を入り、しばらく行くとある湖畔の近くに開けたなだらかな場所に立つ一軒屋。上級貴族の屋敷のように恐ろしい程立派という訳では無いが親子七人とマーティア、セイム、そして年老いたアダンとが暮らすには十分な大きさを持つている。母屋、離れ、馬屋という三つの建物で構成されている家への一本道を馬で駆けて戻れば、玄関口から質素なシャツとエプロンをつけたマーティアがうれしそうに大きく手を振つて出迎えた。

「ルディ様！」

「マーティアつ、ただいまつ」

大きな声で応えたルディエラだったが、マーティアは苦笑を浮かべてぺこりと頭を下げた。

「おつとめご苦労様でした」

「なんか微妙におかしくない、その台詞？」

まるで監獄からでも出てきたかのような気持ちになつたルディエラが口を尖らせると、マーティアが小首をかしげて見せる。

マーティアの面前でセイムは慣れた所作で馬の尻に片手をついて地面におりたつと、ルディエラの為に馬の轡へと手を掛けた。

「まさか、もう逃げ帰つて来た訳ではありませんわよね？」

「こりと微笑むマーティアに顔をしかめ、ルディエラは地面におりたち肩をすくめた。

「違うよ。今日はお休み 昨日がお給料日で、見習いは本当はお手当でもらえないんだけど、隊の人たちからお小遣いを貰つたから持つてきたの。ま、クイン兄さんはいだろうけど」

マーティア預かってくれる？

そう言葉を続けると、マーティアは苦笑した。

「ああ、それでですね」

「うん、それで帰つてきたの」

口元に手を当てたマーティアは、ちらりと衆を見てまたくすぐすと笑う。

「いいえ、わたしがそれでと言いましたのは、クインザム様がいらっしゃるからですわ。ルディ様がお顔を出されると予想していましたのね」

その一言に、ルディエラは思わず口の中で「うげっ」と呻いてしまつた。呻いた理由を察知したセイムが先をよんと笑つてみせる。「安心して下さい。クインザム様はルディ様が騎士団にいらっしゃるのは」理解くださつてますよ。もしかして怒つてらつしゃると思つてたんですか？ あの方が許さずにそれができると思いますか？

「……ま、父様も知つてゐるしね」

「ほそりといい、ルディエラは弾かれたように顔をあげた。

「まさか皆知つてゐる？ ちい兄とか、バゼル兄さんとか？」

「バゼル様はご存知じゃないですよ。ルーク様は……どうでしょ？」

「こちらからは誰も言つてないと思いますけど」

その言葉に安心しつつ、ルディエラは馬をセイムに任せた。セイム

と血汗の玄関をぐぐつた。

すうつと、自宅の空気を一気に肺に入れるとなんとなく泣きたいような気持ちになる。一月以上あけたことなど無かつた自宅。そちらかしこに自分の記憶が落ちていてるような奇妙なものがこみ上げて、ルディエラは一気に廊下を駆け抜け、執務室兼図書室である部屋の扉を勢いよく開けば、本棚に向かい本を空いている場に納めていたクインザムはゆっくりと振り返つて微笑んだ。

「廊下を走つてはいけないといつも言つてゐるだろ?」

「もあつ、久しづりに顔をあわせた一言めがそれなの?」

不満に唇を尖らせたルディエラに、クインザムは淡々と手にある本を片付け、それが終わると両手を広げた。

「おいで」

「

すねた顔で突つ立つたままのルディエラに、クインザムが唇の端を持ち上げる。そんな顔をするとクインザムはティナンによく似ていて、ルディエラは途端に眦に涙が盛り上がり、喉から競りあがるものに小さな嗚咽を漏らした。

親でも兄でもない。ティナンはそう言つた。

でもそれは、それは……

「兄、わまつ」

「うん?」

「ぼく、ぼくわあ がんばつてゐよ」

「判つてゐるよ」

「ぼく、ぼく……」

今は、ルディエラでいいよね?

小さく呟いた途端、ルディエラはクインザムに抱きつき、その胸に

顔をつづめて叫ぶように泣いた。

\* \* \*

「申し訳ありません。午前中の分はもう売り切れです」

「三十分近く女子供に混じって恥ずかしげもなく並ばされた挙句、面前で売り切れを宣言されたフィルド・バネットは口元を引きつらせた。

絶対にありえない」と思いつつも、コレもある糞ガキ ルディ・アイギルの陰謀ではないかと思つた程だ。

当人が聞いたら「ふざけるな」と怒鳴られるだろうが、半ば本気でフィルドはその怒りすらルディエラに投げつけた。

毎日のように夢の中に現れ、飘々と踊りながら自分を馬鹿にしているルディ・アイギル。もう幾度自分の脳内でぎつたんぎつたんに叩きのめしてやつたことだろう。時折自分の考えが夢であるのか現実であるのか判らなくなつてしまつ程だ。

「本当に申し訳ありません。午後にまた販売いたしますからその時にいらして下さい」

「予約は？」

「申し訳をおさえて言えば、店員は困惑の眼差しを向けてくる。

「申し訳ありません。人気商品ですので」

予約は受け付けていないのだと暗に言われ、フィルドは「第一王子殿下が御所望なのだ」と怒鳴つてしまいそうになつた。

そんなことを言ってリルシェイラの名聲を落とす訳にはいかない。何より、現在のフィルドの格好ときたら騎士隊の制服ではなく、私服だ。

先ほど散髪をすませた短い黒髪をかきあげ、嘆息を一つして「判

つた。何時【じ】に来ればいい?』と店の人間に確認を済ませた。身分を証明する為の騎士団印の指輪は身につけているが、そんなものを恥ずかしげもなく出せるはずも無い。

何より、出したあげくに「で?」などと言われたらい田も当てられない。

世の中には誰にも屈することの無い一般人、居酒屋【アビオン】の絶叫【】の店主のような男もいる。噂によれば、店主であるド・ラッケン・ファウブロウは第三王子殿下【】であるともシケを認めない。

あつさりと午後にまた菓子屋に来店することを決め、フィルドはその足で城下町のはずれにある鍛冶屋へと足を向けることにしたのが、それは間違いだつた。

騎士団顧問のエリックが使つてているといつ噂のある鍛冶屋は、町からは幾分離れているが、馬で飛ばして行つて帰つてすれば丁度良い頃合に菓子屋に戻ることができるだろうといつ軽い気持ちで足を伸ばしたのだ。

たまには思い切り愛馬を駆けさせたいと一気にムチをいれて街道を駆け抜け、人の噂をたよりに訪れた開けた丘の上の軒屋。

「あ、ここにちはー」

鍛冶屋の小屋の入り口、馬の手綱を結わえようと木の枝に綱を引っ掛けていると、決して忘れることなどできないオレンジ頭の糞ガキが反対側から手を伸ばし、まるで邪氣もなく微笑んだ。

「

「ほくも馬を繋ぎたいんだけど、あの、あれ？ ほくの顔に何がついてます？」

毎日夢にまで見る相手だ。

不用意なその一言で男好きだとかいう汚名まで着せられ、第一隊の副長と隊長にまで苦言を向けられ、第三王子殿下キリシュエータにまでおかしなことを言われる始末。

日々憎しみを募らせている相手だ。

決して間違つたりしない。

フィルドは口の端がひくひくと痙攣するのを感じた。

「あれ？ もしかして、どつかで会つたことがあります？」

まさか本気で言つてはいる訳じゃないだろうな？

フィルドは睡然と少しだけ田元を赤くした、一見無邪気なルーティ・アイギルを見下ろしてしまつた。

これもこいつの罠か！？

……いいえ、ただの阿呆な子です。



ぴしりと何かにヒビが入る音を確かに聞いた。

面前には自分が嫌っている というか、もつむしろ憎んでいる相手だ。

その日に当たつてきらきらと輝くオレンジ色の髪も、灰青の瞳も、決して見誤つたりしない自信がある。

夢の中にさえ現れ、それはそれは小生意気な調子で小躍りし、噂話が偶然にも耳はいれば憎しみで体温が力つとあがる程の相手だ。

「んー？」

だといふのに、その問題の糞ガキ、ルディ・アイギルは本当に不思議そうに自分を見上げ、やがてぎゅっと眉間に皺を寄せていたが、相当苦労して理解したといつぱんと手を打つた。

「第一隊の変態」

「誰がだつ！」

わざとか？ わざとだらう？

思い切りその襟首を締め上げてやろうと手を伸ばすと、小生意気なサルはひょいと身を交わして剣呑な眼差しで睨みつけてきた。灰青の色素の薄かつた瞳がその色合いを濃くし、まるで悪戯でもするかのように鼻先で笑う。

腹立たしいことに面前で見る糞ガキときたら、記憶を更に塗り替える程の美少年で腹立たしい。聖歌隊で女のような高音で歌つていろと殴りたい程だ。

「何するんですか。またおかしなことあるつもりですか？」

「誰がキスなんてするか？」

「誰がキスなんて言つたんですか。そんなことばつか考へてるんですか？」あー、やだやだ変態っ

「ぶ・ち・殺す！」

思わずフィルドは自分の腰に手を回し、そこにある箒の細剣を求めたが、勤務外でそんなものを引き抜いたら問題になると頭の中の冷静な部分が訴える。

いやしかし、こんな辺鄙な場で何があろうと証拠など　とまで考えはじめてしまったフィルドの耳に、暢氣そつな「うるせーぞ」　という声が割つて入り、慌てて視線を向ければ第三隊の副長ベイゼル・ホージが件の鍛冶屋から顔を出し、片眉を跳ね上げた。

チッと我知らず舌打ちが漏れた。

品行方正と言われる第二隊としては激しくまずい。だが、このルティ・アイギルを面前にして冷静にしてなどいられない。

目撃者がいては報復活動に支障がある。いや、しかしこそ思い切つて証人になつてもらつても構わない。

フィルドがそう思つてゐるのに反し、しげしげとベイゼルはフィルドを眺め、ニヤリと口の端をあげた。

「お前か、フォード・バネット」

「フィルド・バネットです」

「いつらは人をおちよくつてゐるんじゃないだらうな？」

フィルドがぐつと拳を握り締めるのとは正反対に、ベイゼルはのんびりとした様子で近づいてニヤニヤと笑つてみせる。

「何を揉めてるかと思えば、またお前らか。今度は何よ?」  
はつきりと面白がっているベイゼルに何か言つてやるひと口を開きかけたが、それより先にオレンジ頭がひょこりと動いた。

「どうでもいいですよ。副長、鍛冶屋はもうこいんですか? いいんならわつねと町に戻りましょつよ。ぼく皆のお土産買わないとつ。といひおきのお店があるんですよ。」

ルティーホラはふんつと鼻を鳴らし、自分の馬の手綱を引き、その視線を鍛冶屋の入り口でのんびりとこちらの様子を伺つて、いる男に声をかけた。

「副長の馬とつてきてよ、グレゴリー」

「おう そつちの人はお密さんかな? 中にどひづか。そいつの相手してつと色々疲れますぜ」

さも愉快そうに肩を揺らし、馬屋へと向かう男に気を取られていふと、ベイゼルがフィルドの肩をぽんぽんつと親しげにたたいた。

「グレゴリーの言つ通りだ。このぼけなすに付き合つていいことなんて無いぞ? イノシシに当て逃げされたとでも思つて忘れりよ」

「ちよつ、何ですかそれ。ぼくが加害者みたいに」

唇を尖らせるルティを睨みつけ、フィルドはそれでも冷静さを装つた。

「すみませんが、アイギルと少し話しがしたいんですけど

少なくとも、闇討ちのような真似についてはきつちりと話をつけない訳にはいかない。それでも文句があるのであれば正々堂々と決闘なりなんなりで決着をつけるべきだ。

きつい眼差しで言うフィルドの前で、ベイゼルは自分の黒髪をか

きあげ、好戦的な顔をしているルティエラと、そして無理やり冷静さを装うフィルドとを見比べて肩をすくめた。

「だめだ」

「エージ副長」

「あんな、さつきも言つたようにイノシシでも逃げられたと思つて忘れる」

やうれつぱなしでなぞいられる訳がない。

憤りを見せるフィルドに、ベイゼルは腹に溜まつた酸素を一気に吐き出すように深く、ふかーく吐き出し、指先をちよこちよこと動かしてルティエラに命じた。

「アイギル、お前が馬とつてここ」

「えーっ」

「行け。行つて来い。まうっ」

しつしつと犬でも追い払つように手を振り、ベイゼルは更に溜息を一つ落としてルティエラがしぶしぶ鍛冶屋の裏手に行くのを見送り、がしりとフィルドの肩に手を回して顔を近づけた。

「あんな、あいつはもうお前のことなんてちうとも気に掛けて無かつたんだよ。あいつの中じや終わつてるんだ。ちよつかい出すな」「そんなの信じられると思こますか？ 私がこの数日どんな目にあつているか」

おかげで立派な睡眠不足。

仕事中に小さなミスまで連発させてしまい、拳銃こうじて無理やり休暇をとらされてリルショイクの為の菓子など買つに行かされる始末。

あれもこれも、昨日が雨だったことも、今日が晴天であることも

全てあの糞ガキのせいだ。

フィールドの中ではすっかり悪といえ巴ルティ・アイギルの方程式ができあがっていた。

「あー、それなー……予想はつくんだがなんかナイフが降ってきたとかって話だよな？」

剣呑な雰囲気をかもしているフィールドの肩にぐいっとたれるようにして、ベイゼルは肩をすくめて、はははっと乾いた笑いを落として更に嘆息した。

「誓つて言うが、あいつじゃない」

「じゃあ誰がそんな真似をすると叫うんですか」

ベイゼルはがりがりと自分の頭を引っかき、逡巡しながら呻いた。

「……誰かは詳しいえない。というか言いたくない」

自分の隊の隊長だとは口が裂けても言えない。

情けなくて。

「とにかく、あー……ある人物がな、めぢやくぢやアレを溺愛してるんだよ」

「は？」

「だからあのボケを、めぢやくぢや可愛がってる人間がいてだな、うん。つまり、お前は口止めだか何か知らんがあいつにキスしちまつた訳だろ？」

めつちや怒ってるんだよ、これが。

ベイゼルは自分で言いながら嫌気が差した様子で、がしがしと自分の頭をかき混ぜ、だあつと叫び、フィールドから身を引き離すとその指でフィールドの胸をついた。

「俺からももうそんな真似はするなって言つてやるから。とにかく、もう忘れなさいよ」

「そんな訳にいまさか、殿下が？」

ベイゼルが口を濁す相手、しかも問題の田に居酒屋【アビオン】の絶叫【】で事を収めたのはキリシュエータであることを思い出し、フィルドはすっと責めた。

しかも、キリシュエータはあの時「闘討ちにあつても知らぬフリをするからな」とまで言っていた。まさか第三王子殿下が男好きの上に妙な嫉妬心をおこして？ めまぐるしく恐ろしこ考へがフィルドの脳裏を駆け巡ったが、それに気付いたベイゼルは慌てて打ち消した。

「ちげえよ？ おい？ まつたく全然違うからな？ もお、いくらなんでもそれは不敬罪で偉いことになるだ？」

「……いや、はい。そうですよね」

さすがに恐ろじすぎる考へを否定され、フィルドは思わず胸元に手を当てて息をついた。

自分の主であるリルシュエイラもほつきつておかしな相手だが、その弟殿下がアレな趣味の持ち主などとイヤ過ぎる。

「とにかく。アレに関わるところなことにならないから。お前の矜持とか色々と思うところもあるだろ？ が、ここは俺に免じてこの間のことは水に流してくれよ。その、ナイフとかのヤツもなんとかするからさ」

苦々しい顔で言つベイゼルの様子に、フィルドは奥歯を噛み締め不承不承うなずいた。

他隊の副隊長にそこまで言わわれては流石に拳を下ろせまいはいられない。

腹の底で色々と思うことがあつたとしても、だ。

「で、だ。あればガキで馬鹿だから俺がお前に謝れと言つたところ

で意固地になるだけだ。悪いが、お前から恭みよつてもうらえるか？

「……無理です」

何故自分がそこまで我慢しなければいけないのか納得できない。

「かあああつ」

ベイゼルは奇妙な声をあげ、フィルドの胸に指を突きつけた。

「俺は、わりと面倒くさがりだ。他人なんぞどうでもいい。その俺が、お前の為を思つて言つてやつてるんだ。ここは素直に受けろ」

その台詞のどこを信じりと云うのか。

明らかに可愛がつてゐる部下の為だらうに。まさか、あの糞ガキを溺愛している阿呆野郎はおまえではないだらうな。

と、フィルドは思わず下衆な勘ぐりまでしてしまつたが、ベイゼル・ヒージの女好きは有名だった。

ことに女性らしい女性といふことで、警備隊の事務官に言ひ寄つてゐるといふのも知つてゐる。

苦痛を堪えるよつに奥歯を噛み締め、フィルドは不承不承つた。

いた。

「副長！ 早く町に戻らないとつ」

ベイゼルの馬を引いて戻つたルディエラに、ベイゼルはフィルドの肩を親しげに叩きながら応じた。

「おうつ。悪いな それと、フォードがお前に話があるつてよ

フィルドだ。人の名前を間違えるんじやない。

内心で苛立ちを抱えながら、フィルドはルディエラを見下ろした。にんじんのような色合いの髪に、灰青の瞳が今は太陽の光をうけて透明な色合いを浮かべている。

まさに胡散臭そうなものを見るよつ。

屈辱を覚えたが、ぐつと堪えて手を差し出した。

「悪かった」

何に対する謝罪かは言わなかつた。言つ必要もないだろ。むしろその後の騒動を引き起こしたことを謝つて欲しいというのだ。

何故こんなことになるのか。

フィルドの内心など知らぬ氣に、ルディエラは瞳を瞬いた。また何か嫌味が来るかと思ったが、小生意氣な糞餓鬼は驚く程やわな手でぎゅっとフィルドの手を握り返し、子供のように無邪気に笑つた。

警戒心をふわっと解いて、男と理解していくも一瞬ビキリとせられたる愛らしさの笑み。

「ぼくもなんか色々とオトナゲなかつたです。」めんない

なんだろう、そういうわれると「ちりがそれを更に上回る程に物凄く大人氣ない氣がするのは。

激しくイラッとさせられる台詞のように思つのは氣のせいか。いや、氣のせいではないだろ。その証拠のように、無理やり親しげな雰囲気を出す為にフィルドの肩に手を掛けっていたベイゼルが、慌てたようにルディエラの肩に手を回していくとその向きを変えた。

「アイギルつ、急いで町に戻らな」といけないんだよな？ 特別な土産とやらを買つんだろ？

ほら行くぞつ。じゃあなフォード

そそくせと逃げるようにまたしても名前を言い間違えるベイゼル。

「副長つてば、フィルドさんですよ」

きつちりとベイゼルに訂正を入れ、ルディエラはペニンとフィルドに一旦頭をさげて血ちの馬の手綱を引いた。

ルディ・アイギルはやけに晴れ晴れとしているが……

和解か……今のは和解なのだろうか。

納得のいかないシコリを残したが、それでも自分をなんとか誤魔化そうと思つたフィルドだったが

町に戻ると決して誤魔化せない現実だけが残つた。

＊＊＊

「売り切れです」

「……」

「申し訳ありません。大口のお客様がいらっしゃいまして 午後の分は思いのほか早く売り切れてしましました。またのお越しをお待ちしております」

リルシェイラに頼まれたリラ・ファンデルの薔薇菓子を買い占めたのがルディ・アイギルだと知るのは、一刻後のことである。

「兄さま、大好き！」

彼の妹、ルディエラの「大好き」は一山幾らで売られている激安販売だ。

二束三文という言葉を使ってもいいくらいに安すぎて、誰にでも垂れ流し。

それでもあの大きな灰青の透明な瞳をきらきらとさせて「兄さま大好き」と嬉しそうに言われると、世界で一番すばらしい「大好き」を与えられたような気になる。

男四人兄弟の中に突然できた妹は、はじめから誰からも愛された訳では無い。

末のルークなどは色々と思うところもあつたろう。それまで末子として可愛がられていた自分の地位を脅かし、母の愛情をまた削られたと思ったかもしれない。それとも母親のちょっとおかしな愛情が少しは離れるやもと喜んだか。元々ルークは感情の動きが弱いのであまり判らない。

三男であるティナンにしてみれば、敬愛する長兄が突然子煩惱な父親のようになつたのだから、正直面食らつたものだし、そんなある意味情けない兄 父の変わりに執務をこなすその膝の上に赤ん坊をのせ、仕事の合間にむつきを変えるという暴挙 を見るのは嫌なものだった。

その、ある意味目の上のたんこぶのような妹がいつの間にか言葉を操り、舌足らずに「にーちゃん……にー、たま？」と見上げて来た時、ティナンは自分の中で何かがぞわぞわと蠢くのを感じた。それは心地の良いものではなくて、なんだか体の内面から痒いような奇

妙なものだ。

不快であったかもしぬないが、足元にいるソレにとりあえず手を伸ばしてみようとしたら、長兄がひょいと持ち上げた。

「お兄ちゃんの勉強の邪魔はしてはいけないよ、ルティ」「くいん、なーして」

舌足らずの甲高い声が放してと訴える。

「だあめ。いい子にしておいで」

小さな妹はじたばたと暴れ、その手を伸ばしてティナンにせがんだ。

大きな灰青の瞳を潤ませて。

「にーたま、たーけて」

咄嗟に「兄さん、少しの間くらいぼくがみてあげるよ」と喉の奥でからむような言葉を出し、兄の手からルティエラを奪えば、小さな小さな妹は、田じりに涙粒を湛えてはじめて満面の笑みで言った。

「にーたま、だーすわ」

その言葉はティナンの中に何かを産み落とす程にすばらしいものだつたといつのに 気付けばルティエラの「大好き」は激安品となつていた。

「ぼく副長大好きですよー」

食堂で暢気に言つるティエラの言葉に、ベイゼルが「うつせーよ」と言つていたのは昨日のことだ。通りすがりにベイゼルの足を踏みつけにしてやつたのはいつまでもない。

今更ルティエラの激安販売」ときで腹をたてたりはしないが、それに対して「うつせーよ」などとは無礼千万。許しがたし。

一束三文でも何でもいい。

ルディエラに「大好き」と言われて、ぎゅっと抱きつかれたい。癒し成分が欠乏している。

「……これでは欲求不満みたいじゃないか」

純粋な兄妹愛によこしまなものはありません といつティナンの訴えを、最近第三王子殿下キリシュエータは信じてくれない。

＊＊＊

世話をしてくれる従卒が起床时刻を告げに来るまでもなく、ティナンは隊舎にある一人部屋で身支度を済ませ、紅茶を持参した従卒に穏やかな微笑で応えた。

「おはようございます」

「おはよう」

自らの指揮する第三隊の人間には鬼隊長として知られているが、ティナンは従卒や女性には人気が高く、貴婦人達の間ではその身分は低くとも有望な婿として目されていた。なんといっても貴族の子弟という訳ではないが、第三王子殿下キリシュエータの良き友人であり右腕 やがては騎士以外の序爵も目されていた為だ。

「お手紙が届いております」

従卒は恭しく銀のトレイに手紙を載せて示し、ティナンはそれを受け取ると彼にもう下がるようになると告げた。

手紙は六通。決して少なくともないが、多いという訳でもない。たいていが何かの催しものの招待であったり、時には地方砦からの報告であることもある。

一通づつ封筒を確かめ、ティナンは一通目の手紙に押された蠅封の印章に低く呻き、そそくさとそれを後に回した。

一通目は第一隊の隊長からの第一王子殿下リルシェイラの外遊の為に相談したいことがあるという打診。一通目は古い友人からの私信。他の手紙も当たり障りも無くそんな調子のものだ。

そして、最後に回した手紙は　彼の敬愛すべき長兄からのものだつた。

「……」

イヤな予感しかしない。

咄嗟に火にくべてしまいたいような衝動にかられるが、ここで燃やしてしまえば無かつたことになりせずに、延々と手紙を送りつけられそうな気がする。実際に手紙を燃やして隠滅させたこともなく、兄がしつこく手紙を送り続けた事実も無いのだが、なんとなく長兄ならばネチネチといつまでもそんなことをする気がするから不思議だ。

「兄さん性格悪いから」

ぼそりと自分のことは棚上げにして言い、ティナンは不承不承着用している騎士服の腕部分に隠されている刃渡りの短いナイフを引き出し、蠅封をぺしりとはがした。

ふわりと花の香りが鼻腔をくすぐる。なんというか長兄は芸が細かい。

ティナンは胃の辺りが傷む気がしながら、中から手紙を引き出した。

＊＊＊

「では、第一隊から三名。第二隊から三分の一の人数を出して外遊

の警備に」

第一王子殿下の外遊 隣国に出向いて季節の挨拶をするといつ、まさにただの儀礼的なその行事の為に人数を選別しながら、ティナンは第三隊と第二隊の人間がただひたすら馬柵の中を走っている様子を窓から眺めた。

本日は第一隊と第三隊の合同訓練だが、命令自体は単純なものだ。

倒れるまで走れ。

他隊の人間に負けたら追加訓練。

「残りの隊員はその間第三隊で面倒を見ますよ

「頼むよ」

第一隊の隊長であるアラスターが息をつくと、ティナンは淡い微笑を浮かべた。

「そうだ。フィルド・バネットは連れて行くつもりですか？」

「ああ あいつはそっちと揉めたからな。残して行くつもりは…」

… 残して行くつもりは無いと書類を軽く叩いたが、ティナンはあえてそれをさえぎった。

「彼は残して行って下さい。いつまでもおかしな火種を残している訳にはいかない。来月には問題のアイギルもそちらの世話になることは報告がいつておりますよね？ この間にしこりはなくしてしまつた方がいいでしょう」

にっこりと微笑を浮かべるティナンに、アラスターは大きくうなずいた。

「確かにその通りだ。第三隊には迷惑を掛けるが、ではフィルドともどもよろしく頼む」

相手の眼差しは「若いのにしつかりとしている」とティナンを穏やかに賞賛しているが、当然のようにティナンの心内ときたら称賛されるようなことは考えていなかった。

自分の監督下でまさにやりたい放題。

今までのようひりそり水をぶちかれるとか、通りすがりにナイフを投げつけるとかいじましいくらいせせこましい嫌がらせではない。正々堂々と卑怯な手段を講じて愛しい妹を辱めてくれたお礼を思う存分できるのだ。

たとえ何があつたとしても「訓練が少しきすぎた」だけだ。今まで訓練中に足や腕を折つてしまつたり、内臓がちよつぴり傷ついてしまつたという不慮の事故があつたものだが、それと何等かわらない。

ティナンは口元が緩みそうになるのを堪えつつ、相手からの職務上の相談事を適當な相槌でいなした。

もしかしたら流れ弾に当たつてしまつたり、馬の後ろ足で蹴られてしまふこともあるかもしねいが、訓練上の不慮の事故であれば想定外で仕方あるまい。むしろ訓練中であれば労災くらいもぎ取つてやつてもいい。

自分はなんと優しいことだらう。

「そういえば、来月うちの隊に来るという見習いの状態はどうだ？」

フィルドと揉めたのがそれなんだよな？」

ふいに話題をかえられ、ティナンは一拍息をつめ、ふつと皮肉な笑みを浮かべてみせた。

「殿下の醉狂にも困つたものです。騎士にするなどおこがましい訓練の邪魔ですよ」

「そうなのか？」

アラスターが眉を跳ね上げ、肩をすくめる。

そのまま眼差しを窓の外へと向け、馬柵の中を走つてゐる自らの部下達を眺めた。

「とにかく。ぼくはこんな」と皿体反対なんですよ」

「噂通りだな」

くくつと喉の奥を鳴らし、相手は楽しそうにティナンを見返した。

「噂?」

「第三隊の隊長殿は、異例の人事で入隊した騎士見習いをこのほか毛嫌いして虐め倒しているって言われているぞ。あまりいい話じゃないな」

その言葉の中に咎める響きを感じ取り、ティナンは冷ややかな眼差しを向けた。

「客観的に見ても今回のお遊びにはうんざりとしているだけです」「私は正当な目でもって相手を評価するつもりだ。突然の人事だとかは関係が無い。キリシュエータ殿下がおっしゃる通り、訓練への参加状態、態度、適正。全てでもって判断を下す」

きつぱりと言い切り、その眼差しは馬柵の中、一定の速度できつぱりと走りこんでいるオレンジ頭を眺めた。

「第三隊騎士団隊長　　できれば、失望させないで欲しい」

その真摯な言葉に、ティナンは唇を引き結んだ。

「　　アイギルを知れば、あなたもぼくと同じ決断を下すでしよう

淡々と告げるティナンを、片眉を跳ね上げて眺めたアラスターはこつそりと苦笑し、第三隊の生真面目な隊長殿がそこまで突っぱねる理由は何なのだろうかと思いを馳せたが、

あんなに可愛いぼくのルディを軍属なんて絶対にイヤだ！

程度しかその男の頭の中には入っていないので、実際は考えるだけ無駄だった。

倒れるまで走れ。

他隊の人間に負けたら追加訓練。

そう命じつけられた第三騎士団の面子には余裕があった。

「なんだよお、今日走るヤツは羨ましいぜ。俺なんか審判役で走らないからな。もつたいねえ。言つまでもなくケツは確定してるのでなつ」

と、ベイゼルはにまにまといやな笑いを浮かべ、周りの隊員達と田を見合わせあう。見習い隊員ルディエラは「そ、うなんですか?」と首をかしげ、ついでその意味を理解すると逆上した。

「馬鹿にしないで下さい！ ぼくだつて少しは体力ついたし、そ、うそつぱりになつたりしませんからね！」

「うなつては自分の隊の人間は決して信用できない。

ルディエラはやけに余裕をかましている第三隊の人間達を見返すべく、以前のようにペース配分も視野に入れて馬柵で囲われている、本来であれば馬を走らせる為のトラック内を一人黙々と走っていた。

「副長一人は走らないのか？」

通りかかったキリシュエータが審判役としてスタート地点で立つている一人に声を掛けると、ベイゼルは肩をすくめ、第一隊の副長であるクロレルは苦笑した。

「片方は走ろうとしたんですけど 腕相撲で決めた審判役がエーゼに決まった途端、第三隊の見習いが意義を申し立てまして」

「俺は信用できないそつすよ

「ということで、一人で審判です」

肩をすくめる相手に、キリシュエータは顔をしかめた。

「それで、今のところはどうなってる?」「均衡を保つてますが、この先どうなるか」

隊員達も馬鹿ではない。倒れるまで走れなどといわれたところで、正直にぶつ倒れるまで走り続けることはしない。周りを見てどれだけ走らざにいられるかを考え抜く 悪く言えば、どれだけ手を抜きつつ、決して最後にはならないようにする訓練と化していた。ベイゼルは馬柵にぎしづと体をもたれさせ、にまにまと口元をゆがめた。

「あとは、頭脳戦ですよ」

\*\*\*

ティナンは書記官が作成した書類を丁寧に検分し、サインをし、滲まないよう吸い取り紙で抑えると、微笑んだ。

「では、こちらの書類はキリシュートータ殿下の執務官に届けておいて下さい」

「かしこまりました」

従卒の世話係が勢いよく応えて礼をとり出て行くのを眺め、窓辺で第一隊と第三隊の合同訓練を眺めているアラスターに声を掛けた。「どうです?」

「少しづつ動きが出だしたな。良くも悪くもおまえのところの見習いがペースメーカーになつている」

どちらかと言えば褒めるような口調の言葉に、ティナンは半眼を伏せた。

「あの子は、第三隊よつづけのほうがよせやつだ」

「どういう意味です?」

アラスターは腕を組み、窓枠に寄りかかるよつづけしてくつと喉の

奥を鳴らした。その眼差しが面白がるようにな細まり、目じりに小じわが刻まれる。ティナンより十程も年齢の高いアラスターは、まるで息子でも見るような眼差しでティナンを見るから、ティナンは居心地の悪さに身じろぎした。

「あの子はアレで根が真面目過ぎるんじゃないかな？」言われたことをそのままにやうとう姿勢があるんじゃないかな？ どうしてアレをベイゼルの下につけた？ むしろおまえ自身が面倒を見るべきだったろう」「アリビア

アラスターの疑問に、ティナンは冷笑を返した。

「確かに、ぼくは間違えました。ルディ・アイギルの面倒はぼくがみるべきだった」

「そうすれば、今頃は尻尾を巻いて実家に帰っていたろうに嫌悪するかのような口調で言い、ティナンは冷笑を湛えた。

ルディ・アイギルは騎士団員としての能力は決して高くない。とつえといえば身軽さと真面目さ。訓練を怠けたりはせずに実直過ぎるほどに他の隊員達に喰らいついていく。毎日毎日あきれる程にぼろぼろになつて、それを見続けるのはティナンにとって相当きつい。

「アラスター」

絶句しつつティナンを見ていた第一隊隊長に、ティナンは真摯な眼差しを向けた。

「あなたにも、ルディ・アイギルの騎士団本入隊を拒否してもらいたい」

それは保険。

キリシュエータは二ヶ月見習いとして過ごした後に騎士隊長の全員の了解を得て騎士に序すると言つていたが、あの時と今とでは少しばかり違つている。

自分が反対したとして、他の隊長が許可したといつことで他隊に配属させると言い出さないとも限らない。

「騎士団第二隊騎士団長！ おまえは自分が何を言っているのか判つていいのか？」

窓枠に預けていたからだを起こし、体に怒りすら滲ませたアラスターは珍しく声を荒げた。

「隊長としての資質に關わるだ！」

「どうとでも。何度も言いましょう ルディ・アイギルは騎士団に入隊させる訳にはいきません」

ティナンはふとその冷たい表情に陰りを浮かべ、相手の激昂を流すように視線を伏せた。

吐息とともに口が開き、閉ざされる。

幾度かの迷いを見せて、ティナンはそれまでのきつい眼差しではなく、迷い子のような切なげな眼差しを憤りを見せてアラスターへと向けた。

兄でも妹でもないと言つたのは自分だ。

ここで妹なのだと告白することはできかねて、ティナンは振り払つようになその瞳に力を込めた。

「アラスター。ここでこう言つるのは卑怯かもしませんが 以前、貴方はぼくに言つて下さいましたね。父エリックに命を救われたことがある。息子であるぼくに困つたことがあれば何でも言えと」

「ティナン、それを盾にこの私に信念を曲げろとか言つつもりか？」更に怒りを膨らませる相手に、ティナンはゆっくりと首を振つた。

「賭けをしましょ。

ルディ・アイギルが貴方の隊員に勝てるようであれば、あなたは貴方の信念のままにあの子を貴方の天秤に掛けるとい。騎士団に残すも、弾くも貴方の意思で」

ティナンはその視線を窓の外

第一隊と第三隊の人間が走り続

けている馬柵へと向けた。

「ですが、もし貴方の隊員に負けるようであれば。  
もともとが足手まといでしかないのだから。

騎士団には不要だと思いませんか？」

\*\*\*

「おめえらちやんと水は飲めよつよつ

と、ベイゼルが口元に手を当てて時折怒鳴つてゐる。

前方の方、柵にぶらさげた皮の水袋をちらりと眺め、ルディエラは自分が何週走つたか考え、苛々を募らせた。

確實に他の隊員が自分よりも一周多く、もしくは一周少なく走つてゐるのを感じる。虎視眈々とルディエラの速度や様子を考え、できるだけ樂をしようという魂胆が丸見えだ。このままでいいけない。そして絶対にこのまま馬鹿にされたまま終わらない。

ルディエラは皮袋の手前からゅつくりと速度を落とし、皮袋の前で足踏みをして極力ゆつくりとした速度で水を口に含んだ。

皮の味のする生ぬるい水は決して美味くはない筈だが、疲れた体には存分に染み渡る。ルディエラはシャツをたくし上げ、自分の手首の辺りをぺろりと舐めた。

塩気が舌先を刺激する。

水分補給と塩分補給は必須だ。

自分の体から精製された塩……どんな時でも生き残る精神を教えてくれたのは父エリックだが、エリックが自分の腕を舐めているのを想像すると、父大好きなルディエラでもちょっとびり微妙だ。

「せんぱーい、水飲んだほうがいいですよ」

そしてルディエラは自分の腕をにやにやと通り過ぎようとする男達

を片つ端から引つかみ、そのペースを乱して水袋を押し付けた。

「うわ！」

と声をあげて人々良を踏む男ににっこりと水袋を差し出し「はー！」と微笑んで見せる。

そつしている時も自分の足はしっかりと足踏みをし、一定のペースを保っているが、相手は突然ペースを乱された為に一気にぶわりと汗を噴出した。

「おまえっ！」

「水飲まないと倒れちゃいますからねっ！」

言いながら、自分はひらひらと手を振つてその場を離れようとしたが、丁度その時通りかかった第一隊のフィルド・バネットの存在に瞳をさらにきらきらと輝かせた。

「フィルドさんめっけ」

思わずペースを乱して思い切り速度をあげたフィルドは、忽々しい子猿の存在に「今度は何の罠だ！」と内心でののしり声を上げたが、それは珍しく 正解だった。

「脱落五名追加！」

軽快な口調で言いながら、ベイゼルは息を乱してトラック上でのたつている人間達を馬柵の外に引きずりだし、クロレルが嘆息つきで脱落者の名を質の悪い紙に書き記していく。

「絶対にケツはアイギルだと思ったのに」

ぶつぶつと口の中で文句を垂れ流しているのは、訓練がはじまる前に同じ隊内で簡単な賭けをしてしまった為だ。

ルディエラが一番はじめに脱落すると踏んでいたベイゼルは、銀貨一枚を失つてしまつたことになる。

「見習いは粘りますね」

クロレルの言葉に、まるで自らが褒められたかのように第三王子殿下キリシュエータは瞳を細めて笑みをこぼした。

「にんじんは負けず嫌いだからな」

「こういう時は新入りらしく先輩をたてるもんでしょう」

それでもつてアイギルのビリに賭けていた俺をたてやがれ。相変わらずベイゼルがぶつぶつと口を尖らせるが、ベイゼルがルディエラのビリを願つたからこそ、負けず嫌いが暴走しているともいえる。

「それにあのボケカス、嬉々として他の人間の足を引っ張つてる。チーム戦に向きやしない」

「元々これはチーム戦じゃない。個人戦だろうに」

「相手のペースを乱したり、相手が自分を追い抜こうとするのを邪魔したり。相当性格悪いですよ」

あの根性悪！

と、上官達が馬柵に寄りかかって面白い見世物よろしく眺めるのを尻目に、ルディエラは一定のペースを崩すことなく「どれだけ他の人間を早く脱落させるか」という悪魔の所業に白熱していた。

延々と同じ場所を走らされていたのは第一隊、第三隊総勢にして七十名足らずだったが、走り込みも気付けば終盤。その人数はすでに二十名を切っている。

この辺りまでくればいつ倒れてもおかしくないくらいに全員が疲弊しているし、おかしな工作活動をしているルディエラに対しても全員が警戒をしている。

別に最後の一人を目指している訳では無いルディエラだったが、とりあえず第一隊のフィールドよりは多く走りぬきたいという野望があつた。

和解も済ませて最近ちょっとぴり仲良くやっているが、当然当人だけの思い込みだが、第一隊で知っている唯一の人とこのこともあってルディエラはフィールドを迷惑にも勝手に目標にすえていた。

「ぼくより三周早い。

それがまた闘争心をかきたてる。

三周。

他の人間にちよつかいをかけていた為に明らかに遅れてしまった。この三周をなんとか覆す為にはいつたいどうすればいいだろうか。姿を見るたびにどうにか邪魔してやろうと画策したのだが、フィルドときたらまるで「化け物」でも見たかのように逃げていくので、逆に間をあけられてしまったと気付かない残念なルディエラは、正攻法で走っていたほうが自分の体力も削られなかつたことにも当然気付いていない。

＊＊＊

苦い気持ちが腹部にたまり、その表情は冷たさに磨きをかけた。勝てる賭けだつた筈だというのに、ティナンの田論見はあつけなく覆されてしまったのだ。

ティナンヒアラスターどが話し合いをしている間に行われていた第一隊、第三隊合同訓練にて、ティナンはルディエラが第一隊の人間より早く脱落するか、もしくは終了の合図まで走りきつたとしても、第一隊の人間より遅れて終着すると思っていた。

彼の妹は女性としてみれば身体能力は高い部類になるだろうが、男達の中で平均値を上回るものでは無い、何より慣れない走りこみに脱落するのは火を見るより明らかだと思っていたのだ。

しかし、結果としてはじき出されたのはまったく別の回答だった。

「リズムを崩されると駄目なんですよねえ」

倒れるまで走れの言葉の通り、幾人もの男達が倒れている。

そしてルディエラ自身もへばつているがその完走周数は他の大方の隊員よりも三週は多く、その場で大の字になつて倒れてはいるものの、誇らしげにすら見える。

「でも、まさかフィルドさんがぼくより一周多く走るとは思わなかつた！」

顔をしかめて唇を尖らせてぼやくが、その応えは隣からあがつた。

「貴様の思惑などに早々はまつてたまるか」

ルディエラの隣で馬柵に腕をかけているフィルドだつたが、その足はがくがくと震えていて、その走り込みの壮絶さを物語る。

「結果について何か言いたいか？」

アラスターが意味ありげに小さく囁くことに、ティナンは奥歯を

かみ締めて耐えた。

「ベイゼル」

一番初めにばてたのは第一隊の人間だつたことも災いし、ティナンにとつては手も足も出ない結果となつてしまつたのはまさに計算外だ。

「後のこととは頼みます」

きつい口調でティナンは言い、離れた場所で地面になつきながらも楽しそうににやにやとし、他の隊員からの罵声を嬉しそうに聞いているルディエラの姿に複雑な視線を走らせた。

本日のルディエラも、ものの見事にボロボロになつてゐる。

見習い隊員としての隊服は他の隊員達とは違う色をしてゐる為によりいつそう目立つが、その隊服も、その顔もあきれる程にドロにまみれて汚れている。他の隊員から浴びせられている罵声など、決して女の子が向けられて良い言葉ではないのに、当人はむしろ楽しそうにすら見える。

女の子なの。』

その思いがいつそうティナンの胸を切りつける。

ルディエラが自宅で騎士を気取つてゐる分には可憐の一言で済ませられた。

無邪気に強くなりたい、騎士になりたいという様はただの子供の憧れで、決してかなえられない夢をただ語るだけの書の無いものだつたといふのに。

何よりティナンを打ちのめしたのは、今まで決して自分に逆らつたことなど無い妹が、自分の言葉に逆らつてこの場にいることだ。

来るなど言ったのに。ルディエラは拒絶した。

「止める」

ふいの声にティナンはハッと息をつめた。

「射殺すような手でアレを見るな」

くんつと肩に手をかけられ、無理やり方向を変えさせられたティナンは掠れる口調で「殿下」と主を呼ばわった。

「本来のおまえを知らなければ、おまえがアレを憎んでいるのかとすら疑う田だ。無駄に威圧して脅しをかける必要はないだろう」

憎い……？

憎い訳がない。可愛い妹なのだから。

だが、ほんの少し許せないだけだ。

何故自分に背いてこんな場にいるのか。何故、この手を振り払つて……不必要にずたぼろになつてそこに居続けようとするのか。こんな場所など捨て去り、さつさと実家に戻ればいい。そうすればいくらでも冷たい態度をとつたことを詫びて、抱きしめて、他の何ものからも護るのに。

ルディニアラさえ意固地にならなければ、自分はこんな態度をとらなくて良いところに。

女の子がいていい場所では決してないのに。

あの日 実家になど立ち寄らなければよかつた。

あの日、キリシュニータを実家にいれるのではなかつた。

あの日……いくらでも湧きあがる後悔に、ティナンはぎしづと奥歯をかみ締めた。

お恨みもうしあげます。我が君。

胸の奥で言葉が呻くよつて響いていた。

\* \* \*

「あら、ティナン様」

「ひとつと微笑んだのは淡い栗毛の少女だった。

今頃は隊員達は沐浴と着替えをすませ、酒場【アビオンの絶叫】辺りに足を向けていると思つと腹が立つ。だが、ルディエラがいると思えば自分も足を向ける氣にはなれなかつた。

丁度兄から託された使いを幸いに、ティナンは今朝方の手紙に同封されていた封書と、現金とを手に古馴染みの家を訪れたことにしたのだ。

「ネティの具合はどうですか？」

エプロンをつけた娘は、曾祖母の名に苦笑しながらティナンの口

一トを受け取り、室内へと招き入れる。

「いつもどおり元気ですよ。最近ちよつとボケてますけど あらいやだ。ティナン様つてばわざわざおばあちゃんに会いにいらしたの？」

からかう口調で言いながら、それでも「兄に様子を見てきて欲しいと頼まれたから」といえば、素直に一階にあるネティの私室へと案内をかつてである。

「いや、いいですよ。何かしていたのでしょうか？ 作業に戻つて」ティナンはやんわりと言いながら、ルディエラとたいてして年齢の変わらない少女の様子に気持ちを沈めた。

あの子も 女の子らしく家庭についてくれればどんなにいいか。

いや、女の子らしくなくて構わない。

ルディエラはルディエラらしくあればいい。

けれど今のよつて無理して男とてふるまつのはいただけない。

「ベイゼルが聞けば『いや、当人無理してる様子は無いよ？ むしろあれ素だろ』とぶんぶんと首を振りそうなことを思つていたが、生憎この場に突つ込み要員はいなかつた。」

重い嘆息をつき、一階にある年齢不詳の老婆の私室の扉をノックした。

「『無沙汰しています。おかげんはいかがですか？』

声をかけると、窓辺でロッキングチェアに腰を落とした老婆が開いているのかいないのか判らない視線をティナンへと走らせ、顔をほころばせた。

一回り小さくなつた気がしたのは、元々肉付きの良い女が多少やせたのだろう。クインザムが心配するのもうなずける。その様子は病に蝕まれているのがありありと判るものだつた。

もとより年齢も関係するものだろうが、おそらく産まれた瞬間から付き合いのあるこの老婆もそう長くは生きられないだろう。

ティナンは妙に物悲しい気持ちを抱いた。

「おや、クインザムぼつちやんじやないか」

「それは兄です」

「おやまあ。じゃあ、ティナン坊かね」

ティナンですけど坊は止めて下さい。

楽しそうにあれやこれと尋ねてくれる老婆にティナンは愛想良く対応した。

「末のぼつちやんはびうしたね」

「ルークですか？ 今は【賢者の塔】で好きな研究にいそしんでますよ」

ティナンは言いながら、兄から渡されていた手紙と現金とが入った封筒をテーブルの上に置き、ついでに途中で購入してきた花も添える。

「ちがうちがう。ルークぼつちやんの下のぼつちやんだよ」

しわくちゃの骨と筋ばかりの手を振つて笑う相手に、ティナンは微笑した。

「ルークの下はルティエラですよ。あの子は女の子じゃありませんか」

いくら男の子のような姿をしていたって、そこは間違えないで欲しい。

ティナンも慣れないむつきをかえたこともあるし、夏場の川遊びで素っ裸になるルティエラを何度もしなめたか知れない。

そんな昔のことを思い出し、ティナンはちょっとだけ切なくなつた。

「自分が取り上げた子供を間違えちゃ駄目ですよ」

笑いながらしなめるように言つティナンに、老婆は憤慨した様子で顔をしかめた。

「何言つてんんだい。誰も彼も人をボケたボケたって。失礼ですよ。エリックの旦那さんの子は全部あたしが、この手で取り上げたんだよ。

間違うものですか。

五人ともちゃあんと立派なもんをつけた男の子だよー。」

「……はい？」

いや、ボケてますよ。

ティナンはまじまじと怒つている老婆を見下ろした。

「ひどいひどいひどいひどい」  
 怨嗟の咳きを延々と繰り返すルディエラの背後、騎士団官舎に呼びつけられたマーティアは肺に溜まった酸素を一息に吐き出し、力いっぱい編み込まれた紐を引き絞つた。

「ひぎいひつ」

騎士団官舎内、第三騎士団の詰め所の隣にある隊員達の憩いの為のサロン、その隣にある使用人達の控え室は現在戦場であった。中央部分におかれた衝立の奥、漏れ聞こえる声は拷問官と咎人のそれすらも思わせる。

「ルディ様、もう少し息を止めて下さいまし」

「ひぬつ、ひぬからつ」

窓枠に指をがつちりと食い込ませ、ルディエラはマーティアの注文にぶるぶると身を震わせた。

キシギシと背骨が悲鳴をあげる。

これ以上締め付けられれば骨が折れるのではないかと懇うのに、相手は攻撃を決して緩めようとはしなかった。

「もあつ、あともう少しつ。筋肉ってなんて厄介なのかしら…」

普段のルディエラであれば自慢の筋肉の悪口を許しはしないが、今の彼女はそれどころではない。

「セイつ。セイム 手伝つて」

すでに興の乗っているマーティアは心底楽しそうに微笑を浮かべ

それはルディエラにとつてはまさに悪魔の笑みに他ならないが衝立の向こう側、扉に背を預けて笑いを堪えていた弟を呼んだ。

「ちよつ、あのさ。これ以上は無理だから。

本当に、無理。駄目。だつて内臓出るつて」

ひょこつと衝立を抜けてその鳶色の瞳に認めたものは、ドロワー  
ズ、むき出しの肩にコルセットという、本来であれば異性に曝すも  
のでは到底無い様相

涙目のルディエラの懇願に、セイムの瞳は苦笑に細まる。

窓枠に両手をつけたまま、腰を突き出すようにして立つてゐるセ  
イムの幼馴染にして主は 珍しく年相応の少女に見えた。

惜しいのは、やはりその髪が首筋から少し下で切られているのが女  
性として多少痛々しさを見せていることだろう。その髪を補う為に  
と、近くの椅子には幾つかのかつらも置かれている。

姉の手から「ルセットの紐を受け取り、セイムはすぐ近くにある  
ルディエラの腰のラインを指先でつとめぞり、その耳に息を吹き  
かけるように囁いた。

「そんな格好してると結構かわいい」

突然聞いたこともない台詞を向けられ息を詰めた相手の背中、セ  
イムは力いっぱい締め上げて鉗に紐を引っ掛けた。力を緩めずにき  
ゅっと紐を結ぶと、相手からの報復を逃れるようにすっと後ろへと  
下がつた。

「姉さん、このくらいで勘弁してやつてよ」

「もあつ、仕方ないわね」

すばやく逃げ出したセイムだったが、その動きは徒労であった。  
姉弟の会話を耳に知れながら、ルディエラは低い声で「くぬううう  
うう」と呻くことしかできずにいたのだから。

「セイムウウウ、殺すっ」

「いつでもどうぞ。それより、背筋を伸ばして立つて。姉さん、その淡い緑のドレスがいいよ」

いそいそ薄桃色のモスリンのドレスに手を掛けている姉を引きとめ、その横のドレスを指示しながら、ふとセイムはルディエラの姿を正面から捉えた。

「桃色が可愛いと思うけど」

ふわふわの女のナリシーデレスに夢を持つマーティアに、セイムは肩をすくめた。

「胸の詰め物たりないんじゃないかな」

「あら、丁度いいくらいよ?」

無遠慮な姉弟の会話を恨みがましい目で睨みつけながら、ルディエラは呼吸を整えた。締め付けられる体をゆっくりと慣らしていく。そのやり方くらいは心得ているが、もともとドレスなど着ないのだから、どうしたって苦しい。

ドレスは好きでもなければ嫌いでもない。

女である自分を捨てているつもりも無い。だが、ドレスと隊服を示されて一生脱ぐなといわれれば当然隊服を選ぶ。

「なんで……こんなことになつたんだっけ……」  
ぼやいた言葉は、しかし簡潔に説明ができた。

自業自得だ。

それ以外のなにものでもなかつた。

\*\*\*

「舞踏会?」

「ただの夜会」

「昨日前、ベイゼルは手の中でナツツの皮をむき、軽く投げるようにして口の中に放り込んだ。

隊長及び副隊長の会合が開かれ、その会合の中で話し合われた結果を当然のように「あ、忘れてた」と口たつたその口まろりと口にしたのだ。

それはつまり翌日の予定を。

「リルショイイラ様が隣国に機嫌伺いに出向かれるのは知ってるだろ? その出立に際してのけよつとした催し」

ただの夜会などと言つたところで、王宮内の催しがそれほど簡単なものであろう筈は無い。当然のように王宮警護の騎士団員達は会場の警備に当たる。

他国の人間が居ないというだけで、その規模は決して小さなものではない。王宮内はまさにその準備でてんてこ舞いの様相だが、騎士隊隊舎は普段と変わらぬ様相で、日々の訓練に忙殺されているルディエラなどはそんな催しがあろうなどとは少しも気付いていなかつた。

ただ視野が狭いだけともいえるが。

「明日、俺達は庭の警備な。廊下とかが第一隊、会場内部は当然第一隊

一隊

「庭つて、なんかずるい」

思わずぽろりともらすと、ベイゼルは「廊下と庭の警備はいつも第三隊と第一隊の交代だが、内部警備は絶対に第一隊に決められる。あいつら俺達王宮騎士と違つて王族騎士だからな」と肩をすくめた。

言われてみると、確かにキリシュエータも普段から第一隊の人間

を一人連れている。その割に副官は第三隊隊長のティナンを指名しているのだからおかしなものだ。

「庭警備かー、ちょっとつまんないですなー」とルティニアがその時ぼやいてしまったのが悪かったのか、ふいにその肩にじぽんっと手が乗ったのだ。

「やうが。じゃあお前には違う任務をくれてやうが

氣安い第三王子殿下は口の端にあまり宣しくない微笑を湛えて言い、他の隊員達は興味津々とこう様子で耳を傾けた。

「特別に会場内警護に回してやる。美味しいものも食べられるぞ」

「つて、ズリイですよ。殿下っ」

途端に激しい苦情のよつた声が上がった。

夜会、舞踏会で言つ会場内警護といえば正装しての勤務となる。その扱いはあくまでも警護ではあるが、招待客となんら変わりなく豪華な食事にもありつけるし、節度さえ守れば酒も許される。

「なんだ、ベイゼルがやりたいのか?」

「そりやとーぜんですよ。俺のほうが役にたちますよ」

途端に嬉しそうに言つベイゼルと、周りからは「俺がっ」との追隨。しかし、彼等の主にして第三王子殿下は、それはそれは麗しい微笑を湛えて言った。

「ドレスを着てもいいが

「は?」  
「女装」

途端にその場には沈黙が満ち、ルディエラの肩には次々と他隊員の手がぽんぽんと押し当てられた。

「大丈夫だ。お前なら似合ひ」

「がんばれー。馬子にも衣装つていうしな」

「人生にはやらねばならないものがある。任務なら仕方ない。涙を

呑んで譲ろう」

「いやあ、残念だな」

「こきうー！」

うんうんと言いながら笑いを堪えている面々を前に、ルディエラは盛大な声をやつとしほりだした。

「何ですかそれ！」

思わず素で声をあげたルディエラが、慌てて声を押さえ込み、不敬もへつたれもなく思い切りキリシュエータの胸倉を引っつかむと声を潜めた。

「色々まずいじゃないですかっ。ぼくが女だってばれたらどうするんですかっ」

真っ青になつて言うルディエラに、キリシュエータはあくまでも平素の口調を崩さない。

「なんだ、女装に自信はないのか。そうか。特別手当も考えてやるのに。ドレスの時には剣がもてないからな、ドレスの下に隠せる短剣もやるうつかと思つていたんだが。確かおまえ欲しがつていただろう？」

「やりましょーー。ぼく全力でやりますからっ」

守銭奴魂はぐつと拳を握り締め、力強くうなづいていたのだった。

そんな過去の自分がちょっとびり憎い。

幸い、隊長であるティナンがルディエラの家人を呼んでくれた為に身支度は問題なくすんだわけだが　　家人は家人でなんというか腹立たしい。

「呼吸できますか？」

胸元に手を当てて歯軋りをする明るい髪色の少女に水の入ったグラスを差し出しながら、セイムが問い合わせると、ルディエラは三白眼で睨み返した。

「人の不幸を楽しむな」

「楽しむ意外することないでしょに。それより、口　　口が悪いです。そういう格好している時はきちんと女性らしく」

セイムの鼻がひくひくとしているのは、明らかに笑いを堪えている。ルディエラはグラスをひつたくるようにして受け取り、一気に飲み干した。

「ぼくを舐めるなよつ。女らしくなんて朝飯前だねつ」

びしり啖呵を切つたルディエラに、マーティアはうなだれるように溜息を落とした。

「すつかり一人称がぼくなんですけど」

「あああっ、しまつたつ。あれ、えつと、あ、あたし？　なんか気持ちわるつ」

「あたじじゃなくてワタクシです。ああっ、もう心配で胃に穴があきそうですつ」

自分の顔に手を当ててさめざめと泣くふりをするマーティアの横、セイムは壁に片腕を預けて肩の振るえを堪えていた。

「笑うなつてばー」

\*\*\*

「何を考えてるんですか！」

ティナンの声に、彼の主は座っていた椅子の肘掛けに尊大な調子で腕を預け、足を組み替えた。

「何がだ？」

相手に疑問符を投げかけているくせに、返される言葉を承知しているキリシュエータは指先で眼鏡の蔓を押し上げる。

硝子越しの眼差しは細まり、実際に楽しげにティナンを見返していった。

「あの子に女装させるなんて！ どうこうおつもりですか？」

激怒している副官の様子に更にキリシュエータの口元は緩み、まるで直に見なければつまらないことでも言つよつて眼鏡を取り払った。

「面白そつだと思つただけだが」

その言葉に、ティナンはぐつと奥歯を噛み締め、射殺しそうな眼差しを主に向けはしたもの、血らの言葉は封じ込めた。

そうでなければ その御前に跪き、死するまでの忠誠を誓つた相手を本気で罵倒してしまつた。うだつた。

「そう熱くなるな。最近のお前は余裕が無さ過ぎやしないか？」

「それは……」

さぐるような眼差しをねじ込まれ、ティナンはふつと視線を逸らした。

一瞬だけ、まつたく違う色合いを見せたティナンの様子に更に追従の手を伸ばしかけ、だが彼の主は視線を伏せ、持ち上げた。

「ただの遊びだ。楽しめ」

母の言葉がゆっくりと胸の中に落とされた。

毎日のように腹をたてて、毎日のように苛立ちを抱えて。棺桶に片足を突っ込んだ老婆の言葉に翻弄される。ティナンはふわりと切れやうな自分を認識しながら、弓をついた微笑を浮かべた。

「御下命とあれば」

副官の言葉にキリシュエータは呆れるように嘆息し、部屋の左側

幾つもの短剣が飾られた一角を示した。

「そのうちの一振りをにんじんに下げ渡す。

おまえならばアレの好みは熟知しているだろ。どれでもいい。今頃は第三隊のサロンの隣室にて身支度をしていく筈だ。届けてやつてくれ」

ティナンは何本かその重や、バランスを確かめるように手の中で弄び、実用的と思われる一番シンプルな一振りを手に暗い思考の海をさ迷つていた。

頭の中で産婆の言葉が堂々を巡る。

母が産み落とした子供が全て男だといつながら、ではルディエラは何だとこうのだら。ルディエラは……

調べればきっとこの胸に蟠るもののが払拭される。

けれど、その一歩を踏み出すことに躊躇してしまつ。

そう、ただの年寄りの勘違いだ。

そうでなければ、そうでなければ……自分はいつたいじりしたら良

いのか判らない。

「つつ」

短剣の切つ先が指の腹をかすめ、ティナンの白手にじわりと血が  
滲んだ。

その真つ赤な血を見つめ、ぼんやりとその血を舌先でなぞった。

血の……

「アイギル」

ルティエラの女装を興味津々で待っていた第三騎士団の面々の感想は概ね一緒であった。

「喋るな」

「副長までそんなこと言つしちゃ…」

すでに控え室にいる時にマーティアに耳にタガがでかる程聞かされたのだ。しかも、マーティアはにっこりと。

「ルティ様にとつておきの言葉をお贈りします」

と謎の枕詞を載せ、悪意も邪氣もなく「喋らなければ大丈夫です！」と言い放つたのだった。セイムと同じ鳶色の瞳をきらめりと輝かせながら。

ルティエラは引きつり「へー？」と微妙な返事を返し、セイムは顔を背けて片手で口元を覆い、肩を上下に揺らしていた。

「ほらつ、喋ると途端にボロが出るだろ」

「女つていうには色が黒いんだよな。ベールでもかぶつたほうがいんじやないか？」

「腕が太い」

好き放題に喋りだした面々を前に、ルティエラはどんどんと瞳を細めて唇を尖らせた。

マーティアには腹がたつが、自分でもなかなかのできばえだと思ったのだ。

少しばかり第三隊の面々に「どうだっ」と得意げにお披露目したと

「うのに、彼等ときたら笑いのネタ程度にしかしない。いや、ネタ程度で勿論いいのだ。

ルディエラは少年なのだから、女装がやたらと似合つて完璧女性扱いされても気まずい。

ルディエラはちらりと自分の手元へと視線を向けた。

「の腕まで長い手袋をしているのは、日焼けしてしまつて、腕の黒さと女性にしてはちょっとびり太め、そして訓練の時に出来た小さな擦り傷やら痣やらを誤魔化す為だ。

「ドレスにしたって、夜会なのですから、もう少し肌の露出があるいいのですけどね」と不満たらたらのマーティアに対し、セイムが「もともと男の子で通してるんだから、あまり色々出したらマズイでしょう。何より、胸のトコなんて詰め物落ちる」と、思い出せば思い出す程腹立たしい会話を交わしていた。

「うして着せられたのは、上半身は鎖骨の辺りまでしっかりとカバーされ、肩口だけが少しだけひらひらとうす布を遊ばせ、腰の少し上からは幾重にも薄緑の生地が重ねられてドレープを作り、ほんの少しだけ中着のパニエで膨らませてゆつたりとしたものだつた。

「体の動きと光の角度で緑の濃淡ができるとっても綺麗な色彩をみせますよ」「

桃色のドレスを着せたがつたマーティアは、最初不満そうにしていたが着替えさせ終わるとやつと納得したのかそんな風に言つていた。

「ルディ様日焼けが酷いから、桃色だと悪目立ちしていたかも知れませんわね」

とは、どうやら自分を納得させる為の発言であつたろうが、ルディエラとしては「余計なお世話だよ」と歯軋りしていた。

そして、現在ルーティエラの足 ドレスの下には銀の短剣が潜ませてある。

丁度着替えが済んだ頃合、マーティアがルーティエラの髪に乗せる髪飾りを物色している時に来訪したのは、第三騎士団隊長、ティナンである。

突然の来訪者に、それまで笑いを堪えるといつ作業に没頭しながら腹筋を鍛えていたセイムが衝立の奥へと消えると、程なくして短剣とベルトとを手に戻つたのだ。

「ティナン様がこれを足につけるよ」と、

「夜会に刃物なんてとんでもありません」

と、途端にマーティアは憤慨したが、ルーティエラは化粧椅子に座つたまま勢いよくドレスの裾を持ち上げた。

「セイム、早く頂戴つ」

新しい玩具をもらつた子供の瞳がきらきらと輝いているが「頼みますから、自分の格好くらいは考えましょうね」とセイムは嘆息し、自分の手にある短剣とベルトとをマーティアへと差し出した。

「姉さんつけてあげて」

その言葉を残して衝立の奥へと弟が消えると、マーティアは鬼のよつた形相でルーティエラの前に跪いた。

「女性のですから少しは慎みをお持ち下さー。」

「慎みなんてマーティアにあげるから」

「ルーティエラ様っ！ セイムだつて男なんですよ」

その後たつぱりと説教をくらひ羽田に陥つてしまつた。

＊＊＊

「お前たち、何を騒いでいる。そろそろ配置につく時間だつた」

冷ややかな隊長の声が轟いた途端、それまでルディエラの周りでわいわいと騒いでいた面々が背中に棒でも突っ込まれたのかというよつこびしりと背筋を伸ばし、慌てて退散した。

途端にルディエラの中でも緊張が生まれる。ベイゼルは一般隊員と違い、ティナンが来たからといって慌てふためいて退散したりなどしなかつたが、それまでの息苦しい程の人口密度が途端に変わってしまう。

広いサロン内にティナンとルディエラ、そして苦笑しているベイゼル。

「隊長、配置表に修正箇所があるから一度目を通して欲しいんだけど」

飘々と言つベイゼルに一瞥をくれ、ティナンはその眼差しをルディエラへと向けた。

まるでアラを探すように頭のてつぺんから爪先までをゆっくりとその視線が落ちていく。つま先へと一旦落ちた視線がもう一度ゆっくりとした速度で這い登るのを見返しながら、ルディエラは自分が狩り出されるつわざや野ネズミにでもなつたような心地を味わつていた。

沈黙が痛い……

怒られるのであれば怒られたほうがよっぽど精神衛生的には好ましい。

鼻の奥からつんとしたものを感じながら身を固くしていると、おもむろに顎先に手がかけられ、ルディエラはびくと身をすくませた。

「口紅の色が濃い。少し落とせ」「は……い

半泣きになつたルディエラが、ことあらうに自らの手でそのま

ま口紅を拭おうと反射で動けば、鬼隊長はその手を掴みあげ、吐息を落として反対の手でハンカチを取り出した。

「背筋を伸ばして、おどおどするな」

ハンカチを軽く押し当てるようにしてその紅を拭い、ティナンは若干眉を潜めたものの満足したように一つうなずいてみせる。

本日のティナンはそれ程威圧的な何かを垂れ流してはいなかつたが、すでにルディエラの中では恐怖の存在に成り果てているのが、ルディエラの表情はどこまでも引きつっていた。

いつそ痛々しいその様子に、ベイゼルは軽く首を振った。

「隊長、今日くらいは優しくしてやんなさいよ。アイギルだつて好きでんな格好してる訳じゃないし、会場でもまさか隊員として接するつもりじゃないんでしょう？」

「副長、それつてもしかして援護なのかもせんけど、怖いからお願いだから黙つてて。

ルディエラは田で訴えてみたが、ベイゼルは固まつた体をほぐすように肩口を回したりなどしながら軽く言う。

「まあ、普段のこいつを見慣れている俺等にしてみれば、ちょっと面白いけど 普通の人気が見たらちゃんと立派にオンナノ口だよ。そんな怖い顔してないで、淑女に対するように優しくしてやんなさいよ」

ベイゼルとしては親切心だつたろう。

せつかく着飾つたルディエラが、顔を強張らせてびくびくしているのが忍びなかつたのだろうし、ティナンが片意地張つているのも時には解したかつたのかもしない。

ティナンはじつとルティーラを見つめ、やがてゆっくりと一つの回答を導き出した。

「せうか、今日は部下でも何でもない」  
いや、部下は部下だ。

ルティーラの女装はあくまでも王宮内部の警護の為のものだ。根本原因が第三王子殿下の醉狂であったとしても。

「せうか……」

ぼそぼそと口の中で小さく呟いていた言葉は、ルティーラには聞いていないであらうが、ベイゼルにはしっかりと届いた。

今日は兄でも妹でも、ましてや部下でも無いんだ。

いや、ちょっとまで？

兄だし、妹だし、部下であることは違いないんだが！

そいはずソレでも仕事中だよ？

ベイゼルが思わず突つ込みそうになつた面前で、ティナンはそれまでの鬼隊長の表情を一変させ、せつくりして眼差しをふわりと緩め、ルティーラの白手に包まれた手の先端に口付けた。

「今日はぼくがエスコートしよう」

もし、もし……？

明日からの半月 第一隊の半数の人間が第一王子殿下にして司祭長リルシヒイラの護衛として隣国ユフェスタへと旅立つことが定められているが、当然自分もその旅に同行することとなると思つていたフィルド・バネットは、隊長であるアラスターの言葉に肩透かしを食らうこととなつた。

「お前は居残りになつた

「何故ですか？」

第一隊は三小隊に分けられ、アラスターから直接指揮を受けているフィルドは当然今回の外遊に同行するのは確定していた筈だつた。「色々と考えた上での決断だ」

それ以上の言葉は無かつたが、おそらく最近「まじまと」でかしたミスなどが原因であるといふのはフィルドにも理解できた。

ミスを思えば自然と脳裏には明るい髪の小僧が浮かぶ。

日に焼けたような明るい金髪に、底意地の悪そうな灰青の透明な瞳を持つルディ・アイギル。

そんな顔を実際に見た訳ではないが、何故かルディ・アイギルを思ふとき、頭の中で踊るヤツはべろりと舌を出して左の目の方に中指を押し当てる「べー」と阿呆な音をさせている。

あげく「マーマと口元を緩め人を挑発してくるのだ。

とつ捕まえてきつたんぎつたんに殴りつけてやりたいという激しい衝動に駆られるのだが、実際にあの子供を面前にすると、まるでそんな気配はおくびにも出さずに「あ、フィルドさんだ」とにっこりと笑うのだ。

腸が煮えくり返る。

「くそつ」

思わず舌打ちをもらし、フィルドは握り締めた拳を壁へとたたきつけ、慌てて現状を再確認してしまった。

任務中。

そう、リルシェイラの外遊の壮行だ。

その会場の建物内廊下を警護する任務についているとのを危うく忘れていた。

各所に配置された第一隊の薄藍色の隊服が視界の端にちらついている。

会場内に来客は未だそれほど入っていないが、警護の為の第一隊の人間や侍従などがすでに会場内を忙しく動いている為に人の出入りも気配も感じられる。

フィルドはちらりと会場正面の扉から続く廊下に見えるアラスターへと視線を転じ、思い切るようにそちらへと一步足を進めていくと、アラスターが慌てたように奇妙な動きを見せたのはほぼ同時のこととなつた。

「隊長？」

何だ？

ととんと床を軽く蹴つてみれば、無骨な大男アラスターはその腕の中に一人の少女を抱えるようにしてこちらを振り返った。

「危ない」

とアラスターが言葉を続けるのが耳に入れば、どうやら相手の少女は躊躇でもしたのだろう。それをアラスターが咄嗟に手を伸ばして抱き込んだという様子。

今夜の夜会に招かれているのか、淡い紗の生地を幾重にも重ね合わせたドレスを着用した少女は引きつった微笑で体制を整え、ついで自分を抱えるアラスターの胸を見つめながら口を開いた。

「すごいっ。胸筋固いっ」

フィルドは思わず足を止め、アラスターは引きつった表情で自分の腕の中の少女をまじまじと見下ろした。

化粧が施されていて多少大人びて見えるが、未だ二十歳にはどうていなつていないと思われる少女は瞳をきらきらと輝かせ、不羈にアラスターの胸にぺたりと手を当てた。

「うわああ。凄い。張りもいいし、固いし。素敵っ」

なんだか判らないが、聞いてるこちらが恥ずかしい。

完全に狼狽したアラスターがわたわたと慌てながら「お、お嬢さん？ 淑女？」と上ずつた声でじりじりと相手から逃れようとしているのだが、相手ときたら何がそんなに楽しいのかがしりとアラスターの腕を掴んだ。

「上腕三頭筋と二頭筋の張りもいい感じ。きっと脱いだらもっと凄いですよねっ」

「な、何を言つてるんですか」

「腹筋も凄そう。あああ、見たい。勿体無いっ」

うつとりと囁く声はまるで誘惑しているようにすら見える。

狼狽するアラスターは、近くにいるフィルドを認めて声を張り上げた。

「フィ、フィードー！」

「……はい」

さすがに助けてくれとは言えないのか、アラスターが必死にすが

るよつた眼差しを向けてくる。

自分よりもずっと小さな少女にここまで押される というか襲われている上官も珍しい。フィルドは生温かな笑いを堪えつつ、一応二人の間に割つて入るよつに声を掛けた。

「失礼、淑女レディ。お怪我はありませんでしたか？」

それまでフィルドへと関心を示さなかつた相手の視線がふつと向けられる。

「じこまでも透明な灰青 少しだけ不満を示すよつに尖る唇。薄く紅を佩いたその唇が音を紡ぐより先に、フィルドは驚愕のままでその唇を口にじよづとしていた。

どんな姿をしていようと、その瞳を間違えることは無い。田常のふとした隙間に入り込み、フィルドを苛々とさせる張本人。夢の中でも現の内でも、脳裏を駆け巡る悪魔。

「ア  
「ルティエーラ」

凛と響く声がぴしゃりと投げつけられ、つかつかと長靴を打ちつけるよつにしてその場の空氣を引き裂いたのは第三隊隊長 ティナンだつた。

「一人でうるさいしては危ないと言つたでしょ。待つていなさい」と言つた言葉が聞こえませんでしたか？」

「あ……あの、ごめんなさい」

「アラスター、連れが迷惑を掛けたよつで失礼しました」

「あ、ああ。怪我がなければそれで」

穏やかに隊長一人が会話を弾ませる横、フィルドは引きつった表

情でじつとティナンの一歩後ろに立つ少女を見つめた。

少しばかり怯えを含ませ、ティナンを気にしているのは間違いないく

「ルディ・アイギル……だよな？」

小さな囁きはルディエラの耳に僅かに届き、ルディエラはちらちらとティナンを気にしながら手に包まれた指先をひょこひょこと動かした。

「なにをしているんだ、貴様は」

\*\*\*

「任務です」

ルディエラはすすすとフィルドに僅かに近づき、ふと思い出すようにティナンに声を掛けた。

「ティナン様」

そう、これもまた不可解だ。

ティナンは今日は隊長と呼ぶなと命じつけ、それならぼくは呼べば良いのかと困り果てたルディエラに「ティナンでいい」と穏やかに

「そう… おそろしいことに鬼隊長は穏やかにそんなことを言うのだ。」

ルディエラは何故か判らない怖さを感じつつ、生理現象を覚えてティナンの元を離れたのだ。

隊長一人が警備のことについて話し込みはじめてしまったのを幸い、ルディエラはにっこりと微笑んだ。

「ぼ わたくし、バネットさんに花摘みに案内して頂きますから

「ヒーラ、ぼくが案内しますよ」

「いいえ。お仕事がんばって下さい」

言ひや、ルディエラはさつさとフィルドの隊服の裾を引っつかみ、そそくさとその場を離れた。

「なんなんだ、ソレは」

「殿下の醉狂です。ぼくだつて好きでこんな格好してる訳じゃないんです！」

潜めた声でぶつぶつといながら、ルディエラはざぶるつと身を震わせて自分の体を抱きしめた。

「いつもは怖い隊長だつてなんだかやけに親切でむしろ気持ち悪いし」

「確かに」

フィルドが知る限り、第三隊のティナンはいつだつてルディ・アギルに対して冷たい態度をとつていたものだが、先ほどのティナンはまるきり違う。

淑女を相手にしていつの演技だろうか。だとしたらティナンは物凄い演技力の持ち主だ。

廊下の角を曲がり、ルディエラはぐいっとフィルドの腕を掴んで足を止めた。

「そんなことより、フィルドさんつ

「な、なんだ」

「お詫がりますつ

真剣な表情で自分を見上げてくる青灰の眼差しに、フィルドは相手が男だと理解していくも狼狽した。

女装 なんだつてそんなものが似合うのだろう。

詰め物もしているのか、盛り上がった胸の膨らみや淡く施された化粧。

薄い紅を佩いた唇に自然と視線が落ちてしまう。

いがいに柔らかかつた唇。

ふとその感触を生々しく思い出し、フィルドは思わずぐつと拳を握り締めた。

口止めの意味と苛立ちとハつ当たりで仕出かした愚かな行為。他人にあんな場面を目撃されていた羞恥に相手も陥れてやろうとしてやつてしまつた口付け。

ただ触れるだけでよかつたものを、触れてしまえばその柔らかさと甘いような味に思わず舌を沿わせていた。

男相手に自分もどうかしていると幾度か後悔したが、その唇を思い出せば苦味と共に何かが疼く。

それを認めるのがイヤで更に怒りは激しさを増していく。

その唇が、そこにある。

柔らかで、甘い

「な、何だ？」

まさかおかしな告白じゃないだらうな？

いや、バカな考えは捨てろ。

これは男だ。男だ。男なんだ。

フィルド・バネット、落ち着け。

何よりもこいつは悪魔じゃないか。騙されるな。中身はルディ・アイギルだぞ。

頭の中に薄桃色のおかしな妄想がはためいた頃。ルディエラは胸元に手を当ててフィルドに訴えた。

「今の人誰ですか？」

「

「凄い筋肉、憧れる！ うわー、もうほくの目標はあの人に決めま

した。カツコイイ！ ぼくもあの人みたいになりたい

「……」

「何食べたらあの筋肉が維持できるんだ？」 顧問の筋肉も素敵だけど、知っています？ 顧問つてば最近ちょっとぴりお肉がついやつてるんですよ」

……フィルドは面前の筋肉馬鹿を殴るべきなのか、自分を殴るべきなのかよく判らなくなつた。

「うわあっ」「危うく思い切りすつこけそうになつたのは、自らが動きやすい騎士団の隊服ではなく、ドレスを着用していたことを失念していたことも理由の一つだらう。」

エスコートするという第三騎士団隊長の好意に甘えなんとか会場入りを果たしたものの、ルティエラは四半刻も過ぎると息切れと動悸により最終的には微妙に気持ちがすつきりとしない状態に陥つていた。

兄さま、どう接しろって言つの？

今日のティナンは一見して昔から良く知る兄のよつに優しいし、気配りをもつて接してくれているのだが、このところ鬼隊長姿しか見ていないルティエラとしてはなんだか微妙にキモチワルくて仕方が無い。

兄さまと危うく言いかけ、謝罪の為に慌てるルティエラの背を軽く叩き「どうかしましたか？ 何か飲み物でも？」ときた時には、思わずぶんぶんと勢いをつけて首を振り、この一人という居心地の悪さをどうにかしたくて周りを見回したが、知るもののが無い。

副長ううう。

と思わずこの場には居ないベイゼルに心中で救いすら求めてしまつた程だ。

第一王子殿下であるワルショエラの声明が済めば、会場内は歓談

する者、軽食をとるもの、樂団の曲に合わせて踊るものと多種多様に楽しめだす。

「踊れないよ！」

思わず咳くと、ティナンは苦笑して囁いた。

「きちんと言葉を改めなさい。それに、踊らなくとも大丈夫。今夜は舞踏会ではなく、ほんの関係者だけを集めただの壯行です。ダンスもただの余興に過ぎない。誰の誘いも受けなくていいのですよ」

その言葉に安堵の息をつくと、ティナンはルティエラの手をそつとすくいあげて微笑んだ。

「踊つてみたいのであれば、ぼくがきちんと導いてあげますよ！」

「ありがとうございます、兄様！」

と、無邪気に言えるのであれば良いのにルティエラが引きつていると、やつと現れた第三王子殿下キリシュエータが呆れたように二人に声を掛けた。

「まさかと思つたが　ソレはにんじんか？」

「殿下、淑女に対してソレはないでしょう」

ティナンの言葉など無視し、キリシュエータは無遠慮にルティエラの姿を頭から足元までじろじろと眺め、やがてふつと鼻で息をついた。

「残念だ」

さすがにこの言葉はルティエラにもぐさりと刺さる。

自分が美人の部類だとは思つてはいないが、だが何度も言つよう女性である自分を捨てていいつもりは無い。

綺麗なドレスに胸にはしっかりと詰め物もある。髪も自前ではないもののきちんと結い上げて化粧も施したというのに、結構自

信を持っていたというのに「残念」などといわれるとは！  
ルディエラが啞然とし、ティナンが不快に口を開こうとしたところでキリシューターは口元を引き上げるよつとして笑つた。

「おまえ本来の髪であれば似合つだらう」「

さらりと向けられた言葉に、ルディエラは軽く目を見開き、何度もその言葉の意味を咀嚼するよつに瞼み縋めた。

あれ、もしかしてこれつて結構褒められてる？

なんだか居心地の悪い思いをしつつ、なんとなく逃げ出すよつで呟嗟に口を開いていた。

「トイレッフ」「

主の言葉に、ルディエラの髪を直ら切つた事実をまざまざと思い出して顔色を悪くして小さく呻いていたティナンだったが、それでモルディエラの言葉に「やうこつ時は淑女は花摘みと言つものですよ」と弱々しく窘めた。

しかし、そんな言葉も上の空でルディエラはそれをと広間から逃げ出していたのだ。

慣れないドレスの長い裾と、高いヒール。

そしてなんとも居心地の悪かつたキリシューターの言葉に動搖していたルディエラは、廊下に出た途端、すつころびそうになつた。

「危ないつ。大丈夫ですか？」

ひょいと差し出された腕に助けられ、ルディエラは慌てて体制を整えながら相手を見上げた。

「あれ……」

がつしりとした体躯。

張り詰めた筋肉。

見事な逆三角形 思わずドキドキと高鳴る胸で、ルディエラは相手の腕を逃してなるものかと、がしりと掴んだ。

よく見れば相手は薄藍の隊服 第一隊の人間を示す。

「凄いっ。うわっ、上腕二頭筋と三頭筋の張りが凄いっ」

「あ？」

久しぶりに見た筋肉質な上背のある男の姿に、ルディエラの瞳がきらきらと輝き、その意識は完全に ぶつ飛んでいた。

なんだか微妙であつたテンションが異様な程に跳ね上がつたが、勿論その向上は他の人間にとつて、はた迷惑なだけだつた。

\* \* \*

フィールドを追い詰めるようにして素敵筋肉のアラスターの名前と、さらに相手が第二隊の隊長だという情報を仕入れると、ルディエラはにこにこと所要を済ませて会場に戻つた。

まさかこれから配属される先に素敵筋肉を持つ人間が居るとは。なんという幸運。

いやいや、なんとねたましいことだろ？

自分がどれだけがんばつたところで、決してあの肉体美を手に入れることは敵わない。だが、近くで見て観察すればあの筋肉を維持している秘訣を盗むこともできる筈だ。

否！

盗まなくとも、教えてくれるかもしれない。  
さらに言えば、もしかしてアラスター隊長も自分と同じように筋肉好きかもしれないじゃないか。

同じ筋肉好きとして筋肉談義に花が咲く！

今まで誰一人として共感してくれたことは無いが、きっとアラスター隊長なら理解してくれるに違いない。

ハフ、もしかしたらその筋肉の秘密を他人にばらしたくない内向的筋肉好きーだった場合はどうしたらいいのだろうか。

ドレスなど着て碌なものじゃないと思ったものだが、こんな収穫があるなら王宮内部警備に配置されて良かつた良かつた とルディエラが脳内でおかしな花を咲かせまくっていたのもつかの間、すでに人で埋まっている会場でルディエラははたりと足を止めた。

広大な広間だが、王族は数段高い場が設けられている為によく判る。

自分にとつても上官である軍務將軍キリシュエータとティナンが顔を突き合わせて何事かを話していたのだが、出入り口の重いカーテンを開けられ入室したルディエラの存在に気付いたティナンが顔をあげ、こちらへと一步踏み出すと、途端にルディエラは多少顔を引きつらせた。

兄さまといえるなら、おそらくこんな奇妙に気苦労は無い。

兄として接することもできず、上官として接することもできないと いう状態がルディエラにひとつひとつして良いのか判らなく困惑せ るのだ。

「踊る、無理です」

ふいに、ルディエラの耳に引っかかるような女性の声が届いた。

「『めなさい』

その独特なイントネーションに慌てて視線をめぐらせれば、煌びやかな女性のドレスが溢れる中、一人他国の民族衣装を着用し、ヴェールで顔を隠すようして立つ女性の姿にルディエラは慌ててそちらへと足を向けた。

会場内の揉め事を回避するのはルディエラにとつても仕事のうちだ。だがそれ以前に、その特徴的な外国訛りの女性は、ルディエラにとつて身内であった。

「すみません」

ドレスの裾をつまみあげ、出来る限り女性らしさを心がけて足を向ければ、別段その女性が無理強いされている訳ではないということに気付き、ほっと息をついた。

「ナーナ」

男性が非礼を詫びて引き下がるのを見守り、そつと相手に声をかける。

今の姿　髪にドレスという姿に相手の女性が自分に気付いてくれるかどうか怪しいとは思うものの、心配が先について声を掛けていた。

ヴェールの奥から黒い瞳がこちらを見つめ、やがてその瞳に安堵の色が浮かび上がる。

紅に染められた唇が笑みを刻み、この国では滅多に見ない、黒い髪と褐色の肌を持つ女性は微笑んだ。

「エーラ?」

返された名にほっと息をつく。

「まあ、ルディエーラ。いつも違う、オナノコ」

「この国に来て四年のナーナは、ルディエラにとつて家族だ。伸ばされる手に親愛の思いを込めて触れ、ルディエラは久しぶりに会った相手に尋ねた。

「クインザム兄さまは？」

「クイン、ヘーカ、呼ばれました

たゞたゞしいが、最近ではこちりと同じ言葉を話せぬよつになつたクインザムの妻は、美しい微笑を湛えてみせる。

その笑顔を見るルディエラは嬉しくなつてしまつのだ。

「兄さま、ナーナをおいていくのは渋つたでしょ。ナーナも心細くない？寂しい？大丈夫？」

長兄であるクインザムの妻であるナーナを、クインザムはまるで籠の鳥を愛でる様に慈しみ溺愛している。

こんな場に連れてくることも滅多に無いのだが、外国人であるナーナとクインザムの婚姻には司祭長リルシェイラの尽力もあってのことだと聞いている為、リルシェイラの為の催し物には出席せざるをえないのだろう。

ルディエラの無邪気な問いかけに、ナーナは相変わらず美しい満面の笑みを湛えながら言つた。

「クイン、死ねばいい、思います」

「あー……」

まだ言葉が不自由だな……

「鬼畜、駄目」

不自由だけど、ある意味達者。

何がどうしてこんな風に間違つて言葉を覚えているのだろうとル

「ディエラは頭を抱えたくなつたが、クインザムがナーナを家から出さないのもうなづける。

こんなに言葉が不自由では、外に出してはトラブルの元だ。確かに多少厳しさを持つクインザムだが、決して鬼畜などという人間ではない。

何より、あくまでもナーナは満面の笑顔だ。

「うん、えつと……そうだね」

とりあえずルディエラは親愛なる兄嫁に引きつった笑みで応えることにしておいた。

無難に。

ルディエラがナーナと遭遇していると、近くにいた衛兵が気づき「何がありましたか？」と声をかけて来た。

どうやら一人にする妻を心配したクインザムが、しつかりと人を頼んだらしい。

ルディエラは自分の仕事を思い出し、ナーナをもう一度ぎゅっと抱きしめて「仕事中だからまたね」と声をかけた。

クインザムと顔を合わせるのはちょっとばかり』遠慮したかった為だ。

先日クインザムに抱きついて子供のように大泣きしてしまったのも、かなり恥ずかしいし、久しぶりのドレス姿もなんだかくすぐったい。

「ぼく騎士になる為にがんばるからね」  
とクインザムに力強く宣言までしたのに、再会がまさかのドレス姿ではちょっと情けなさ過ぎる。

「えっと、夫婦喧嘩とか、何か困ったことがあつたら相談してね？」  
先ほどのナーナの暴言がちらりと引っかかってしまった為に言葉を付け足すと、ナーナはルディエラの頬に唇を寄せて、いつもと同じようにくつさりとした大きな目をやわらかくした。

「大丈夫、クイン時々憎たらし、でも 嫌い、ない」

褐色の肌を赤らめて言つ兄嫁に、思わず自分の格好も忘れ「くそつ、かわいい」と暴言を吐いてしまいそうになつたルディエラだった。

ベイゼルが見たら、まさにいちじろだらう。

ああ、でもナーナはどちらかといえば豊満ボディではないから、ベイゼルの範疇外かもしだれない。

やはり男性は胸が大きいほうがいいのだろうか。

思わず詰め物満載のあげく、セイムに「足りない」とまで言われた胸に視線を落とし、むむむと眉間に皺を刻み付けてしまった。

いや、どちらかといえば胸より胸筋のほうがいいか。

平らでもいい。しっかりとした胸筋。

ああ、どうして本当にぼくつてば男に産まれて来なかつたかな。女を捨てていない筈のルディエラだが、あやつく女を捨ててしまいそうな断崖のがけつぶち。

### 「ルディエラ」

阿呆な思考を頭の中で繰り広げていたルディエラは、危うく裏返つたような聲音で「はいいい？」と声を張り上げそうになり、慌てて自分の手でがばりと口元を覆いつくした。

「遅かつたね。バネットに苛めらなかつたかい？ 苛められたら言いいなさい。どうにかしてあげるから」

ティナンは心配そうに眉を潜めてルディエラに言つて、せりあとその二つの腕をつかんで歩き出す。

「どうにかつて……」

具体的にはいつたいどんなことを？

引きつったまま問いかけると、ティナンは一瞬だけ真顔になり、にこりと微笑んだ。

「どうにか」

「えっと、フィルドさんは最近仲良しです！ 実は結構いい人かなーって」

意味不明の「どうにか」に恐怖を覚え、慌ててフィールドの弁解をしてみたルティエラだが、思い切りそれがマイナスになつたことは言つまでもない。

「へーえ？」

ベイゼルがこの場にいたら腹を抱えて笑いを堪えたであろうが、あいにくとベイゼルは中庭警備の為に不在のため、ルティエラはこの兄の「へーえ？」の意味を推し量ることは無かつた。

「まあ、バネットと言わば意地悪されたら言つなさい」

兄様。

ルティエラは久しづびりの兄の優しさを氣色悪いなどと思つて、いた事實を完全に忘れ去ることにした。

ただ単純にティナンの言葉に喜色を覚え、思わず兄の腕に抱きつくなづがりついたのだ。

もはやその虐めの筆頭が、その言葉を口にしている優しいはずの兄であることは念頭には無い。脳みその記憶中枢すらも筋肉に侵されていいるルティエラにとつて、そんなことは瑣末ごとでしかないのだ。

「兄さま、大好きつ」

やつぱり兄様は誰よりも優しくて、素晴らしい。

ぎゅっと抱きついた妹にバランスを崩されつつも、ティナンは自分の中でふつりと何かが切れた音を聞いた。

兄でも妹でもないかもしねない。

それはティナンにとつてものすごく大きな問題だ。

もし、ルディエラが血の繋がらない他人だつたら自分はルディエラをどう思つんだろうか。妹だから愛しているのだろうか？

妹……

ふつと、意識が遠のいてしまった。そつになつてしまつた。

「ルディ……」

「あつ、『めんなさい』！」

兄さまと不用意に言つてしまつた挙句抱きついてしまつたこと、ルディエラは慌ててぱつとティナンから手を離し、わたわたと一步退いた。

面前のティナンは苦しそうに眉ねを顰め、唇を戦慄かせた。

「ぼくも大好きだけれど、でもぼく達はそういう一線を越えては駄目なんだ。判つておくれ。ぼくだつておまえのことは大好きだ。かわいくてかわいくて仕方ない。でも、それでも人間には決して侵してはならない大事なつ」

何故かティナンが片手をぐつと握りこんで熱弁を奮いだし、ルディエラはその大きな瞳を見開いて瞬きを繰り返した。

「ああ、でも、でも。おまえの気持ちを考えるとぼくはどうしたら。あああ。神様はどうして？」

「あの、えつと……え？」

「ぼくだつて辛いんだ。白黒はつきりとつけてしまつたほうがいいのは判つている。けれど、眞実は時として残酷だというだろ？もし一人の関係が無関係であつた場合、ぼくはそれはそれできつとものすゞく辛い。ぼくことつてはおまえはやつぱり可愛い」

「やかましい」

いつの間に壇上からおりてきただのか いや、おそらく一段高い場所にいる彼にはこのティナンとルディエラの滑稽な漫才もどきが、それはそれは嫌でも見えたことだろう 第三王子殿下は思い切り自分の副官の頭を殴りつけ、自らの護衛として控えている純白の騎士服の二人組みに冷ややかに命じた。

「酔っ払いは隔離」

「ちよつ、殿下つ。ぼくお酒なんてつ」

突如無遠慮に殴られた拳句に言われた暴言に、ティナンは痛む頭を押さえながら苦情を申し立てたが、キリシュエータは更に冷たく微笑した。

「いいや、お前は飲みすぎだ。もしくは病氣だ。正氣を取り戻すまで、リルシェイラの警護につけ」

低く命じつけ、護衛に連れ出されるのをふんと鼻息も荒く見送ると、キリシュエータは吃驚したまま固まっているルディエラを見返した。

「何をしてるんだお前は」

「……えっと、ぼく何かしたでしょか?」

突然の兄の熱弁がまったく判らない。

頭の中で兄の言葉を反芻してみようかと思つたが、脳内筋肉育成中のルディエラにはいまいちわかり辛い。

かううじて判るのは、ティナンもちゃんとルディエラを好きだと思つてくれてることくらいで 最近ではすっかり、ただ憎まれているのではないかと怯えていただけにそれは確かに嬉しい発見だ。

しかし、白黒つけるつて、いったいその言葉の主語はいったいどこだろう?

頭の中で言葉をひっくり返したりこねぐり回しても結論は出できれない。

一人の関係がどうとか言っていたが、兄と妹の関係に何か問題があるものなのか？

「兄さま……違つた、隊長、もしかして具合悪いとか？」

「かなり悪い病氣だが、おまえは気にするな」

「つて、隊長病氣つ？」

慌ててティナンの後を追いかけていきそうなルディエラの手首を捕まえ、キリシュエータは嘆息した。

「いや、悪かつた。ただ少しばかり無理がたたつているだけだ。本当に、微塵も、これっぽっちも気にするな。明日になればもう少し正気になる」

筈だ、という言葉はキリシュエータの口の中で濁された。

最近の彼の副官は、少しばかり信用がならない。  
ことこの妹に関しては。

可愛がつていた妹に対して冷たい態度をとるついに、どうやら思考回路が方向転換をしてしまったようで時々暴走するようだ。

たいていキリシュエータと一人でいる場合のみ暴走していたの生き暖かく見守つていたが、さすがに人前での暴走はいただけない。

キリシュエータの説明に、納得のいかない表情を浮かべたルディエラだったが、それでもその言葉に曖昧にひとつうなずいておいた。

「それより、せつかくだ」

どこか疲れたような嘆息を落としたキリシュエータだが、気持ちを切り替えるかのように唇の端を持ち上げるようにして笑み、軽く白手に包まれた左手を差し出した。

「跳つてみるか？」

するりと上向きに差し出された指先。

ルディエラが軽く混乱状態に陥つていると、慌しく立ち戻つたティナンと騎士達の姿にキリシューハータは片眉を跳ね上げた。

「まあか私にもう一度命令を言わせるつもりか」

きつい声に、しかしティナンはすでに第三騎士団の隊長、もしくはキリシューハータの副官としての顔を取り戻し、一寸胸元に手を当てて一礼し「失礼します」とその耳に唇を寄せた。

「……」

小さく囁かれる言葉にじんじんとキリシューハータの瞳に冷ややかさが灯る。

やがて王子殿下といつ立場では決して歓迎される事のない舌打ちなどを落とし、鋭い眼差しでティナンに「行け」と命じつけ、ルディエラへも視線を転じた。

「戻つて着替える。中庭のベイゼルの下につけ

その緊迫した言葉に何事が起つたのだと理解したルディエラも慌てて相手の言葉に従い着替えの為に廊下に飛び出した。廊下に出れば第一隊の人間もどこかあわただしい。

ルディエラは、はじめてのまつとうな任務らしい任務に胸を高鳴らせた。

「いやいや、喜んでいる場合ではない。

国の 極内輪だけの催しといえども、そんな場で事件など威信に関わるというものだ。

喜ぶなど騎士を目指す者のする」とではない。

それでも軽い興奮を覚え、内股にベルトでつけられた真新しい短剣を意識したその時。

騎士隊の隊舎へと続く渡り廊下へと入ったところでルティエラは廊下の窓からふわりと逃れるものに遭遇した。

宵闇にゆれる金色は 髪、だろう。

ドキドキと更に心音が高くなり、ルティエラは無造作にドレスの裾をたくしあげ、短剣を引き抜いた。

「不審者発見！」

\*\*\*

果たしてぼくはびっくりこんな場でこんなコトをしているんだろうか。  
とこうか、どうしてこんなことになつてしているのかな。

ルティエラは自分が殴つてしまつた相手を前に途方にくれていた。殴つた、と言うのはちょっとばかり控えめな表現かもしれない。とつさに使いたくて使いたくてうずうずとしていた短剣 本日、キリシュエータから拝領したばかりの、太ももの辺りにベルトで固定していた銀剣の後ろ部分で、思い切りガツリとやつてしまつた相手。いい。

蜂蜜のような豊かな髪は細かいウェーブをつけて結い上げもせずに背中にゆれている。腰もある髪だが、あいにくと現在はしゃがんでいる為に地面に直接つてしまつているのが、なんだかもつたいない。

そしてその衣装は、純白に銀糸で縫い取りのされた腰帯で抑えるワンピースのようなもので、肩からはたれ布がかけられている。

宝石類は一切使われてはいないが、その衣装は超一級品。何故なら、その相手は

「リ、リルシェイラ様……大丈夫ですか？」

「 そう思う？」

うずくまっている相手は変質者でも狼藉者でもなく  
け出そうとしていた今夜の主役であった。夜会を抜

H族に対しての暴力行為！

ルティエラの筋肉増量キャンペーンまつさかりの脳みそでも、その事態が気安い状況ではないことを瞬時に理解していた。

H館から少し外れた場では、遠い庭の随所にたいまつの火が揺れているが、ここは少し静かに虫の音だけが聞こえてくる。りりりりと鳴く虫の音と、リルショイラのうめき声。

「あつと血の氣が引き、あわててうずくまる第一王子殿下にして司祭長リルショイラの頭にがばりと手をかけ、更に不敬な態度であることに気がつかないのがルティエラクオリティ。

「うわっ、頭の後ろがペったんこ？　ペったんこになつてる？　え、ああっ、ペったんこのトコでぽこつてなつてる、え、たんこぶ？　え、でもどうしてペったんこ？　なにこれ。どうしようつ。ぎやあ殿下っ」

ペったんこを連呼するルティエラ、リルショイラは口元を引きつらせた。

「「めんね、ペったんこで、絶壁だつ」

リルショイラはべしべしとルティエラの手をはたくようにして拒絶し、痛みで半泣きになりながら恨めしそうに見上げてくる。

「じつせ私の頭はそれはそれは見事な絶壁だよつ」

「ああ、じめんなさこ」

「小ちこじにキーシュが私のことをこつぱに殴つたのが原因だと

思つんだけどね」

どうやら絶壁の頭には相当コンプレックスを持つている様子で、突然殴りつけてきたルディエラを責めるより先に、何故か言い訳のようには第三王子殿下キリシュエータの悪行を暴露する。

拳句、

「好きで髪だつて伸ばしてゐ訳じゃないし。細かいウェーブ作るのだつていちいち面倒くさいんだよ。寝づらいし。でもね、ほつとくと絶壁が目立つんだから仕方ないでしょつ」

聞いてもいないので、自ら傷口をえぐるリルシェイラであつた。

「あれ、もしかして キリ」

熱弁を奮つたリルシェイラはじろじろとドレス姿ルディエラを眺め、未だ手にもつ銀の短剣にキリシュエータの紋章を見て、

「第三隊の……」「？　来月、私の警護隊に入る」  
いぶかしむかのように口にした。

リルシェイラの警護隊。別名をリルシェイラの子守部隊。

主な仕事はしじみちゅう行方をくらますリルシェイラの捜索にあるということは、知られているが公言は禁止。暗黙の了解である。

「あ、はいっ。すみません。ぼく、ルディ・アイギルです」

「やつぱり？　私はね、人間の判断は骨格でするんだよ。だからどんな変装でも結構見破る自信があるんだ。人間の骨は誤魔化しようがないからね。今はとくにドレスだから、体の線が判りやすいからすぐに判つた」

何故か得意げに言つリルシェイラに、思わず

「す」「いですね！ でも、ぼくも負けてませんよ」  
何故か対抗意識を燃やしてしまったルディエラは、ぐっとこぶしを握り締めた。

「ぼく、筋肉で相手を見分けることができるんですつ」「嬉しそうに言うルディエラに、しかしリルシェイラは微妙な顔をした。

「キミつて……変態？」

「何てこと言うんですかつ。筋肉で人を見分けるからつて変態つて、その決め付けはおかしいですよ」

「だつて筋肉で判るつて普通じやないよ」

「それを言つのであれば、骨格で判るのだつて相当普通じやないですよ」

何故か一人で張り合いだしてしまつたが、突然リルシェイラは息をつめ、よろよろと立ち上がりながらルディエラの腕をがしりとつかんだ。

「そんなことより、キミの骨格と私の骨格つて実は結構似てるんじやない？」

べたべたとその腕を触る様子は少しばかり犯罪的。さすがのルディエラも思わず一歩退いた。

「なんですか、唐突に？」

「ちょっとそのドレス脱いでよ」

いいながら突如ルディエラへと詰め寄る相手に、ルディエラは瞳を大きく見開いて「はあ？」と声をあげてしまった。

その声の大きさに、あわてもう片方の手を伸ばしてがばりとルディエラの口をふさぎにかかり、リルシェイラは声を潜める。

王宮から騎士団舍へと続く渡り廊下を外れた地面での珍事に、ルディエラは口をふさがれながら「ぶほほ？」と妙な声を出す。

「そのドレス、ちょうどい

「……なふえ？」

「」の司祭長の衣装だと目立つでしょう？ 私つてば髪も長いしね。ドレス着れば結構女の子としていけると思う。キミみたいにね」 そつと口にかかる指を浮かせてくれる相手に、気を使い声を潜めて それでもきつぱりとルディエラは応えた。

「まったく意味が判らないんですが

「鈍いって言われない？」

リルシェイラは嘆息し、やれやれと首をふりながら更にルディエラへと詰め寄つた。

「私はね、同じじとじろじじつとしていると死んでしまう病なんだ。だといふのに、夜会なんて無理」

「はあ」

至極もつともらしく言つてきるリルシェイラだが、勿論そんな病がある筈も無い。動かないと死ぬのはマグロだけにして欲しい。

「だから、キミのドレスを貰つて逃げます。」「解？」

言つや、ルディエラの後ろに回つこみ、そつとそのドレスの首筋にある留め金をはずしにかかるリルシェイラ 何度も言つよう、相手は第一王子殿下にして司祭長リルシェイラ。

本来であれば問答無用で肘裏を叩きつけ、相手が怯んだところでそのまま足を引っ掛けで張つたおすところだが、相手は腐つても王族 自分の行動の判断を見失つたところで、

「いたそつ」

「殿下つ！」

「殿下発見、簾巻きにしてでもとつ捕まえろつ」

第一騎士団及び、第二騎士団の数名によつて第一王子殿下リルシェイラ捕獲。

「 」

肩口までドレスをひん剥かれかけたルディエラの姿に、第一隊フイルドは嫌そうな顔をしつつ自分の上着を脱いでルディエラの肩に掛けたやうと近づきかけたが、それより先に第三隊副長ベイゼルが自分の上着をさつさとルディエラの頭にばさりと投げかけ、抱え込むようにしてその上からぐりぐりと頭をなでていた。

「「」苦労さん。大丈夫か？」

「ふくちょーつ」

ルディエラは飄々としたベイゼルの態度と口調に、思わずがばりと抱きつき、思いのたけをぶちまけていた。

「ぼくつてばもしかして打ち首ですか！」

「へ？」

「うわあんつ、ぼくはもう駄目ですかああ

「なにがよ？ え？」

幸い、ルディエラが王族への不敬罪を問われることは無かつた。むしろリルシェイラを捕獲することに協力したということで、ルディエラは第一隊の隊員達 約一名を除く に偉く感謝されてしまつたし、キリシュエータも「よくやつた」と褒めてくれた程だ。

「あの、何か事件があつたんじゃないですか？」

と、おそれおそれ問いかければ「あの阿呆兄が脱走を企てただけだ。王宮中の隠し通路を網羅しているからタチが悪いんだ、アレは」とキリシュエータは悪々しそうに顔をしかめていた。

どうやら軍事将軍といえども、兄には苦労させられているようだ。

ルディエラも兄にはちょっとばかり苦労させられているので、なんとなく同情的な気持ちが沸いてしまつ。

あ、でも今日はティナン兄様の心がちょっとびり判つたからいいか。ルディエラはほんの少しだけ前向きにそんなことを思つてみた。

\* \* \*

「ああ、留め金が壊れてしまつましたね」  
セイムが苦笑しながら言つ言葉に、ルディエラはぐつたりと椅子に座つたまま「どーでもいい」と応えた。

はじめのうちこそ丁寧に脱がそうとしていた様子のリルシエイラだが、思いのほかルディエラが抵抗した挙句、他隊員達により発見されてしまつた為、驚いた拍子に引っ張り、ぶちりと壊れただのだ。

なんとか不敬罪を免れ、やつと着替えの為にサロン控え室に戻れた途端、ルディエラは思い切り脱力してしまつた。

僅かにこの部屋にまで夜会の楽隊の音色が聞こえてくるが、そんなことよつと普段の自分に戻りたい。

「どうでも良くありません

「マーティアはぱりぱりと怒りを表し、手首にわざわざ針山などをセツトし、顔をしかめた。

「何してんの？ もう着替えるんだよ？」

「黙つていらして下さい」

最強侍女はギロリと睨みつけてルディエラを黙らせると、手早くルディエラの襟首の辺りを直しに掛かる。もつドレスなど脱ぎ捨てて隊服に着替えてしまいたいルディエラとしては、そんな侍女の行動が不可解でしかない。

救いを求めるようにセイムへと視線を送つてみたが、セイムは笑いを堪えるようにしてそつと首をふる。

すべてを諦めろといつしぐさに肩を落とし、襟首のあたりでチクチクとやられる感触にげんなりとしていると、小さな物音を耳にしてルディエラは視線を上げた。

「はい、これでいかがでしょう？」

「すまないな、マーティア」

静かな物言いで礼を口にしたのは、

「クイン兄さま」

ルディエラは第三騎士団のサロンの控え室だといつことを忘れ、がばりと身を起こして思い切り兄を呼んでしまった。

あわてて口に手を当てたが、考えてみれば未だ夜会は続行中警備はまだ続いている為に、第三騎士団のサロンも人などいないだろつ。

クインザムは共に連れて来たナーナに何事を囁き、妻の許を離れると、穏やかな微笑を称え、そつと手を差し出し、瞳を細めた。

「似合ひじゃないか

「……そう？」

穏やかな口調で言わると、なんだかもぞもぞと居心地が悪いが、当然悪い気はしない。

はにかむように笑う妹に、クインザムは丁寧に胸元に手を当てた。

「着替える前に、一曲踊つていただけますか？」

少しだけ照れくさい気持ちになつて、ルディエラは上目遣いに長兄を見たが、そつと首を振つた。

「ごめん、兄さま。ぼ わたくし、ダンスのレッスンはさぼつてしまつたから」

「ホールに行く訳ではないさ。ここでいい。それなら構わないだろう。私の動きに合わせてござらん」

ちらりと兄嫁であるナーナを見れば、身内しか居ない場と判断したのか、ナーナは頭から掛けていたヴェールを下げ、にっこりとルディエラに励ますかのような笑みを浮かべた。

「足、踏んでもいい？」

「三回に一回踏み返して構わないなら」

ルディエラは抱きつくようにクインザムの手に自分の手を絡めた。

もちろん その様子をハンカチを引き裂きつつ耐えるもう一人の兄の姿があつたりするのだが、それは衝立の向こう側のハナシ。

「ああ、いいんだよ。ここつは最後に風呂掃除をせとわや」

ベイゼルが言った言葉を、クロレルはいつたいてどう判断したのだろうか。

ルディエラは浴室の淵をがしづと掴んだまま、頭がくらくらビビリにかにイッてしまいそうなのをなんとか堪えていた。

今まで深く考えたことは無いが、いつもお風呂は最後だった。それで困ったことは無かった。誰もいない浴場で思い切りのびのびと風呂に入り、それでも最後の風呂だから「お風呂は綺麗に使って欲しいよ、まつたく」などと文句を言いつつも片付けもきちんとしていたのだ。

よくよく考えるまでもなく、ここつた騎士団などでは風呂など大人数で入ることのほうが多いだらう。今までそういう経験がないのは、ルディエラが見習いとして最後に浴場の片付けをするそういう名目があった為だ。

騎士団に見習いとして入ったときからこうなのだから、自分でも疑問にすら思つていなかつた。

もちろん、ルディエラが女であることを知つてゐるベイゼルの配慮なのだが、ルディエラとしては「見習い」はそういうものなのだろうとしか思つていなかつた。

拳銃、いつも掃除つてぼく可愛そうへりへりと思つていていたへりだ。

「なんだ、まだ入つてゐるのかい？」

本日、第一王子殿下リルショイラが隣国への遊説に出立し、残さ

れた第一隊の三分の一を率いるクロ렐は第三騎士団との訓練に入つた。

それにあたり、クロ렐が提案をしたのだ。

「外遊の為に従卒などの人数も減つていて、よければ風呂場を共用させて下さい。風呂洗うのはこっちでやるから」

と、氣さくに言つたのだ。

別段おかしなことではない。何事も経費の削減は唱えられているし、確かにたかが十数名の為に巨大な風呂を用意する手間もある。

ルディエラとしてもどうでもいい部類の提案だ。

いつもと何も変わらない。難点があるとすれば、いつもより風呂の時間が遅くなる程度の話だつたのだが

「長風呂だな」

クロ렐が苦笑と共にルディエラの入つてゐる湯船に足を踏み入れた時、ルディエラの頭の中は完全に真っ白になつた。

クロ렐副長、細いのに腹筋割れるとかそういうの抜きで。

「な、なつ、な……なんでクロ렐副長が？  
ぼく、順番間違えましたか？」

「いや。私はいつもゆっくりと入りたいタチだから最後に風呂を使つてるんだ。大勢がわいわいやつているのもうるさいからね」

湯船の淵にがしりと張り付いているルディエラと違い、クロ렐はそれほど深くない湯船を歩き、一番奥まで行くと、ゆつたりと腰を落ち着かせた。

おそらく、現在はルディエラの頭が見えていることだらう。

肩すらままずいかとルディエラは更に身を沈めながら、半泣きでただ前方を見つめた。先ほどクロ렐が入ってきた出入口の辺りを一

心不乱に。

見た。今、確実に女の子として見てはいけない感じのものを見た。

いや、男兄弟の中に育つたのだから、見たことが無いとは言わない。確かに六歳くらいまでセイムと一緒にになって川遊びもしたから、セイムのだつて見た。

ああ、そうだ。見たことがある。見たさ。はじめてじゃないもんね。なんかでもイメージとちが……いや、深く考えては駄目だ。駄目だつてば。

大丈夫だ。

ルディエラ 大丈夫だ、落ち着け。

こんなことは大騒ぎすることじゃない。

そうだぞ。見たから何だつて言つんだ。  
と、なんだか判らない応援エールを自分相手に必死に送るルディエラだが、すでに頭は煮えている。

せめて手で隠して入つて来てよつ！

心がさめざめと泣いているが、もちろんクロレルにそんな義務は無い。

男しかいない筈の浴場にのんびりと浸かっていた見習いが、まさか女性であると知つていたら、堂々と入つてくることもなかつただろう。

「アイギル、風呂の片付けはやつておくから。先に出て構わないよ  
クロレルが穏やかな口調で言つのを背中から聞きながら、ルディ  
エラはばくばくと鼓動する心臓を宥めた。

「い、いえっ。片付けはぼくがやりますからっ」「いつも風呂の片付けをさせられているんだろ？　たまには構わなこわ」

その親切が仇過ぎる。

本来であれば「クロレル副長はベイゼル副長と違つてす」この親切だつ」と絶賛したことだらうが、しかし今は到底そんな気持ちになどなれない。

「そういえば、最近はフィードといつまへやつてゐみたいだね  
「フィードさんとは仲良しですっ」

無駄に高い声で言いながら、それでも相変わらずがつしりと風呂の淵をつかんでこると、背後からクロレルが喉の奥を鳴らした。

「おじおじ、そんなに緊張しなくてもいいじゃないか。確かに君にしてみれば上官かもしれないけれど、ベイゼルと同じ副長つていうだけだよ」

別の意味の緊張だが、当然そんなことを推し量れといつまうが無理がある。

「それに、半月程は同じ訓練を受けることになるんだから仲良くなさい」と危惧しております。

「うう、半月どころかもう一月と半月です。

ぼくつてば第一隊への移動が確定してますから。でももうつと色々心配なんです。だってぼくリルショイラ様の絶壁頭にたんこぶをこしらえてしまったから。今日辺りまだたんこぶが残つてゐるのではないかと危惧しております。

とこう軽口も簡単には出でこない。

だらだらと汗のような汗が浮かび、一つと頬を流れしていくのを感じ

じながらルディエラはただただ羨望の眼差しで出入り口を見つめていた。

背中だけを見せていれば女だとバレない  
そうだろうか？ 華奢とはいって、適度に筋肉はついているしセイムの太鼓判を押されたまな板胸は……  
ルディエラはつつつつと視線をゆきくじとさげ、 おおと自分の胸元を見てみた。

なんかちょっと最近膨らんでる気がする。

普段であれば喜んだことだらう。

おおと自分で自分の胸を触り「もう絶壁だの足りないだの言わせないからね」と言いたいところだが、今はえぐれていただとしても大歓迎。

自分で自分の胸を包むように触れ、ルディエラは肩を震わせた。  
いやいやいやいや、ちょっと頼りない胸筋で押し通せるんじゃないかな。湯気だつてたつているし！

ルディエラは意を決し、おおと背後のクロレルの様子を伺う為に振り返つてみた。

壁側に頭を預けるようにして入浴中のクロレル副隊長は、実にのんびりとした様子で頭にタオルをのせて目を閉じている。  
それを見た途端、ルディエラは瞳を輝かせてくるじと前方へと視線を戻し、一気に退路へと思想をはじけさせた。

気配を消して音をさせず、湯船から出で一気に脱衣所へという動きが頭の中で再現される。何も言わずに逃げるように出て行くのは実際に失礼だが、脱衣所とこの浴室とをつなぐあの扉の向こうから顔だ

けを出して「お先に失礼します！」と言いつ切れぼのリッシュショーンは完璧にコンプライードだ。

よし、大丈夫だ。

ぼくならやれる。身の軽さには自信がある。

まずは湯船を軽やかに出るのだ、ルティエラ！

「そういえば、今日の訓練では 」

湯船の淵に手を掛けようとした途端、背後から掛けられた言葉に危うくルティエラはするりとすべりて顎を打ち付けそな程に動搖した。

バシヤンと無駄に大きな音をさせて手が湯を叩く。それに驚いたクロレルが瞑つていた目を開けた。

「アイギル？ 風呂場では暴れるなよ

「す……すいません」

「もう子供ではないのだから。まさか泳いととしていた訳じゃないだろうね」

そんなことはしていません。

ルディエラは背中を向けたまま棒読みで返しながら心の中で涙を流した。

先ほどまで頭の中で描いていた「第三騎士団浴場脱出作戦」ががらがらと音をさせて崩れしていく。

こんなにも困難な作戦は今までに無かつた。

「今日の訓練で怪我をしただろ？ 大丈夫だつたかい？」

「ああ……あれば、だいたいいつもあんな感じですか？」

昨日、優しかったティナン兄は、日付をまたいだ途端に鬼隊長に戻っていた。

それを思つとルディエラは湯船の淵に落ち込むように顎を預けた。判つていたことだが、兄の豹変振りはある意味賞賛に値する。そこまで公私を分けることができるのは立派だ。

ただ、ルディエラにしてみれば寂しいが。

ふと、本日訓練中にルディエラが怪我をした時のティナンの何ともいえない表情を思い出してルディエラは身震いしてしまつた。

剣先をよけきれずに一の腕を切つたルディエラに舌打ちし「愚か者、この程度よけずにはどうする。貴様は幾度死ぬ気だつ」と怒鳴られるのはいつものことだ。だが、今日のティナンはルディエラの傷口をぐつとつかみ、自分の塗れた白手をぺろりと舐めた。

そのしぐさが……腹の奥が冷える程に怖かつた。

そう、怖かつた。

その凄絶さを振り払つように、ルディエラは軽く首を振つた。

「あ、でもぼくよりフィルドさんのほうが酷くやられてた気がしたけど フィルドさん大丈夫かな」

ルディエラはがばりと顔をあげ、視界に入る脱衣所と浴室とを隔てる扉が押し开かれるのを見てしまつた。

そう、脱衣所のほうから开かれるさまを。

「ああ、フィード。おまえも風呂最後か」

クロレルの言葉に、ルディエラは更に深く湯船に沈んだ。

\*\*\*

「家族といつのは、どうせやつたら判別が利くものだろ？」  
王都から馬で駆けて一刻程の場所に作られている寄宿学校等の一角に、その塔は抜きん出た高さを誇つて存在する。

別名【賢者の塔】　国で一番の蔵書を誇る図書館であり、資料館であり、そして限られた研究者達が研究にいそしむ為の地。

突然現れた三男ティナンの言葉に、四男ルークはしばらく兄を見つめ。

「どうち？」

と返した。

「……どういう意味だ」

「上、下？」

無表情で言われる言葉をじっくりと吟味し　ティナンは額に手を当てた。

「下」

「……半年と一十一日ぶりだ、ティナン兄さん」

「おまえまでもくとクインズムを見分けるのが困難なのか」  
確かにティナンとクインズムは似ているといわれているが、だからと云つてやうやう間違えられることは無い。クインズムの方が身長は高いし、持つている雰囲気といえば冷徹。あの兄と一緒にされるのは、あまり良い気がしない。

「困難とは言つていない。面倒なだけだよ」

ルークは言いながら小首をかしげた。

歴代三位の若者で【賢者の塔】入りを果たした青年は、時折理解不能な言動をとる。

腰まである髪をゆるい三つ編みにしているルークは、外見を気にかけている訳ではなく切るのが面倒という理由で髪を伸ばしている無精者だ。

「で、何しに来たつて？」

「家族の判別は何か無いかと思って。たとえば 血の味が、違うとか」

ティナンはふとルディエラの血を舐めた時の味を思い出し、小さく笑った。

ルディエラの一の腕を傷つけ、そこからあふれた血に胸が激しい痛みを訴え、その血が自分の右手を汚したのを見た時、無造作に舐めていた。

自分の血の味と違う気がした……酷く甘い気がして、何故か落ち着かない気持ちで弟を訪ねてしまつたのだ。

血の味など、判りようもないのに。

そんなことで判るのであれば、王族の処女判定など必要はない。自分で判つてはいるのだ。

「安心して。クインとティナンは間違いなく兄と弟だ」

ルークの言葉に、ティナンは引きつった。

「誰がそんな心配してますか」

「けど、ぼくとルディは違うかもしねないな」

ルークの言葉に、ティナンは息を詰めた。

とくとくと心臓が激しく鼓動する。まさかずばりと確信をつくよくな言葉をルークが言うとは思つていなかつた。

耳鳴りまでしてきそうな緊張に、口の中が乾いてくる。

「ぐつと生睡を飲み込み、ティナンはぐつと  
つくりと問いかけた。

「その根拠は？」

「ぼくと兄妹にしては、ルティニアは黙認するわ」

「……」

「じつじいだよ。

ティナンは激しい脱力を覚えたが、おわりにキロシユータがいた  
のであれば「おまえもな」と付け足してくれたことだ。

あの光景は、ある意味凄絶。フィルド・バネットは所々痛みを訴える腕を軽く揉み解しながら、慣れない渡り廊下を歩いていた。

午前中に他国へと遊説に行く第一隊の三分の一の面子と第一王子殿下リルシェイラを見送り、その後は第三隊の訓練に参加した。初日ということもあり、全員の顔を覚えられるようにと第三隊と第二隊の三分の一の人間全てでの訓練は、隊長副隊長も交えての打ち込みとなつた。

使用されている剣は訓練用の刃をつぶし模造剣だ。そんなものでも、突けば刺さるし、かすれれば切れることがある。

それにしても、第三隊のティナン隊長の鬼畜つぶりが今も日に焼きついている。

突きつける切つ先、ふつと一度止めてこちらの安堵を誘つた途端に容赦なく振り切られる模造剣。

何度も言つが、刃がつぶされているといつてもそこまでする人間は少ない。まるで憎まれているのかと疑う程の鋭さ。思い出しへぶるりと身を震わせ、そしてフィルドは顔をしかめた。

血が、滲んでいた。

ティナンの操る模造剣がルディ・アイギルの腕をかすり、その先端が隊服の袖を引っ掛けた。その反動で生身の腕を傷つけたのだろう。

一の腕の辺りに血が滲み、明るいオレンジ色の小生意気な子供は歯を食いしばり、それでも相手に立ち向かうかのように自らの剣先

でティナンの剣を跳ね上げようとした。

しかし、ティナンはそれを自らの剣で逆に弾き、あらうことかあのチビ助の腹を蹴りあげ、血が滲む腕をつかみ上げたのだ。

「愚か者、この程度よけずにはづくするー、貴様は幾度死ぬ気だつ」

轟く罵声に身をすくめたのは一人や一人ではない。

噂には聞いていたが、これは確かに、虚めと謗られてもおかしくはない光景だろう。第二隊の副隊長であるクロレルが、小さく舌打ちするのをフィルドははじめて聞いた。

ティナン隊長は特別待遇で途中入隊したルディ・アイギルに厳しくする。

本来であれば、たとえそういう話を元に虚めがあつたとしても、隊員同士のことだろう。悪しき慣習ともいえるが、叩き潰そうにも人間の悪感情など叩き潰せるものではない。だが、ティナンの所業が原因か、幸いルディ・アイギルは個人的な悪意を向けられてはいないといつ。

ただただ、第三隊隊長ティナンに激しい訓練といづかの悪感情を向けられているのだ。

丁度切られた箇所をつかみ上げたティナンの白手が滲むように朱に染まる。

そのぬれた手を、ティナンは冷たい眼差しで自らの顔へと向け、ペロリとその舌先で舐め上げた。

その姿に、ぞくりとしたものがフィルドの背筋を駆け抜けた。

寒気のような、嫌悪のような、怒りのような、奇妙な感情が腹の中でざわざわとわきあがる。

まさかその後で自分もティナンに叩きのめされるとは思つていなかつた。

もしかしてあの隊長は誰に対しても同じなのかと思つたが、

「違うな……」

明らかに厳しい訓練をさせられたのはルディ・アイギルとフィルドの二人だけだった。

「何か恨みでも買つたか？」

嘆息を落としながらフィルドは慣れない第三隊の浴場の扉を開いた。

普段は第一隊の隊舎に作られている大浴場を使用しているが、たかが十名足らずの第二隊の人員の為にそこを使うのはもつたいないと第一隊のもつたないお化けクロレルが提案したのだ。

本日の打ち身が原因で風呂時間が遅れたが、クロレルのことだからさしつとまだ入浴中だらうとふんだ通り、親愛なるクロレル副長殿は湯船にどっぷりと浸かつっていた。

ルディ・アイギルと共に。

顎下まで湯船につかりつつ、ルディ・アイギルことルディエラは目線をぐっと下げた。

男という生き物はどうして堂々と浴室に入つてくるんだ。隠すとこはちゃんと隠せ。羞恥心が無いのか。それともまったく別問題なんか。

ルディエラは頭の中で呪いの言葉を羅列しつつ、湯船の淵をしつかりとつかんだままの自分のふやけた手を見ていることしかできない。

視線を上げると、フィルド・バネットの引きつった顔が入る前に

その裸身に目が行つてしまいそうだ。

筋肉だけならいくらでも見たい。盛り上がりがつづやつやとした麗しい筋肉達であればいくらでも。

だが、パンツはぜひとも穿いておいて欲しい。

「アイギルつ」

フィルドがぎょっとしたように声をあげ、ルディエラは視線を落としたまま不機嫌に「どうも」と返答した。

ここで不機嫌さを出すことは得策ではないが、もうなんだか自棄になつていく自分がいる。

せめて浴室にタオルでも持ち込めば良かつたと今更ながら後悔してしまうが、もともとそんな習慣は無いし、何より普段であればルディエラは一人で悠々自適な入浴時間をするとしていたのだ。

それもその筈。

ルディエラがのんびりと浴室でほうけている間、いつもであればベイゼルが脱衣所で一人番人よろしくカード占いなどして時間を潰していた。

だが生憎と、本日は第一隊の面子も第三隊の大浴場を利用した為に、時間にズレが生じてしまっていたのだ。

ベイゼルの親切心など欠片程も気づいていない脳内筋肉ルディエラはベイゼルの存在など完全無視で風呂場に来ていた。

「何してるんだお前つ」

思わず風呂場でルディエラに遭遇してしまったフィルドがギョッとして声を荒げると、湯船の奥、窓際で座っていたクロレルが嗜めるように口を開いた。

「フィード、ここは第三隊の浴場だ。アイギルがいたつておかしくはないだろう」

言われるまでもなくその通りだが、ルディエラに對して色々な感情を持つてゐるフィードは顔をしかめ「肩まで浸かりなさい」と奢められた子供のよう、どつぶりと湯に沈んでいる明るい髪を見た。

すでに洗われたと思わしきオレンジ色のよつた髪は艶々と塗れてぺつたりと張り付いている。

その髪は絶対に石鹼だけではなく仕上げに卵の黄身を使つてゐるだろう。最近貴婦人ばかりでなく、軟弱な男も使つてゐると聞くが、嘆かわしい。

湯に触れた髪の先端がふわふわと湯の中に泳ぎ、何故かうつむき加減の糞ガキは湯中りでもしてゐるのかと馬鹿にしてやりたくない程頬が赤い。

「……おまえ、どれくらい入つてゐるんだ？」

思わずフィードは眉間に皺を刻み、自分も湯船に足を踏み入れながら言いつつ つと上げられた透明な眼差しに、狼狽した。

「ぼく長風呂なんですっ」

言つた途端に、ルディエラは視線をまたしても落とす。

危うく相手の裸を凝視しそうになつてしまつての行動だつたが、フィードは一瞬あげられた濡れたような瞳と、赤い頬に どくんつと心臓が爆せるのを感じ、あわてて湯の中に体を沈めた。

なにを考えてるのだ私は！

このところアレは男だと呪文を唱えてゐる自覚のあるフィードは、思い切り近くの壁に頭をがんがんと打ち付けて、自らの思考を全て粉碎してしまいたい衝動にかられていた。

違う、絶対に違う。自分は女が好きだ。

たとえ、この糞ガキの女装が似合つていたとしても。その唇が柔らかかつたとしても！

何があのひつと男など御免ひつむる。

私は変態じやないつ。

「アイギル、私より先に入つていただろひ？ 本当に大丈夫か？」  
クロレルが苦笑交じりに言いながら体を洗う為に湯船を出ると、ルディエラはまた違う方向に視線を向けつつ「はいっ。ぼくいつも半刻くらいお風呂入つてるんですつ」と言い切つた。

なんとなく居心地の悪いフィルドは、先ほどクロレルがいた場所に移動し、壁に背中を預けるルディエラの頭をじつと見つめた。

クロレルがしきりに話しかけている言葉に応える為か、沈んでいた肩が浮き上がり、その体に髪がべつたりとまとわりつく。少し長い髪は首の下辺りまであり、最近はうつとうつして、ひつひつに良かきあげていてのを目撃していた。

その髪をベイゼル・エージ副長ががしがしこき回しているのも良く見る光景だ。

それを見ると、なんとなく……そつ、なんとなく、イラダシような気がしてしまつ。

今日も、怪我をした糞ガキの腕をティナン隊長が突き放した後、ベイゼルはさつさと反対側の腕を引き上げてルディ・アイギルを医務室へと引き立てていつた。口は悪いが面倒見の良いベイゼルに、糞ガキはなつていていたようだ。

湯からこじもりと出た肩をよく見れば、痣が目立つ。

湯船の淵にのせられた一の腕には本日切れたであろう擦過傷、痣おそらく、腹や背にも眉を潜めてしまいそうな痕跡が見られると

思つと、フィルドの視線は自然と湯の下に続く背へと向けられてい  
く。

細い肩は未だ未発達な子供のソレだ。

確か、年齢は十五だとか聞いたが、まだぜんぜん子供じゃないか。その子供相手に苛立ちを抱えている自分に顔をしかめ、フィルドはその華奢な背中にある痣に、ふつと手を滑らせた。

「痛そうだな、大丈夫か？」

ほんの少しの歩み寄りのつもりで掛けたものに、けれどルディエラは「うわああああっ」と悲鳴をあげ、まるで海老のような動きでずわざわざわざと風呂桶の端へと逃げた。

「なつ、何するんですかっ！」

ルディエラの立つ向こう側でクロレルがガシュガシュと頭を洗いながら「風呂場で騒ぐなよ」と笑いながら言つてはいる。

「痛そだから触つただけだ」

あまりな反応にムツとして言えば、糞生意気な小僧は大きな瞳で睨みつけてくる。

「痛そだから触つて、人が嫌がることをするのは駄目人間です  
からねつ」

つて、それはお前だろつ。

素で突つ込みを入れてしまいそうになつたところで、フィルドは眉を潜めた。

ルディ・アイギルの目が重そうにとろんとしているし、頬は赤い。良くなれば肩なども真っ赤になつてはいるではないか。

なんだか色っぽい……いや、そうじゃなくて。艶っぽい。  
だから、そうじゃなくて！

「おまえ、本当に湯中りしてないか？」

何故そんなに意地になつて風呂に入つてるんだよ。  
言おうとした途端、湯に浸かっている糞ガキの体がぐらつとかしい  
だ。

＊＊＊

「アイギルしらね？」

ベイゼルはがしがしと頭をかきつつ食堂で部下の一人に問いか  
けた。残務処理など大嫌いだが、ティナンの姿が無いために、仕方  
なく仕事をきつちりとこなしたまでは良かつたが、気づけば問題児  
の姿が無い。

風呂に行く時はいつもベイゼルの後だから安心していたのだが、  
そもそも今日は風呂の時間が大幅に変わつてしまつていた。

ベイゼルが「風呂行つて来いよー」と言つまでもなく、

「ああ、風呂ですよ。さつき入るよう伝えておきましたから  
と、親切なコーディンが顔をあげると、ベイゼルは「ゲツ」と思わず  
呟いてしまつた。

「つたく」

第三隊の大浴場へと向かう渡り廊下を歩きながら、ベイゼルは自  
分の髪を両手でがしがしこき混ぜながら「面倒なことになつてね  
えだらうなー」と半ば冗談で口にしていたのだが、脱衣所の扉に手

を掛けた時の時

「ひわああああっ」

と聞こえるその声に、ベイゼルはがっくっと顔を落とした。  
色氣のねえ悲鳴。

「ひてか、こつちがうわあまだ

「みさわかくせえええ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8036s/>

---

王道で行こう!

2011年10月10日13時29分発行